平成17年度

# 大阪市内埋蔵文化財包蔵地
# 発 掘 調 査 報 告 書

2006.9

大阪市教育委員会
㈶大阪市文化財協会

# 例　　言

1．本報告書は平成17年度の国庫補助事業による大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたもので、平成18年度事業により作成した。

2．これらの調査は大阪市教育委員会が㈶大阪市文化財協会に委託して実施したものである。

3．本報告書の執筆は㈶大阪市文化財協会　田中清美の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告に記してある。

4．本報告書の編集は大阪市教育委員会文化財保護課において行った。

# 目　　次

Ⅰ 北　　区

西天満３丁目所在遺跡発掘調査（ＷＴ05－１）報告書 …… 3

Ⅱ 中 央 区

難波宮跡・大坂城跡発掘調査（ＮＷ05－１）報告書 …… 11

難波宮跡・大坂城跡発掘調査（ＮＷ05－６）報告書 …… 15

上本町北遺跡Ｂ地点発掘調査（ＵＮ05－１）報告書 …… 19

難波１丁目所在遺跡発掘調査（ＮＡ05－１）報告書 …… 27

日本橋２丁目所在遺跡発掘調査（ＮＰ05－１）報告書 …… 33

Ⅲ 天王寺区

伶人町遺跡発掘調査（ＲＪ05－２）報告書 …… 39

Ⅳ 東淀川区

三宝寺跡伝承地Ｃ地点発掘調査（ＳＰ05－１）報告書 …… 59

Ⅴ 生 野 区

勝山北１丁目所在遺跡発掘調査（ＫＵ05－１）報告書 …… 67

Ⅵ 旭　　区

森小路遺跡発掘調査（ＭＳ05－１）報告書 …… 75

Ⅶ 住 吉 区

山之内遺跡発掘調査（ＹＭ05－１）報告書 …… 81

住吉行宮跡発掘調査（ＳＮ05－１）報告書 …… 85

Ⅷ 東住吉区

桑津遺跡発掘調査（ＫＷ05－１）報告書 …… 93

桑津遺跡発掘調査（ＫＷ05－２）報告書 …… 99

# Ⅰ　北　　区

# 西天満３丁目所在遺跡発掘調査（ＷＴ05－１）報告書

・調 査 個 所　大阪市北区西天満３丁目19－8
・調 査 面 積　約80㎡
・調 査 期 間　平成17年5月26日～平成17年5月31日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　田中清美、藤田幸夫

〈調査に至る経緯と経過〉

西天満３丁目所在遺跡の発掘調査は、今回の調査地の北東でＷＴ04－1次調査（図1）が実施されている。調査では、地表下４ｍ（ＴＰ０ｍ）以下で、古代の包含層が確認されている。包含層は数枚確認されており、７世紀前半や５世紀後半の遺物が出土している。今回の調査地においては、大阪市教育委員会によって事前に試掘調査が実施されている。その結果、地表下２ｍ前後で17世紀前半の遺構面が確認され、それ以下については砂礫層が堆積することが確認された。この試掘調査の結果を受けて本調査が実施された。

調査の方法は、地表下２ｍまでを重機で掘削し、それ以下については人力で掘削した。なお、調査地は既に地中杭が打設されているため、調査区はその杭の間に設定した。地層断面の観察は、杭および改良剤等によってあまり影響を受けていない東壁で行った。調査の実施に当っては、大阪市教育委員会より地表下４ｍまでの掘削を指示されており、調査期間等を勘案して近世の遺構面については簡易な記録に留めた。

調査は５月26日に重機での掘削を開始し、５月31日に埋め戻し、資材の撤収を行い終了した。

図１　調査地位置図

図２　調査区配置図

〈調査の結果〉

1．層序(図3)

第0層　近・現代の堆積層である。

第1層　黄褐色～暗黄褐色のシルトで、江戸時代後期以降の堆積層である。

第2層　黒褐色のシルトで、層厚約10cmである。この層の上面までを重機で掘削した。本層中あるいは、上面から掘り込まれた遺構から図4・5に示す遺物が出土した。これらの遺物は17世紀前半のものであった。

第3層　褐色から明褐色の中粒砂～細礫である。地表下4.5mまで掘削したが、砂礫層が続いていた。したがって、層厚は2.8m以上である。なお、この層中からの出土遺物はなかった。

2．遺構と遺物(図4・5)

ここでは、第2層からの遺物をとりあげる。

1～23は土師質土器である。1～19は皿で、口径は9.0cm～11.2cmで、器高は1.2cm～9.0cmである。口縁部の内外にススが付着するものが多い。20～23は炮烙で、直径23.0cm～25.0cmのものである。24～26は、瓦質土器である。24は筒形の香炉であろうか。25は火鉢で外面に花文の印刻を施す。26は火入れで、口縁部の端面は水平な面をなす。27～40・42は陶器である。28～31、34、37～39は肥前系陶器である。その内、28・29はいわゆる京焼風の碗で、高台内面に「清水」の印刻が見られる。30・31は透明釉がかかり、34の外面および37～39の内面には銅緑釉が施釉されている。なお、内面

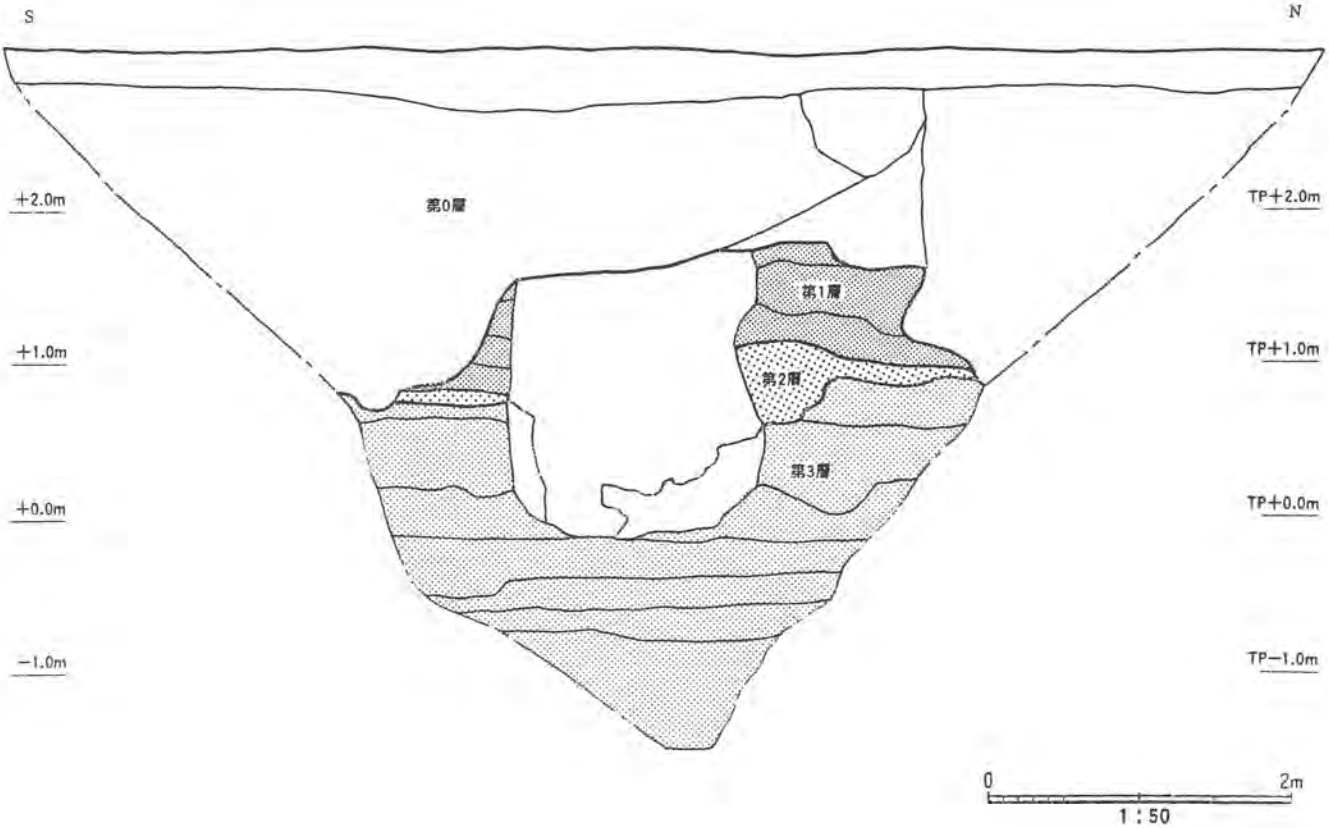



図3　東壁断面図

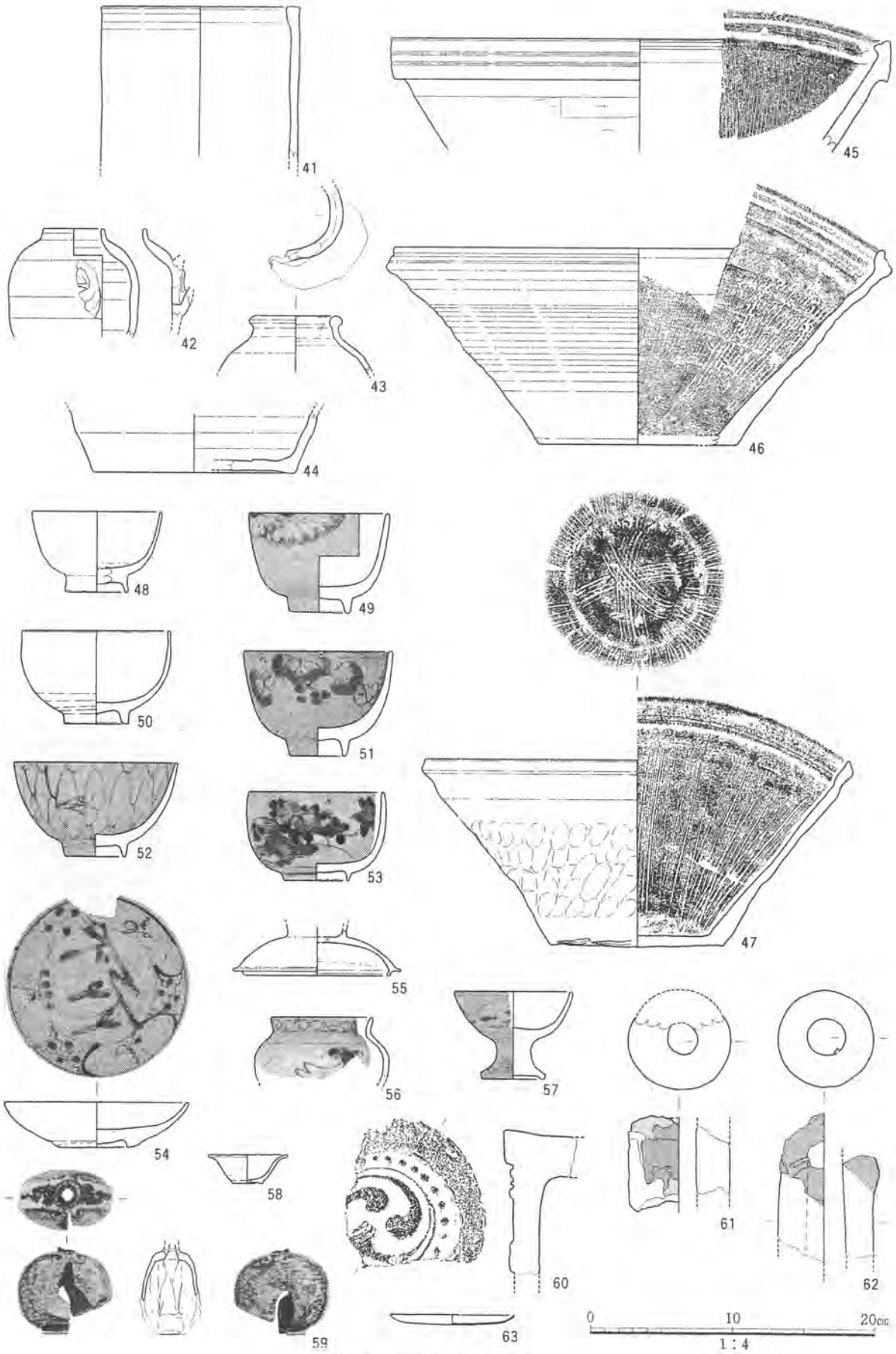

41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
0
10
20cm
1：4

図4　出土遺物実測図（1）

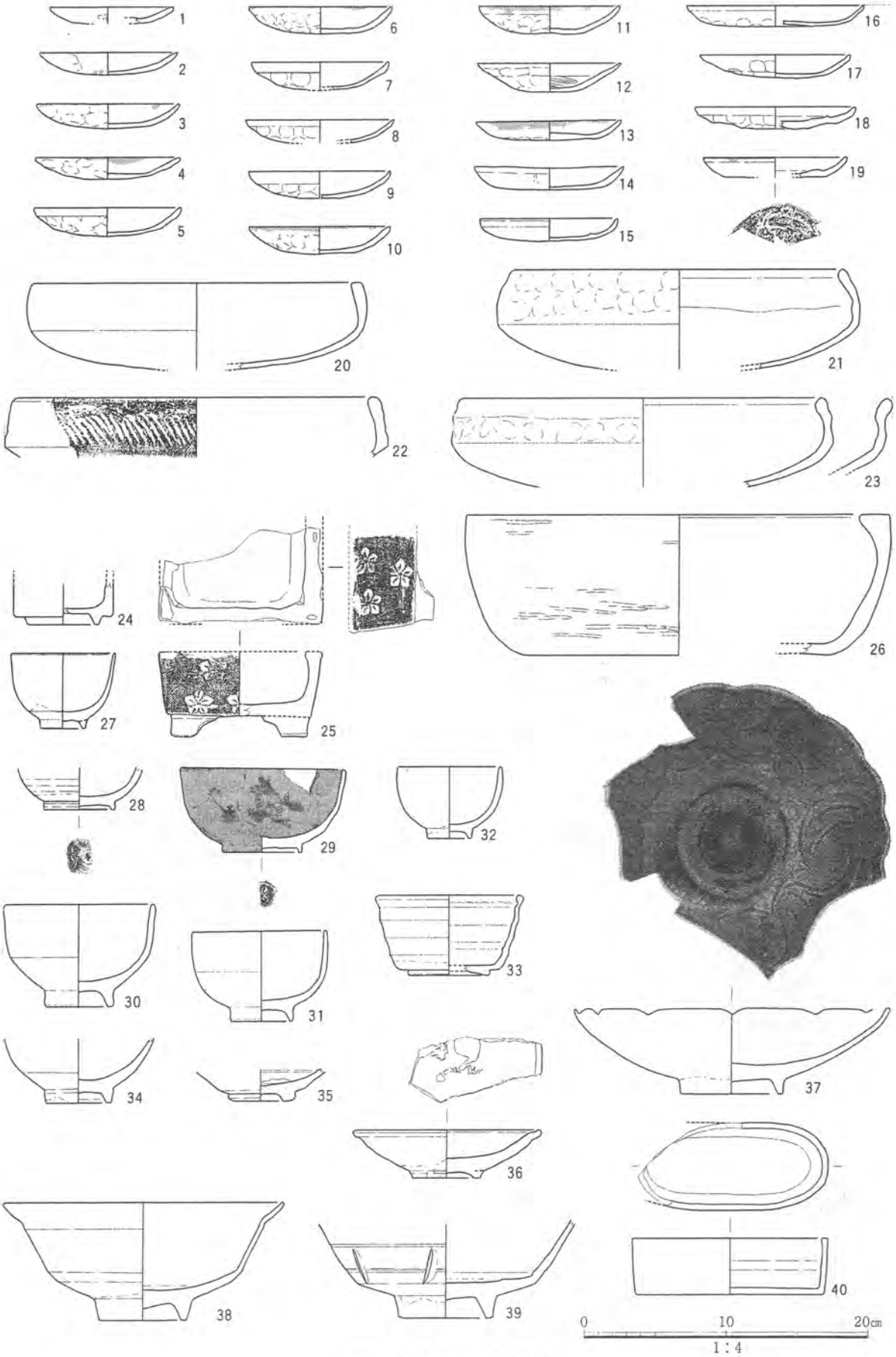

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
0
10
20cm
1:4

図4　出土遺物実測図(2)

の銅緑釉は蛇の目釉剥ぎされている。32は瀬戸・美濃焼の小碗で、飴釉が施釉されている。42は瀬戸・美濃焼の水注である。33は関西系陶器の香炉で、外面および口縁部内面に透明釉がかかる。27・35・36は唐津焼で、27・35は碗で、36は皿である。35・36の見込みには砂目が残る。40は軟質施釉の鬢水入れである。41・43・44・46・47は丹波焼である。43は片口となる水注で、44は壷の底部である。46・47は擂鉢である。45は、明石あるいは堺の擂鉢である。48～59は肥前系磁器である。48～53は碗で、54は皿、55は蓋、56は小壷、57は仏飯器、58は口縁部が輪花であり、紅皿の可能性がある。59は水滴で表面に文様を浮き彫り風にしている。50・54の高台底部には砂の付着が認められる。59は巴文軒丸瓦で、61・62は羽口である。63は銅製の皿で、直径8.7cm、器高0.7cmを測る浅いものである。以上の遺物から、第２層および上面の遺構は、17世紀中葉前後に形成、構築されたことが確認された。

〈まとめ〉

本調査では、地表下4.5m(TP−1.5m)まで掘削したが、ＷＴ０４－１次調査で確認された古代の包含層を確認することはできなかった。この問題については、、周辺部の今後の調査で明らかにしていきたい。

第３層掘削状況
（東から）

掘削後全景
（東から）

掘削後
（東から）

# Ⅱ　中　　央　　区

# 難波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW05－1）報告書

・調査個所　　大阪市中央区上町１丁目19－17・18
・調査面積　　約20㎡
・調査期間　　平成17年８月２日～平成17年８月9日
・調査主体　　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　田中清美、高橋工

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は難波宮跡公園の南に位置し、1993年度の調査で前期難波宮の宮城南門とされる遺構[大阪市文化財協会2004]が発見された市立聾学校の南に隣接する(図１)。当該地で住宅の建設工事が計画されたため、大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下ごく浅くで地山層が検出され、遺構が残存する可能性が考えられたために発掘調査を行うこととなった。

調査は２個所に分けて設定し、それぞれ北区、南区とした。掘削は、現代の客土について重機を用いて行い、近世より古い地層は人力で行った。発掘調査は８月２日に着手し、同月３日に掘削・記録作成作業を終了、同月９日に埋戻しを完了して撤収を行った。調査で使用した水準値ははT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP+○m」と記した。本報告では磁北と座標北、２種類の方位記号を用いている。

〈調査の結果〉

１．層序と遺物(図２、図版－下)

本調査地と北側の聾学校敷地とは、高さ約2.8mの擁壁を介して調査地側が低くなっている。調査区内で認められた地層は以下の通りである。

第０層：厚さが最大で80cmほどの表土層である。図示はしていないが、南区南側では２層に細分することができた。上層は現代の盛土層であるが、下層からは多量の焼土に混って第２次世界大戦時のガラス瓶などが出土したことから、戦災の後片づけに伴う盛土層と考えられる。

第１層：灰色細～中粒砂からなり、第２層(地山)に由来する中礫大の偽礫が多く混る盛土層で

図１　調査地周辺図

ある。上面は著しく削剥されて凹凸があるが、層厚は最大で25cmである。層中から関西系陶器の土瓶2(図4)が発見された(図版－下)。土瓶は正置された状態で出土し、内部にはその蓋1があったことから、盛土中に埋め込まれた可能性がある。土瓶2は19世紀に属することから、本層の年代も同時期に求められる。

第2層：暗赤褐色細～粗粒砂からなる地山層である。砂質で、かつ、かたくしまっており、上面はかなり削平されているものとみられた。

2．遺構と遺物(図3・4、図版－上・中)

北区の東南部、南区の東南部を除いて調査区の大部分は攪乱をうけていたが、第1層の基底面でピットSP201と落込みSX201を検出した。ピットは北区、落込みは南区のそれぞれ東壁際にあった。

SP201は直径20cm、深さ40cmで、埋土は第2層の偽礫が混じる灰褐色粗粒砂であった。上位層の年代から、19世紀より古いことは確実であるが、出土遺物がなかったため、詳細な時期は不明である。

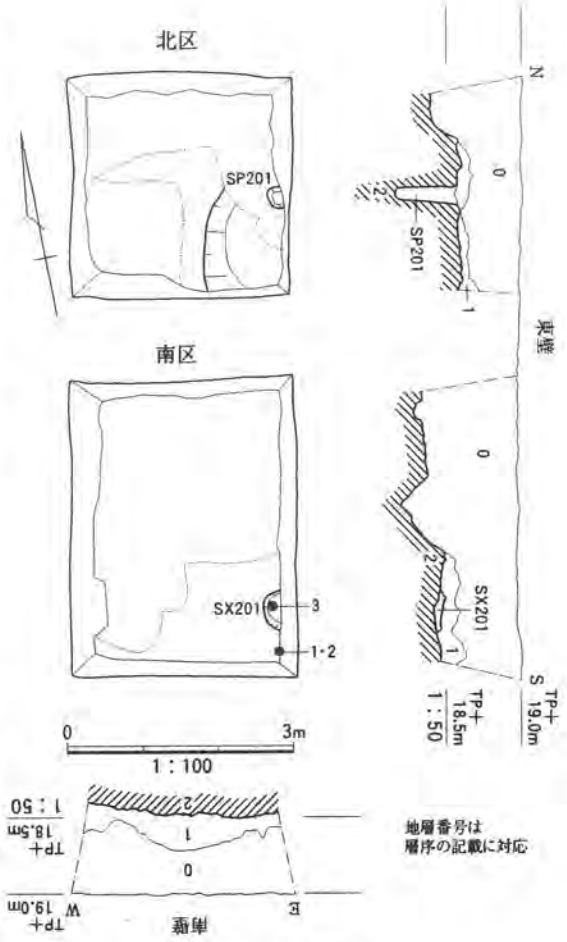



図2　遺構平面図・地層断面図

SX201は南北56cm、東西30cm以上で、深さ6cmを測る。埋土は橙色細粒砂であった。何らかの遺構の上部が削平された残欠と見られる。埋土の中から須恵器蓋3・4が出土した。これらはTK23型式に属し、遺構の年代は5世紀後半である。

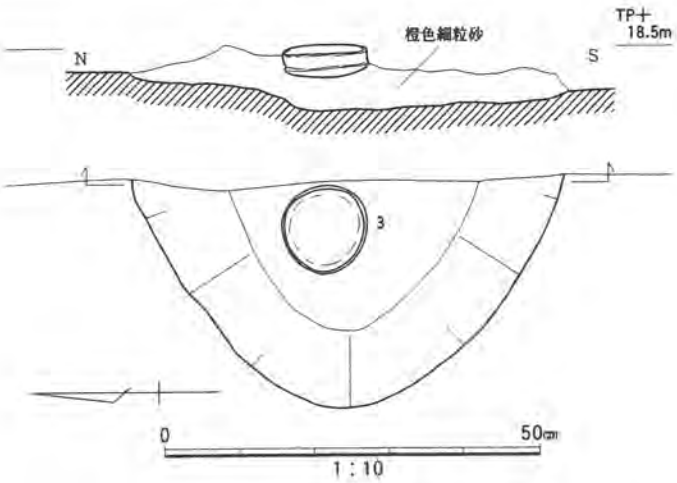



図3　SX201平面図・断面図

〈まとめ〉

今回の調査では、5世紀代の遺構が発見された。難波宮造営前の遺構は北に接する聾学校敷地内でも検出されており、その時期は6～7世紀を主体とするが、5世紀の土器も出土している[大阪市文化財協会2004]。それらをあわせて考えると、本調査地のSX201は、難波宮造営前のこの地域での集落の形成が5世紀に遡ることの証左といえる。

次に、本調査地と聾学校間の崖状の現地形がいつ頃形成されたかについて考え

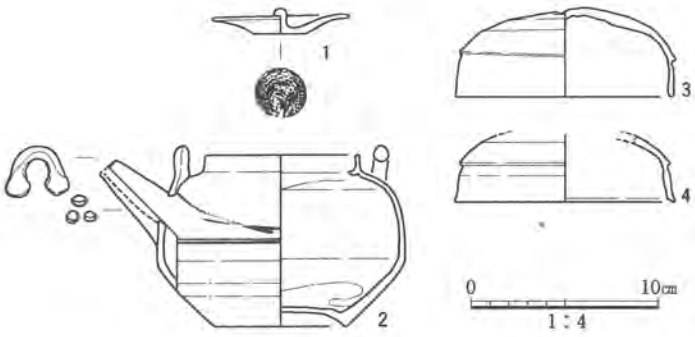



図4　出土遺物実測図
第1層(1・2)、SX201(3・4)

てみる。聾学校敷地内の調査では地山が南に向って下る地形であることがわかっており、その傾斜は水平距離30mに対して約2mとかなり急である[大阪市文化財協会2004]。この傾斜が本調査地と聾学校間の崖状の現地形の原因である。NW93−5次調査地の成果から、この傾斜を解消する擁壁の裏込めは現代の盛土であることがわかっている。その下位にあり、最大層厚60cmの盛土(NW93−5次調査地の第3層)は近世後期とされていたが、岩相や層厚、標高からみて今回調査の第1層に比定され、その年代は19世紀といえる。したがって、南下りの地山の傾斜は19世紀にはまだ解消されておらず、現代の擁壁工事に伴って平坦化されたものと考えられるのである。

参考文献

大阪市文化財協会2004、「宮殿南方地域の調査」：『難波宮址の研究』第十二

調査区全景
（南から）

調査区全景
（北から）

層序と遺物の出土状況
（西から）

# 難波宮跡・大坂城跡発掘調査（ＮＷ05－６）報告書

・調 査 個 所　大阪市中央区安堂寺町１丁目31−7
・調 査 面 積　約9㎡
・調 査 期 間　平成17年9月29日～平成17年9月30日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　田中清美、藤田幸夫

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は難波宮朝堂院の南西に位置し、同地の西側で実施したNW00—6次調査では、難波宮期の南北柱列が検出されている（図１）。今回の調査地においては、本調査に先立って大阪市教育委員会により試掘調査が実施された。その結果、現地表下0.5ｍで、地山面が検出され、難波宮期の遺構・遺物の存在が想定されたため、２日間の本調査を実施した。

調査区は、残土を敷地内に仮り置きするために敷地の南側に設定した（図２）。

調査の方法は、近・現代層を重機で掘削し、それ以下については人力で掘削した。

なお、本報告で用いた方位は磁北で、標高は東京湾平均海水面値（ＴＰ値）である。

〈調査の結果〉

１．層序（図３）

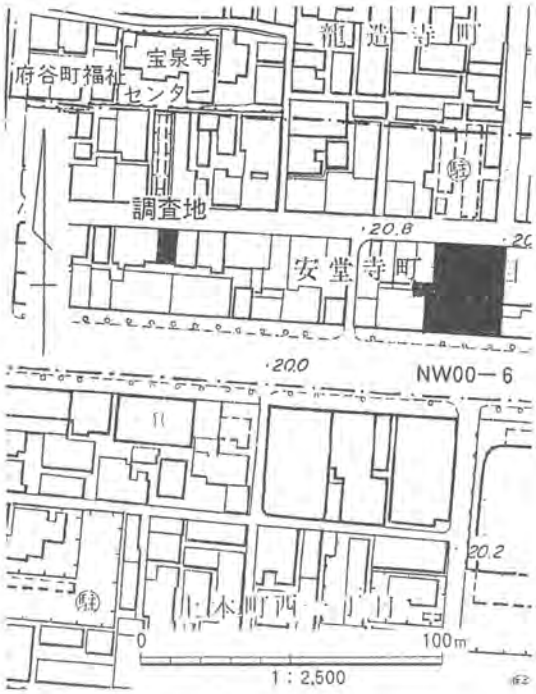



図１　調査地位置図（Ｓ＝１：5000）

図２　調査区配置図

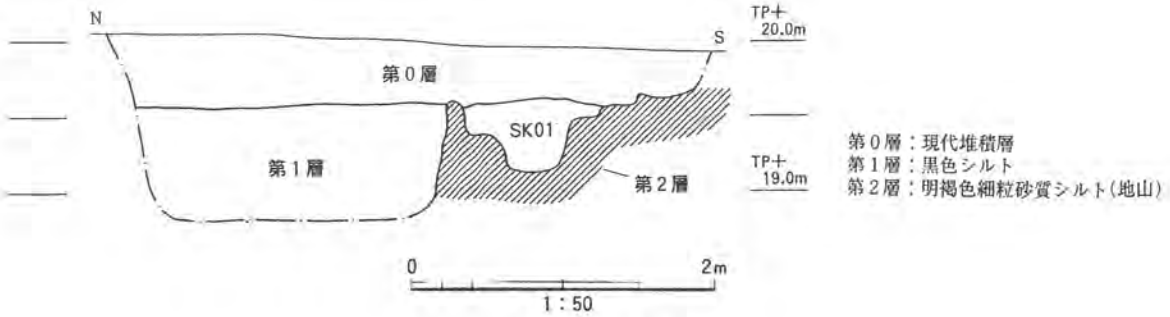



図3　東壁地層図

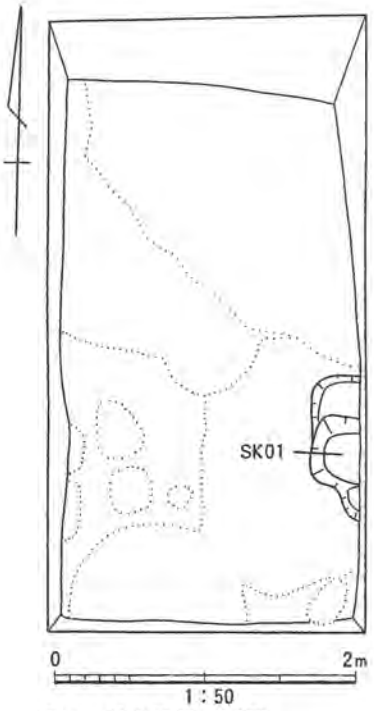



図4　検出遺構平面図

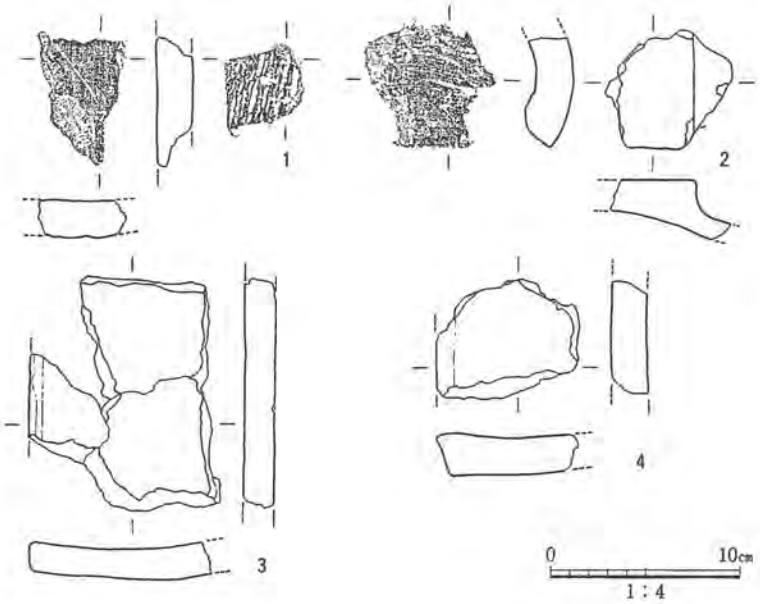



図5　SK01出土遺物実測図

第0層　現代堆積層である。

第1層　調査地北部で認められた黒色シルト層で、桟瓦を含むことから江戸時代後期以降に堆積した地層である。上部は重機で掘削し、下部は人力で掘削した。おそらくこの層は、土壙の埋土であろう。地表下1.2mまで掘削したが底は検出できなかった。

第2層　明褐色細粒砂質シルト層で地山である。南部では地表下1.2mで検出されたが、北部では確認できなかった。

2．遺構と遺物(図4・5)

SK01(図4)　南西部に位置する土壙で、南北約0.95m、東西0.45m以上ある。埋土から、中世以降と思われる瓦3・4と布目圧痕をもつ古代の瓦1・2が出土した。1は平瓦で、凸面に縄タタキが見られる。出土遺物は、図示したもの以外は、土師皿の細片が出土しただけである。

〈まとめ〉

今回の調査では、古代に遡る遺構は検出されなかった。

調査地南部での地山面の遺存状況はよく、古代の瓦が出土したことから、周辺に当該期の建物が存在する可能性がある。調査地周辺における古代の遺構分布については、周辺の調査を積み重ねることによって実態が明らかになっていくと思われる。

調査地全景
（北から）

西壁地層堆積状況
（北東から）

SK01完掘状況
（西から）

# 上本町北遺跡Ｂ地点発掘調査（ＵＮ05－１）報告書

・調 査 個 所　大阪市中央区上本町西５丁目
・調 査 面 積　108㎡
・調 査 期 間　平成18年３月10日～平成18年３月15日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　田中清美、小田木富慈美

〈調査に至る経緯と経過〉

上本町北遺跡は上町台地上に位置し、難波宮跡および大坂城跡の南西に拡がる古代から江戸時代にかけての複合遺跡である。遺跡の東には難波宮朱雀大路が南北に通っており、この周辺では百済寺に比定される堂ケ芝廃寺や百済尼寺と関連する墨書土器の出土した細工谷遺跡をはじめ、摂津国分寺、四天王寺などの古代寺院が多く立地する。また、調査地の南方では、四天王寺旧境内遺跡や伶人町遺跡などを中心に調査が行われ、中世の遺構・遺物も多く検出されている。以上のように調査地周辺では古代～近世にかけての遺跡が密に分布しており、歴史的に重要な地点である(図１)。

今回の調査地は上本町北遺跡の指定範囲よりも南に位置している(図２)。周辺では古代～近世の遺構が見つかったUH92－２次調査や、中世～近世の井戸や土壙などが確認されたUN04－1次調査ほか、

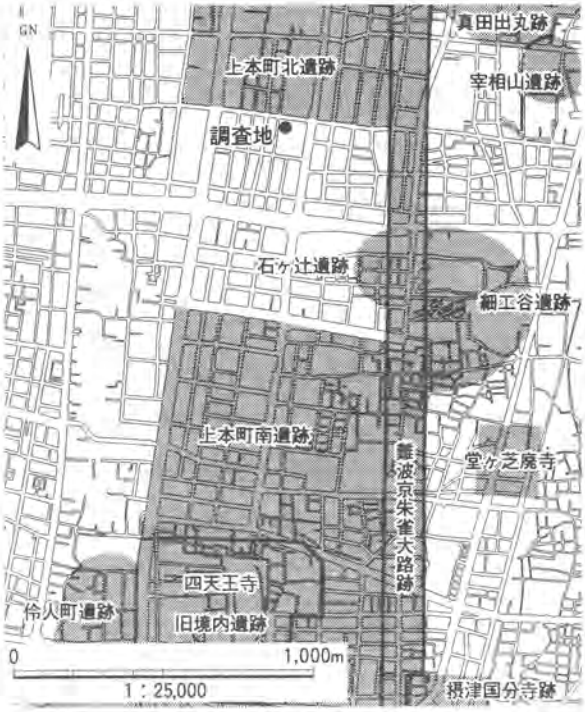



図１　調査地と周辺の遺跡位置図

図２　周辺の既往調査位置図

数多くの調査が行われている。なかでも、調査地の北東にある専念寺敷地内で行われたUH92－２次調査では、中世以前と近世とで溝の方位が変化しており、古代における正東西を意識した地割りが、ある段階で現在の上町筋方向に合致する地形に沿った地割りに変わったことが推定されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1993]。

調査に先立ち行われた試掘調査で、現地表下1.4m以下に中世～近世とみられる遺物包含層が複数確認された。このため、大阪市教育委員会と事業者との協議の結果、本調査を行うことになった。調査区は逆「L」字状に設定し、便宜上南北方向の調査区をⅠ区、東西方向をⅡ区と呼称した(図３)。作業はまず現代盛土を重機で掘削し、それ以下を人力で掘進め、随時、図面・写真による記録に努めた。なお、本報告で示す水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、方位は磁北である。

〈調査の結果〉

１．層序(図４)

Ⅰ区の西半部は段丘構成層上面まで攪乱を受けており、地層の堆積状況は不明であったが、Ⅰ区東半とⅡ区では江戸時代以前の地層が良好な状態で残存していた。調査地の地形は現状ではほぼ平坦であるが、段丘構成層上面の地形は、北西端で最も高く、東および南に向って低く傾斜していた。この上には中世の遺物包含層と近世初頭の盛土層が認められた。近世初頭の盛土によって、調査地はほぼ平坦になったと思われる。なお、現代盛土の層厚は約140～220cmであった。本調査地での層序は以下のとおりである。

第１層：黒褐色含礫粘土質シルトで、Ⅱ区南壁でのみ確認された盛土層である。層厚は10cm未満で、江戸時代の国産陶磁器を含む。

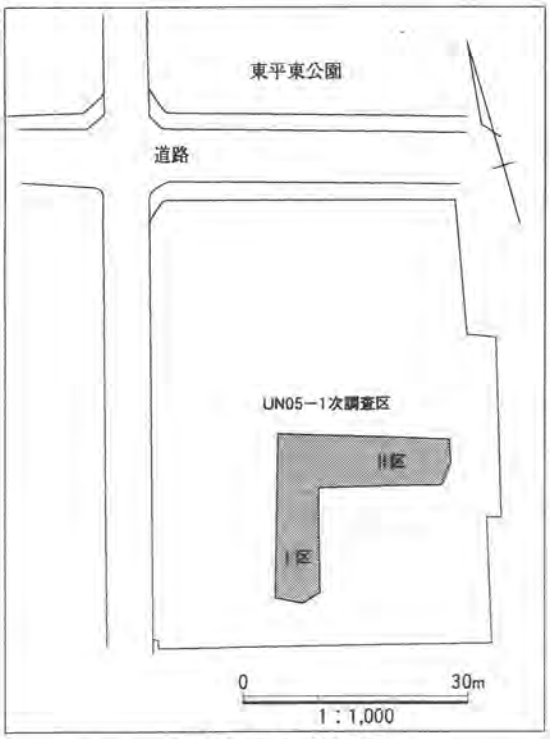


図３　調査区位置図

第２層：暗灰黄褐色含礫中～粗粒砂層で、２枚に細分された。第2a層は層厚が70cm未満の盛土である。調査区の東と南に向って厚く堆積していた。この盛土によって、調査地はほぼ平坦な地形となったとみられる。出土遺物は中国産青花・瀬戸美濃陶器・肥前陶器(唐津焼)・瓦器・黒色土器・須恵器・土師器で、豊臣後期に属すると思われる。本層の上面では江戸時代の井戸・土壙・溝・ピットなどが検出され、下面では溝・ピット・井戸が確認された。第2b層は層厚が20cm未満の暗褐色含礫粘土質中粒砂層で、鉄分・マンガンの沈着が認められ、作土層と思われる。本層の上面および下面では溝が検出された。本層からは瓦質土器・瓦器のほか土師器・須恵器が出土しており、中世に形成された地層と思われるが、その下限は第2a層からの出土遺物の時期よ

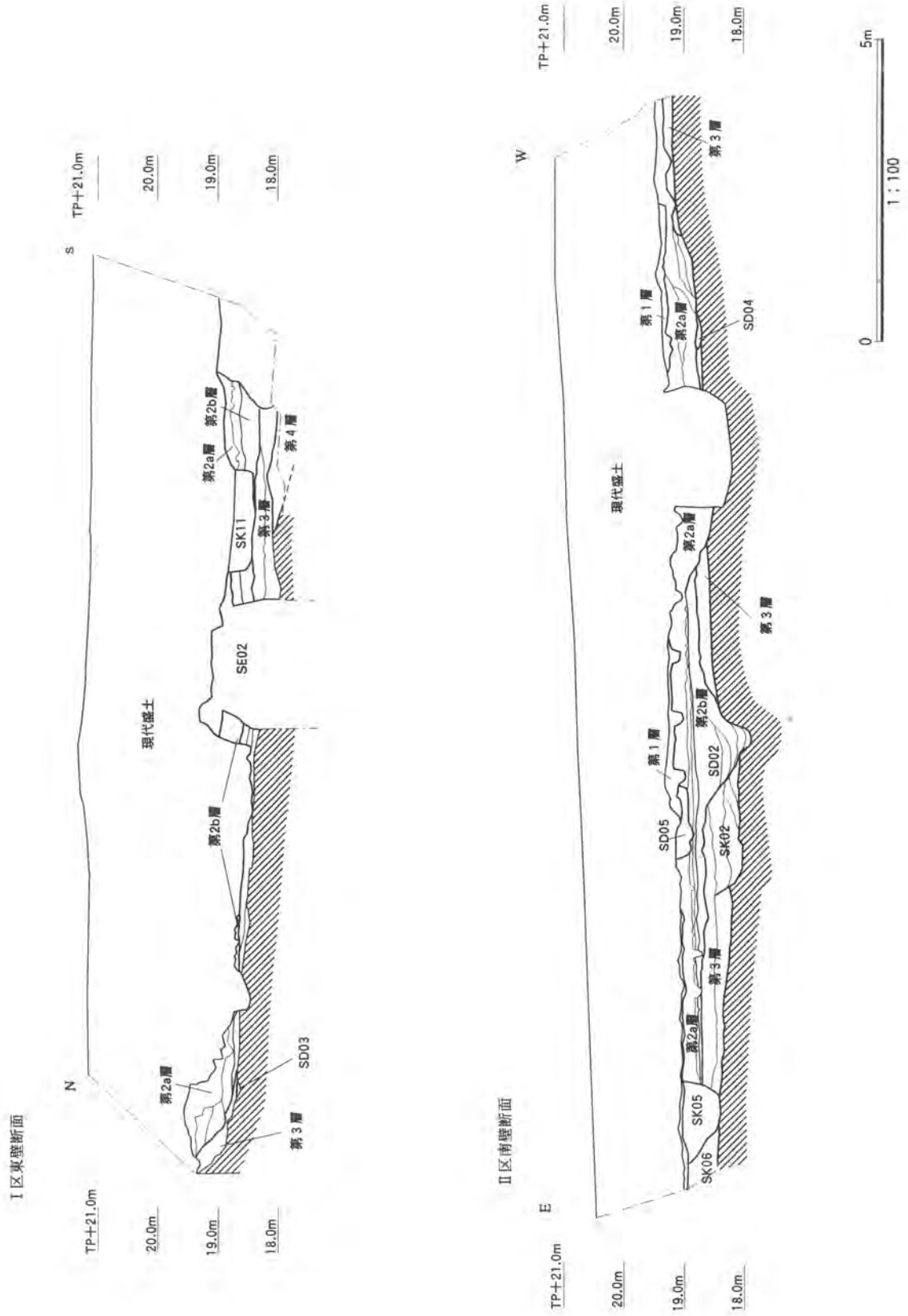



図4　Ⅰ区東壁・Ⅱ区南壁地層断面図

り、豊臣期に降る可能性がある。

第３層：暗褐色含礫粘土質シルト層である。Ⅱ区内では東に向って厚くなり、最大の層厚は50cmとなるがⅡ区東端では徐々に薄くなる。本層はⅡ区では少なくとも２枚に分けられ、鉄分やマンガンの沈着が著しいことから、作土となっていた可能性がある。本層からは中国産白磁・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器が出土し、中世に属すると思われる。本層の下面では土壙・ピット・溝、上面では溝や土壙が検出された。

第４層：暗褐灰色～灰オリーブ色含礫粘土質中粒砂層で、Ⅰ区南端の谷地形内で確認された。層厚は30cm未満である。本層は飛鳥～奈良時代の土師器・須恵器を多く含み、谷の深い部分では数枚に細分される可能性がある。

第５層：灰白色～黄褐色砂礫層で、段丘構成層である。

２．遺構と遺物

現在、遺物については整理途中であるため、遺構を中心としてその概要を述べる。

１)古代～中世の遺構と遺物(図５)

Ⅰ区では段丘構成層である第５層の上で南へ落込む谷地形のほか、溝・井戸・土壙・ピットが確認された。谷地形内の第４層からの出土遺物は飛鳥～奈良時代の土師器・須恵器が中心である。この上位の第３層からは土師器・須恵器および黒色土器・瓦器の細片が出土している。Ⅱ区では溝・土壙・ピットが検出された。

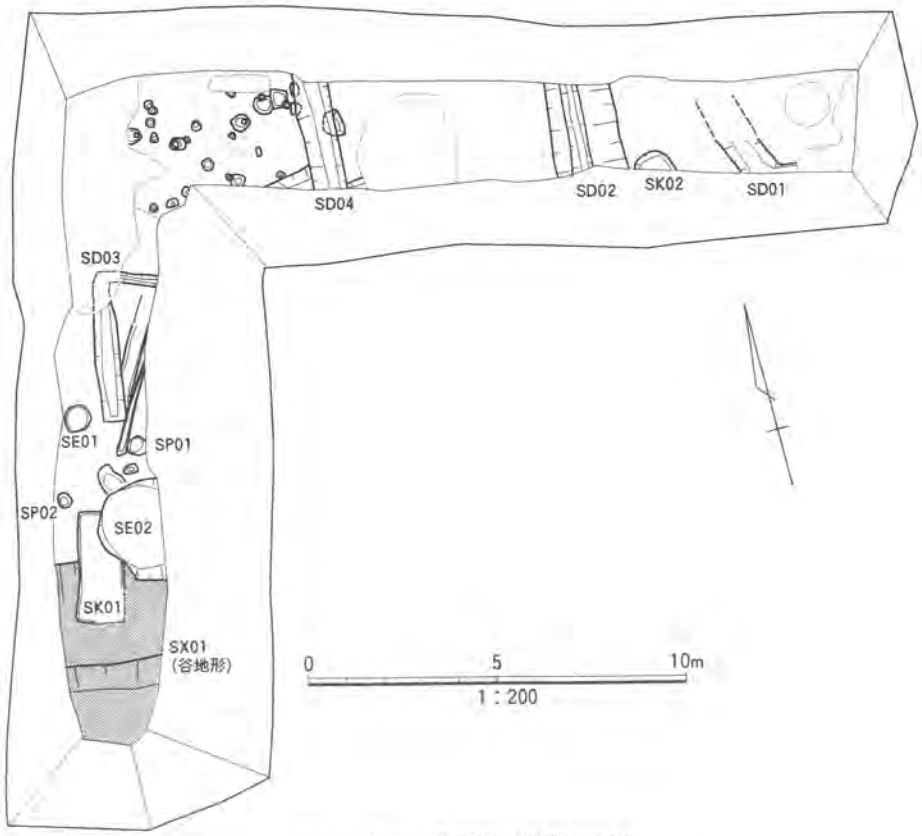



図５　古代～豊臣期の遺構平面図

溝；第３層下面で検出されたSD01は、Ⅱ区の東端で確認された南東～北西方向の溝状の落込みである。これより南西にかけては段丘構成層の上面が緩やかに低くなっており、谷地形の一部の可能性がある。SD02・SD03は第３層上面で検出された。SD02は磁北よりやや東に振る南北方向の溝である。埋土上層は灰褐色粘土質シルト層で、人為的な埋戻し層であり、最下部は灰色粘土層で滞水した痕跡が認められた。土師器・須恵器・瓦器の細片が出土したが、詳細な時期を知りうるものはなかった。SD03はⅠ区の北半で検出された南北から東西方向へ屈曲する溝で、方位はSD02と同じく磁北よりやや東に振れる。南は調査区内で途切れている。幅0.5m、深さ0.4mであった。断面形は「U」字状で、埋土は上下２層に分けられた。下層には水の溜まった痕跡があり、上層は段丘構成層の偽礫を含む粘土層で人為的に埋戻されている。上層より土師器・須恵器のほか備前焼擂鉢の細片が出土したことから、詳細な時期は不明であるが中世末ごろに埋められたと思われる。

井戸：SE01がⅠ区の第５層上面で検出された。井戸側は認められなかったが、形状より井戸と考えられる。直径0.7m、深さ1.3m以上で、底までは完掘しえなかった。埋土は黄褐色粘土の偽礫を多く含む灰黄褐色砂質シルト層である。出土遺物はごくわずかの土師器・須恵器・黒色土器片のみである。

土壙：Ⅰ区の第５層上面で検出されたSK01は、平面形が長方形を呈する土壙であり、南北2.9m、東西1.1m、検出面からの深さは0.4mである。後述するSE02に切られる。埋土は灰褐色粘土質シルトで、人為的な埋戻し土であり、最下部には段丘構成層の偽礫を多く含む。出土遺物は土師器・須恵器・瓦器・瓦であった。Ⅱ区では第３層中でSK02が確認された。SK02は直径1.3m、深さ0.5mの円形を呈すると思われる土壙である。埋土は粘土偽礫を多く含む灰オリーブ色粘土質砂礫層で、出土遺物は須恵器平瓶片のみである。

ピット；Ⅰ区では、古代にさかのぼると思われるSP01・SP02が第５層上面で確認された。SP01からは奈良時代以前と考えられる土師器杯が出土している。Ⅱ区では、標高の最も高い西端部の第３層下面および基底面で多数のピットが検出された。これらの中には浅い窪み状のものや、柱穴の可能性のあるものがある。以上のピットは中世以前にさかのぼるものと推定されるが、詳細な時期や性格については遺物と埋土の検証を行ったのちに、再考したい。

２)豊臣期の遺構と遺物(図５)

Ⅰ区では第2b層の上面で井戸が検出された。SE02は直径2.6mで、検出面からの深さは2.0mであった。井戸側は確認されなかった。埋土は人為的な埋戻し層で、下層は段丘構成層の偽礫を多量に含み、上層は砂礫を多く含んでいた。埋土上部から外面に鉄絵を施す唐津焼片が出土したことから、豊臣後期以後に埋戻されたことがわかる。出土遺物は土師器・須恵器・黒色土器の細片のみで、掘削時期を特定できる遺物は認められなかった。このほか、埋土の下部から建物の礎石に用いられたとみられる人頭大の花崗岩が十数個出土している。Ⅱ区では溝１条が検出された。SD04は上部が第2a層で覆われる南北方向の溝である。方位はSD02・SD03とほぼ一致し、段丘構成層である第５層上面が東に向って低くなる地形の傾斜変換点に掘削されている。幅は0.9m、深さ0.2mであった。埋土は炭・焼土を多く含み、中国産青花のほか、瓦器・土師器・須恵器が出土している。豊臣期あるいはそれ以前にさ

かのぼる溝である可能性がある。

3)江戸時代前半以降の遺構と遺物(図6)

Ⅰ区では土壙1基が検出されたのみである。Ⅱ区では第2a層の上面で井戸2基・溝1条のほか、土壙およびピット多数を検出した。

溝：SD05はⅡ区東部で検出された南北方向の溝で、下位のSD02とほぼ同じ位置に掘削されている。ただし、方位はSD02よりも北で東へ振っており、上町筋の方向に合致すると思われる。幅0.9m、深さ0.2mで、埋土は灰オリーブ色含礫シルト層であり、よくしまっている。17世紀代とみられる肥前磁器片が出土したが、詳細な時期については不明である。

井戸：SE03はⅡ区東端で検出された。直径1.1mで、検出面からの深さは0.9mである。18世紀初頭の肥前磁器をはじめとする国産陶磁器・土器類、瓦が出土した。SE04はⅡ区の中央で認められた。直径1.3m、深さ0.4mで、壁面には粘土を貼付けており、底には板が敷かれていたことから、水溜め遺構と思われる。18世紀後半の肥前磁器のほか、国産陶磁器・土器類が出土している。

土壙：Ⅱ区では廃棄土壙と思われるSK03～10が検出された。これらのうちSK03の出土遺物が最も古く、17世紀代にさかのぼる可能性がある。石臼のほか、肥前磁器などの国産陶磁器が出土している。SK04～10は18世紀後半～19世紀初頭にかけて掘削されたものとみられ、国産陶磁器・土器類のほか、土人形・瓦が出土している。Ⅰ区ではSK11が確認された。SK11は南北1.6m、東西1.6m以上の方形を呈する土壙で、廃棄土壙と思われる。埋土は黒褐色粘土質シルト層で、18世紀末～19世紀初頭の

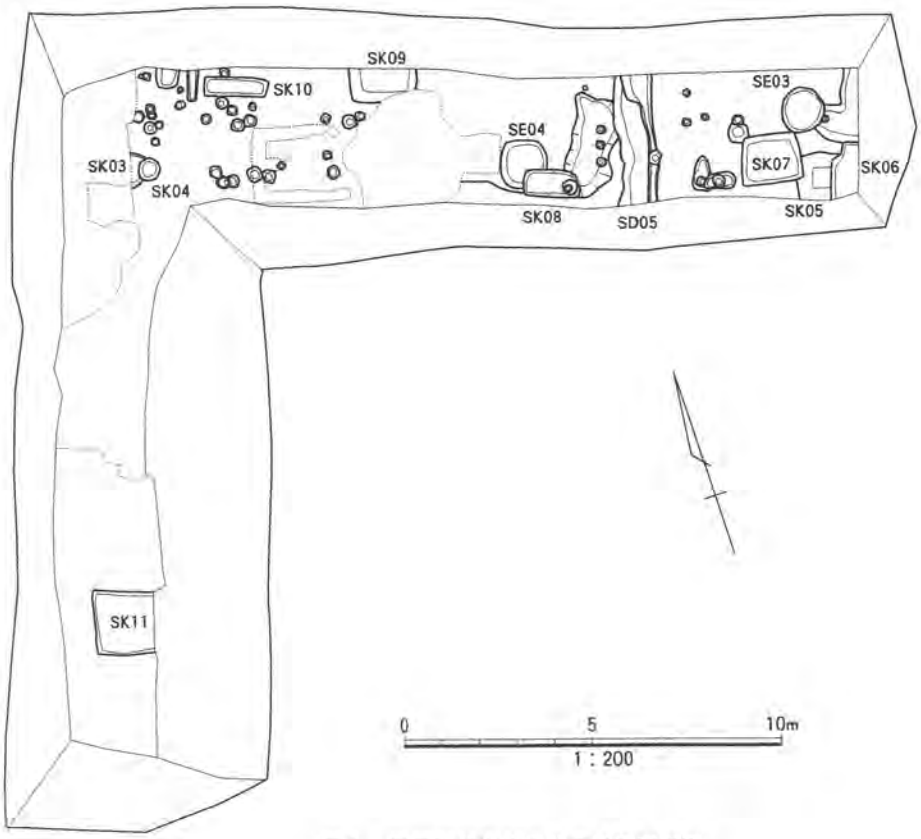



図6　江戸時代前半以降の遺構平面図

肥前磁器をはじめとする国産陶磁器・土器類のほか、軒丸・平瓦、軒桟瓦、杭が出土した。

ピット；段丘構成層の上面が最も高くなるⅡ区の西端を中心に多数のピットが検出された。これらは建物を構成する柱穴の一部であったとみられる。

〈まとめ〉

今回の調査では古代から近世までの遺構を検出し、これまでの調査成果を補強するような材料を得ることができた。なかでも、古代以前の出土遺物はそれ以降と比較してかなり多く、確実に奈良時代以前にさかのぼると考えられる遺構は少ないものの、本調査地周辺にも居住域が拡がっていたと考えられる。平安時代以降は調査地内には作土が拡がっており、基本的に生産域として利用されたと判断される。遺物の量も少なく、居住域が近くに存在した可能性は低い。豊臣後期の盛土によって調査地がほぼ平坦になった後は、遺構の分布状況からおもにⅡ区の西側が居住域で、東側が庭地などとして利用されたと考えられる。

また、今回の調査では南北方向を中心に溝が多く検出されている。これらの溝の方位の変遷については、出土遺物の検討をふまえ、周辺の調査成果を合わせて考察することにしたい。

参考文献

内田九州男1989、「豊臣秀吉の大坂建設」：『よみがえる中世』2　平凡社、pp.34－55

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1993、「専念寺庫裏建替工事に伴う発掘調査」：『平成４年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.69－80

調査地遠景
（南西から）

Ⅰ区江戸時代の
遺構検出状況
（南から）

Ⅱ区江戸時代の
遺構検出状況
（西から）

# 難波１丁目所在遺跡発掘調査（ＮＡ05－１）報告書

・調 査 個 所　大阪市中央区難波１丁目16－２・４・５・10・17
・調 査 面 積　81㎡
・調 査 期 間　平成18年２月16日～平成18年２月20日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　田中清美、趙哲済、宮本佐知子

〈調査に至る経緯と経過〉

難波１丁目所在遺跡は、御堂筋と千日前通りの交差点の北東に位置し(図１)、周辺での調査例はなく、周知の遺跡の範囲外にあたる。

平成18年２月９日に大阪市教育委員会が実施した試掘調査において、GL－2.2mから、中世以前と考えられる地層を検出し、その下層で土師器や須恵器が出土したため、発掘調査を行うこととなった。

調査は２月16日から敷地の南西部で行った(図２)。表土および近世層を重機で掘削した後、人力で掘削して、実測・写真撮影などの作業を行い、２月20日に埋戻しを完了した。なお、図で使用した方位は磁北で、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP＋○mと記す。

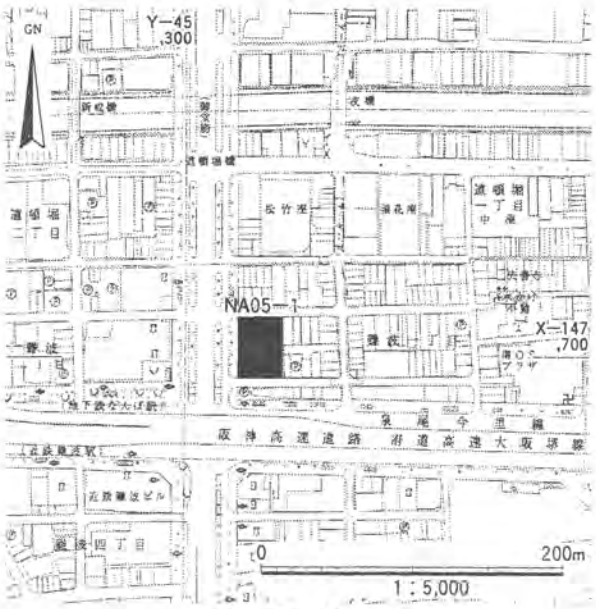


図１　調査地位置図

図２　調査区配置図

〈調査の結果〉

1．層序と遺物(図３・４)

第０層：表土層で、層厚は10～40cmである。

第１層：黒褐色砂層である。層厚は40～80cmで、数層に分かれる。

第２層：焼けた瓦、焼土を含む近世後半の火災後の整地層で、層厚は10～40cmである。

第３層：淡黄灰色粗粒砂を主体とする近世の整地層で、層厚は５～70cmである。

第４層：暗褐色シルト質砂を主体とする近世の整地層で、層厚は45～70cmである。

第５層：黄褐色シルト質粗粒砂を主体とする層で、層厚は20～70cmである。この層の上面が中世の遺構面である。

第６層：にぶい黄褐色粗粒砂層で、層厚は20cmである。

第７層：黒褐色泥炭質砂質シルト層である。植物が分解されずにできた腐敗土で、層厚は15～20cmである。泥炭質は調査地の東部で強く、西部では泥炭質は弱くなり、砂勝ちとなった。

第６層と第７層には荷重痕(註１)[堆積学研究会1998]やコンボルート層理(註２)が認められた。第７層の上面では、人為性を推定させる第６層砂の直線的な分布があったが、多くは泥質の第７層に沈み込んだ砂質の第６層とみられ、一辺３～20cmで不整形に突出し、深さは３～５cmであった。また、東壁面の一部で第７層が伸び上がった顕著なフレーム構造(註３)が観察された。これらの変形構造が地震動によるものならば、その地震が起こった時期は第５層の堆積期と見られる(註４)。

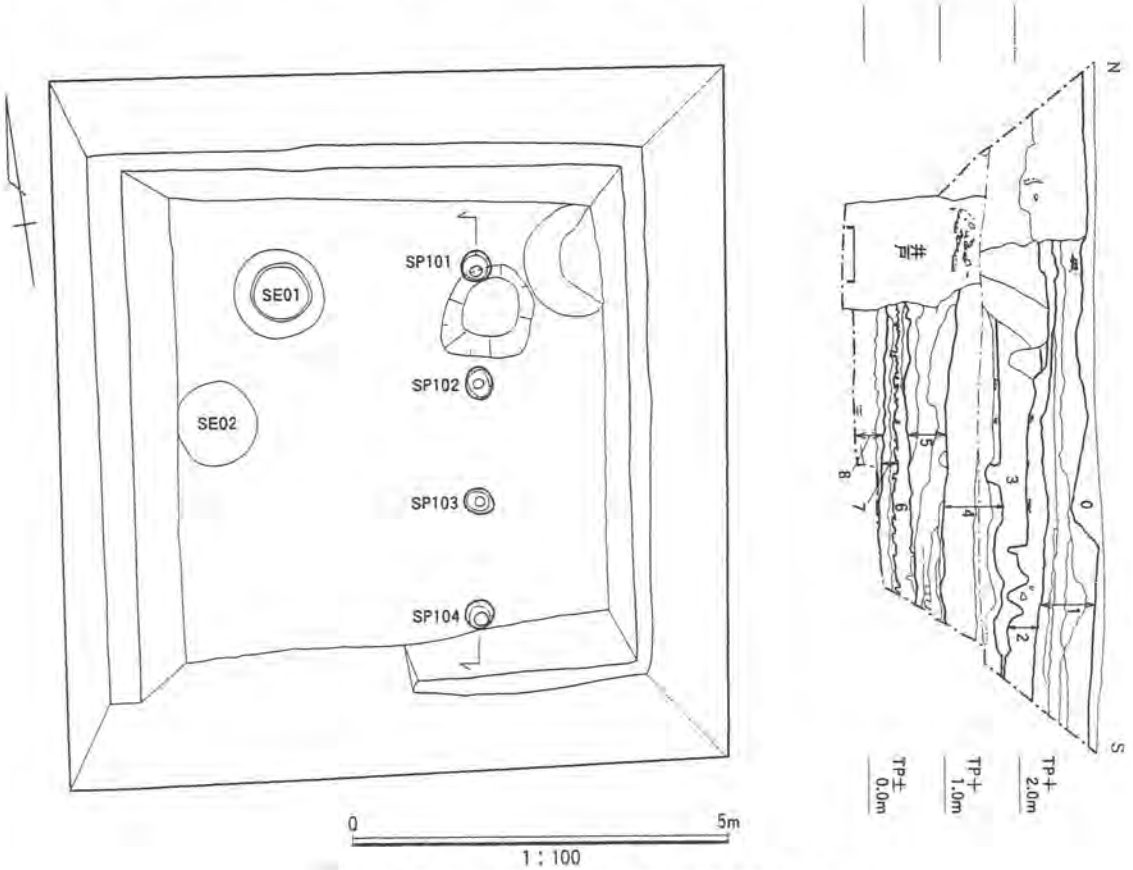



図３　第５層上面検出遺構配置図及び東壁断面図

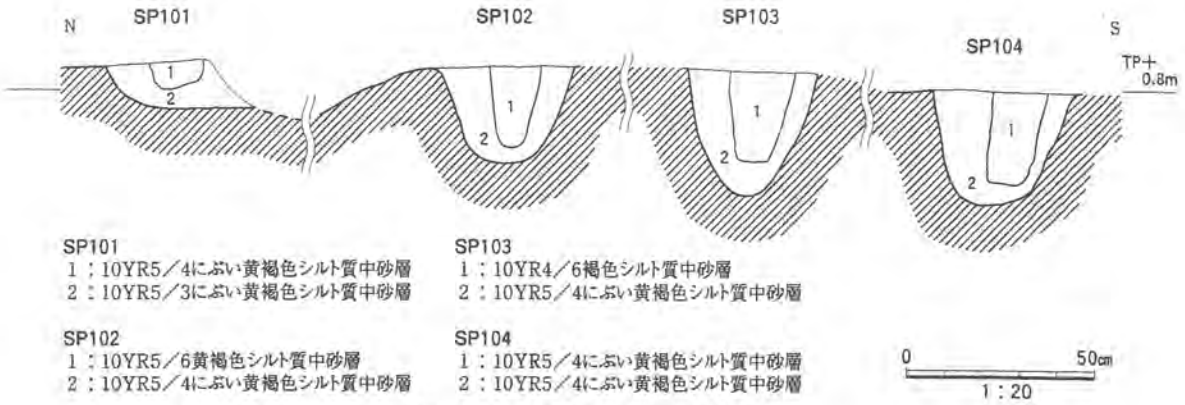



図4　第5層上面検出柱穴断面図

第8層；褐色砂礫～粗粒砂層で層厚は40cm以上である。東に緩く傾斜して発達する平行葉理(註5)は分級(淘汰)が良く、部分的に有機質の薄層が挟まれた。

## 2．遺構と遺物(図3～5)

### i)各層出土遺物

層中出土遺物は、第8層中の有機質の薄層から土師器甕1、第7層は土師器坩2、土師器甕3・4、土錘5、須恵器甕6、である。第5・6層は中国製白磁皿7・須恵器杯8・土師器甕9・平瓦10・土師器羽釜11である。第7層出土遺物の時期は奈良時代で、特に土師器坩2には墨跡が認められるが、不鮮明であり、詳細に検討はできていない。しかし器形から考えて人面墨画土器と考えられる。第5・6層出土の中国製白磁皿7は平安時代後期～鎌倉時代である。土師器羽釜11は河内産の羽釜である。以

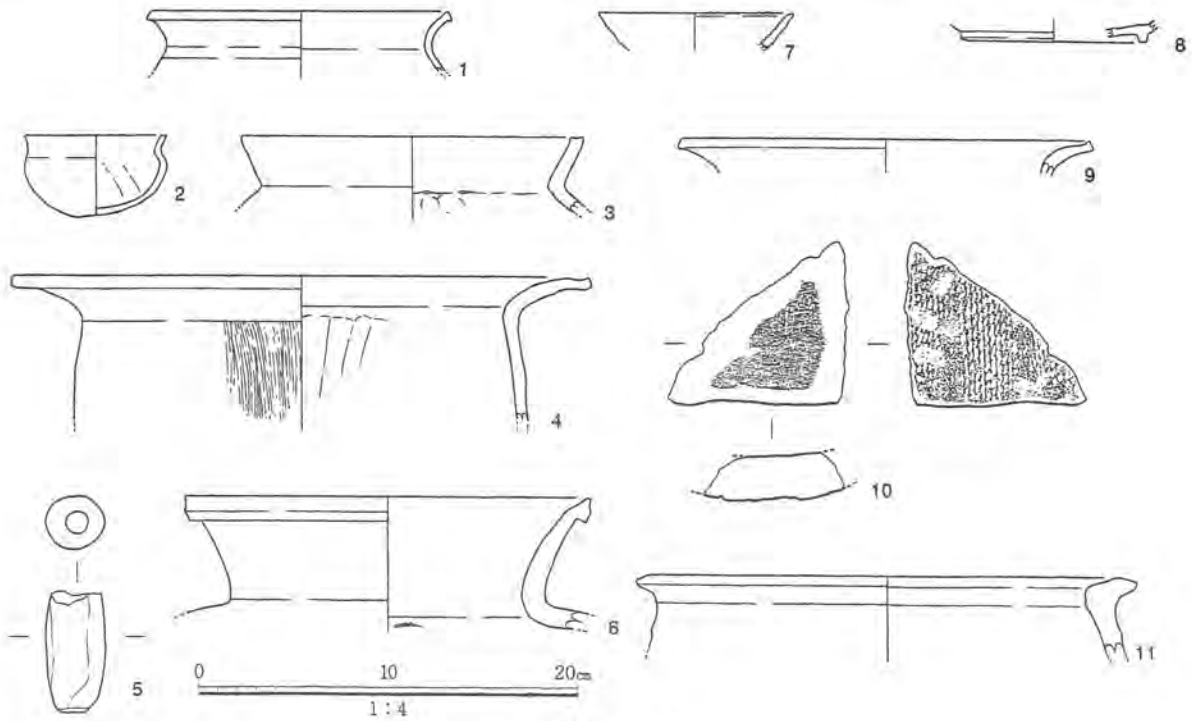



図5　各層出土遺物

第8層(1)、第7層(2～6)、第5・6層(7～11)

上のことから第５・６層の形成年代は13世紀頃であろう。

ii)第５層上面検出遺構と遺物

南北に並ぶ柱穴を４基検出した。柱穴は直径0.34～0.40mの円形で、柱痕跡は直径0.13～0.16m、深さ0.10～0.30mである(図３)。SP101から瓦器片が出土した。

３．地層から見た古環境の推定

上述したように、第７層の泥炭質が東ほど強く西で弱くなることと、第８層の砂のラミナが東に傾斜することから、調査地の西側には第８層以下の砂が高まりをつくっていたと予想される。第８層のラミナは分級がよく、かつ連続性に富むことから、広域に波及する営力により形成されたと考えられる。このことから、この砂の高まりは離水した海浜の沿岸州と推定され、本調査地の第７層は、沿岸州と上町台地に挟まれた沿岸トラフに堆積した沼沢地性層であろうと推定される。この状況は、島之内の住友長堀銅吹所の地下で見られた地層の様子に酷似しており[大阪市文化財協会1998]、古代から中世に至る当地域に、沿岸トラフに水棲植物が繁茂する湿地が広がっていたと考えられる。

また、第６・７層の堆積後の変形構造からは、第５層堆積期に、当地域が大地震に襲われたことが示唆される。

〈まとめ〉

本調査地周辺はこれまで調査が行われていなかったが、本調査を行ったことにより、奈良時代の遺物を包含する第７層が確認され、当地周辺には奈良時代の集落があった可能性が推測できた。また第７層中の小型の坩に墨書の絵が描かれており、人面墨画土器である可能性がある。周辺で水辺の祭祀が行われていたことも推測できる地形でもある。

13世紀の始めのころの『石清水文書』に、本調査地の北には「三津寺荘」と呼ばれる石清水八幡の荘園があったことが書かれている。[伊藤毅1987]。本調査で中世には、この地に建物か柵列かは不明であるが人々の営みの跡が検出された。

今後も周辺の発掘を行うことで、この地域における古代や中世の歴史の変遷がさらに明らかになるであろう。

註)

(１)荷重痕とは、[堆積学研究会1998]によると次のように定義している。砂岩層(まれに礫岩層)の下底面に見られる径数cm～数十cmの不規則なコブ状や乳房状の突出部、底痕の一種、密度の大きい砂層(礫層)が小さい泥層(砂層)の上にあってともに未固結状態であるとき、その境界面は密度の逆転によって重力的に不安定状態にあるので、砂層が急速に堆積したときとか地震やスランピングなどが引き金となって砂層が層厚の不均等に対応して泥層中に沈み込み、泥層はその間を上昇することによって形成される。

(２)コンボルート層理とは地層中の構造の一種で、波形にラミナが流動変形する。上は頭が尖り、下は幅広い丸形か箱形を呈する非常に不規則なラミナの褶曲である。

(3)フレーム構造とは、[堆積学研究会1998]によると次のように定義している。連痕や流痕などの初生的な堆積構造に上位の地層の荷重が加わることによって上位の砂が下位の泥に沈み込み、泥がせり上がって断面ではあたかもゆらめき動く炎のような形態を示す一種の荷重痕。

(4)地層の記述の第7・8層と、3項は趙哲済である。

(5)平行葉理とは、水や大気の流れのわずかな強弱に応じて粗いあるいは重い粒子と、細かいあるいは軽い粒子が交互に沈着してつくる地層中の縞模様で平行のもの。

大阪市文化財協会1998:「住友銅吹き所跡の古環境変遷」『住友銅吹所跡発掘調査報告書』PP.378－392

## 参考文献

伊藤毅1987：「島之内の成立」『近世大阪成立試論』、生活史研究所、PP.227－306

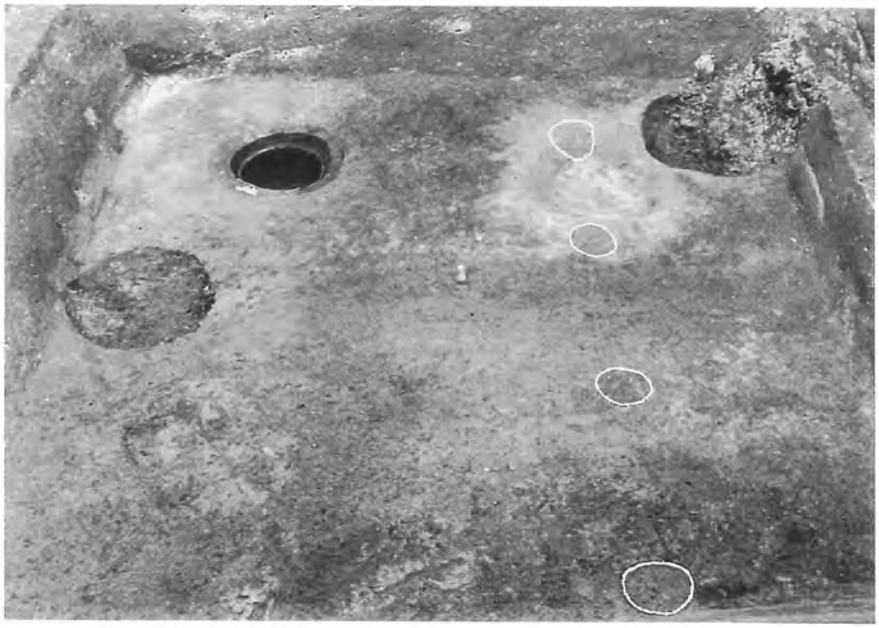
堆積学研究会1998：『堆積学辞典』、朝倉書店

大阪市文化財協会1998:「住友銅吹き所跡の古環境変遷」『住友銅吹所跡発掘調査報告書』PP.378－392

調査地断面
（西から）

第７層上面検出状況
（南から）

第５層上面検出遺構
（南から）



# 日本橋２丁目所在遺跡発掘調査（ＮＰ05－１）報告書

・調 査 個 所　大阪市中央区日本橋２丁目23－１他
・調 査 面 積　12.4㎡
・調 査 期 間　平成17年８月22日～平成17年８月25日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　田中清美、京嶋覚

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は元文５（1740）年に建設された「天王寺村銭座」、その廃止後の宝暦２（1752）年に建設された「天王寺御蔵」の跡地内に位置する［浪速区役所 1957］。

この地点は、埋蔵文化財包蔵地にはなっておらず、大規模開発に伴う協議に基づき試掘調査が実施された。その結果、地表面下 1.3 ～ 1.5 ｍで江戸時代後期ごろの遺物を含む土壙といくつかの整地層が確認されたため、文献以外には内容が知られていない「天王寺村銭座」あるいは「天王寺御蔵」に関連する資料を得ることを目的に、敷地内の 20 ㎡の範囲を発掘調査することになった。

しかし、現代の盛土を重機により掘削する過程で水道管・ガス管が検出され、このうちガス管については直ちに撤去することができなかったため、大阪市教育委員会と協議の上、調査対象をガス管を避けた 12.4 ㎡に縮小することとした。

図１　調査地位置図

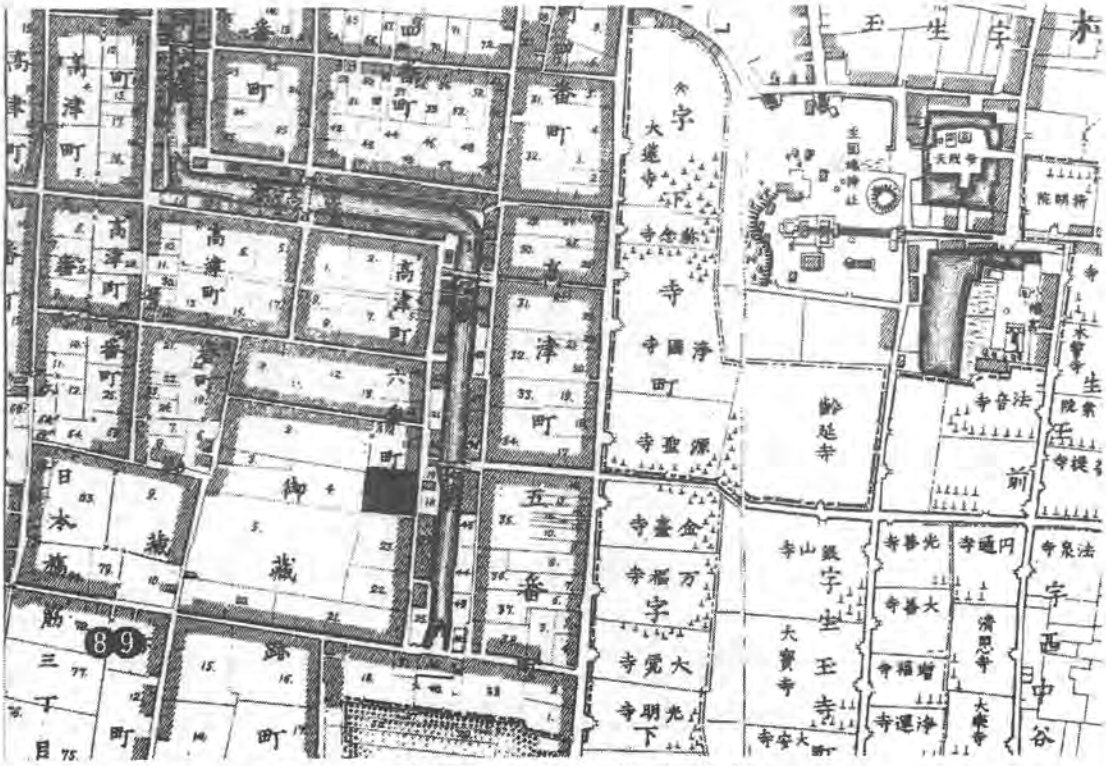


図2　「大阪実測図」における調査位置(1／5,000)

重機による掘削後、地表面下２ｍまで人力による掘削と平・断面の精査を行った。調査に用いた水準値はＴＰ値、方位は磁北である。

〈調査の結果〉

**層序**

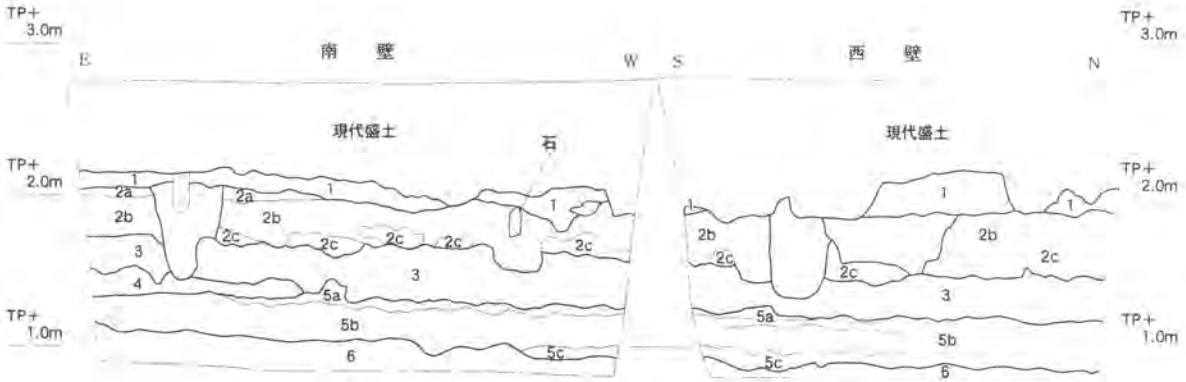
第１層：現代盛土直下の地表面をなす整地層である。黄白色シルトの薄層を部分的に介在する。

第２層：２ａ～２ｃ層に分けられる整地層である。２ａ層はオリーブ褐色含シルト細粒砂で南東隅のみに認められる。２ｂ層は暗褐色含細～粗粒砂シルトで炭や土師器の極細片を含む。２ｃ層は褐～黒色シルト～細粒砂でわずかに粗粒砂を含む。北東部は炭素粒が多く含まれ、黒色を呈している。本層基底面で第２層と類似する埋土の浅い落ち込みSK01があり、土師器・関西系施釉陶器片などが出土した。

第３層：上面に鉄酸化物が沈着する暗褐～暗黄褐色シルトの整地層である。遺物は少なく土師器・瓦器椀が出土したのみである。

第４層：南東部のみに認められる黒褐色含シルト細粒砂である。鉄もしくはマンガンの酸化物を含む。第３層と一連の整地層であろう。

第５層：上下３層に細分される。第６層上に堆積する黒色含シルト細粒砂である。西端部の最下部は灰白色細粒砂となり(５ｃ層)、風成層の可能性が高い。層中に生痕が認められるため、潮の干満などにより海水に浸ることがあったものと思われる。本層の上部は薄く黒色含砂粘土質シルトとなり(５ａ層)、湿地化していたと推定される。遺物は少なく、本層の上部で13世紀後半ごろの瓦器椀が出土した。



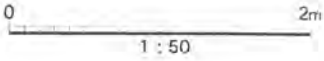




図３　南・西壁断面実測図

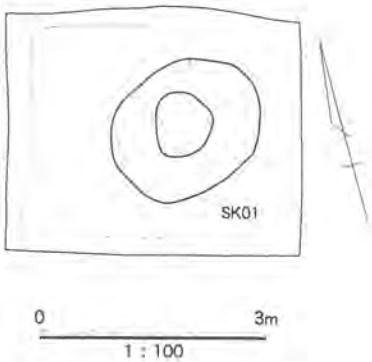



図４　SK01平面実測図
（第2層基底面検出）

第６層　褐色含粗粒砂大～小礫で、東側の上町台地西斜面を削って流下してきた堆積物と思われ、調査区南東部が礫の粒径が最も大きい。遺物は出土しなかった。

**遺構と遺物**

平面調査により確認した遺構は第２層基底面で検出した長軸2.1ｍ、深さ0.25ｍの楕円形の落ち込み**SK01**である。出土遺物は少量であったが、18～19世紀代からみられる土鍋の口縁部と思われる関西系施釉陶器と土師器細片が出土した。

これ以外に第２層上面から掘り込まれた遺構が断面で確認できる。

第５層の上部で出土した瓦器椀の年代から、第３・４層の整地がなされた時期は13世紀後半以後、19世紀以前であると考えられる。

〈まとめ〉

今回の調査地の環境は、潮の干満による海水の浸水があった砂地が中世に湿地化し、その後、19世紀までの間に何らかの目的で盛土がなされたものと思われる。調査地の真北約600ｍの東横堀西側でSI04-1次調査が行われている［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005］。そこで地山層とされている水成層の上面はおよそTP±0ｍであり、さらに北上した道修町・高麗橋１丁目付近の古墳時代以前の水成層の上面とほぼ同じである。これらの水成層が第６層と同一時期であるとすれば、今回の調査地は約１ｍ高いことになる。

また、第２層基底面で検出された落ち込み**SK01**は、試掘時に確認された江戸時代後期とされる土壙と近い時期であり、湿地であったこの地に施工された第３・４層による整地事業が、鋳銭所あるいは御蔵の建設と関連するとみることも可能である。今回の調査では確実な手がかりは得られなかったが、「天王寺村鋳銭所」および「天王寺御蔵」が存在していた当地域の徹底した調査が必要となろう。

引用・参考文献

浪速区役所1957，『浪速区史』，pp. 33－36

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会，2005『平成16年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』，pp. 19・20

南壁断面

第２層基底面SK01
（西から）

第６層上面検出状況
（北から）

# Ⅲ　天　王　寺　区

# 伶人町遺跡発掘調査（ＲＪ05－２）報告書

・調査個所　大阪市天王寺区伶人町29－１
・調査面積　30㎡
・調査期間　平成17年９月27日～平成17年10月３日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　田中清美、市川創

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は四天王寺の西側に位置し、周辺ではこれまで多くの調査が実施されてきた(図１)。しかしながら、谷町筋以西、すなわち伶人町遺跡では1996年にようやく初の調査が行われ、その後、最近年になって数件の調査が行われている。これらの調査によって、伶人町遺跡には古代以降の遺構が多く埋蔵されることが明らかとなり、四天王寺の西に隣接するという位置条件とも相まって、その様相を解明する必要性が高まってきている。

当地にて建設工事が計画されたため、2005年６月９日に試掘調査が実施された。その結果、地表下1.2m以下には土師器を含む整地層が、また、1.5m以下に井戸と考えられる遺構が検出されたため、本調査を実施することとなった。

調査区は敷地南西部に設定し(図２)、2005年９月26日に調査員立会のもと、重機による掘削を行った。重機による掘削は、後述する第０～３層および第５層以下に及ぶ攪乱、そして井戸SE202の下半部に対して行った。人力による掘削・調査は翌27日より着手し、第４層以下の地層は基本的にすべて人力によって掘削した。その過程で、適宜、遺構検出作業および記録作業を行った。以上の過程を経て、10月３日には機材類の撤収などを含め現地における作業をすべて完了した。

本報告に使用する図面等で使用した指北記号は座標北を示す。座標値については、現場で行った測量成果をもとに日本測地系に基づく座標値を求め、さらにこの値を国土地理院が提供する座標変換プログラムを用いて世界測地系での値に変換した。水準についてはTP値を使用する。

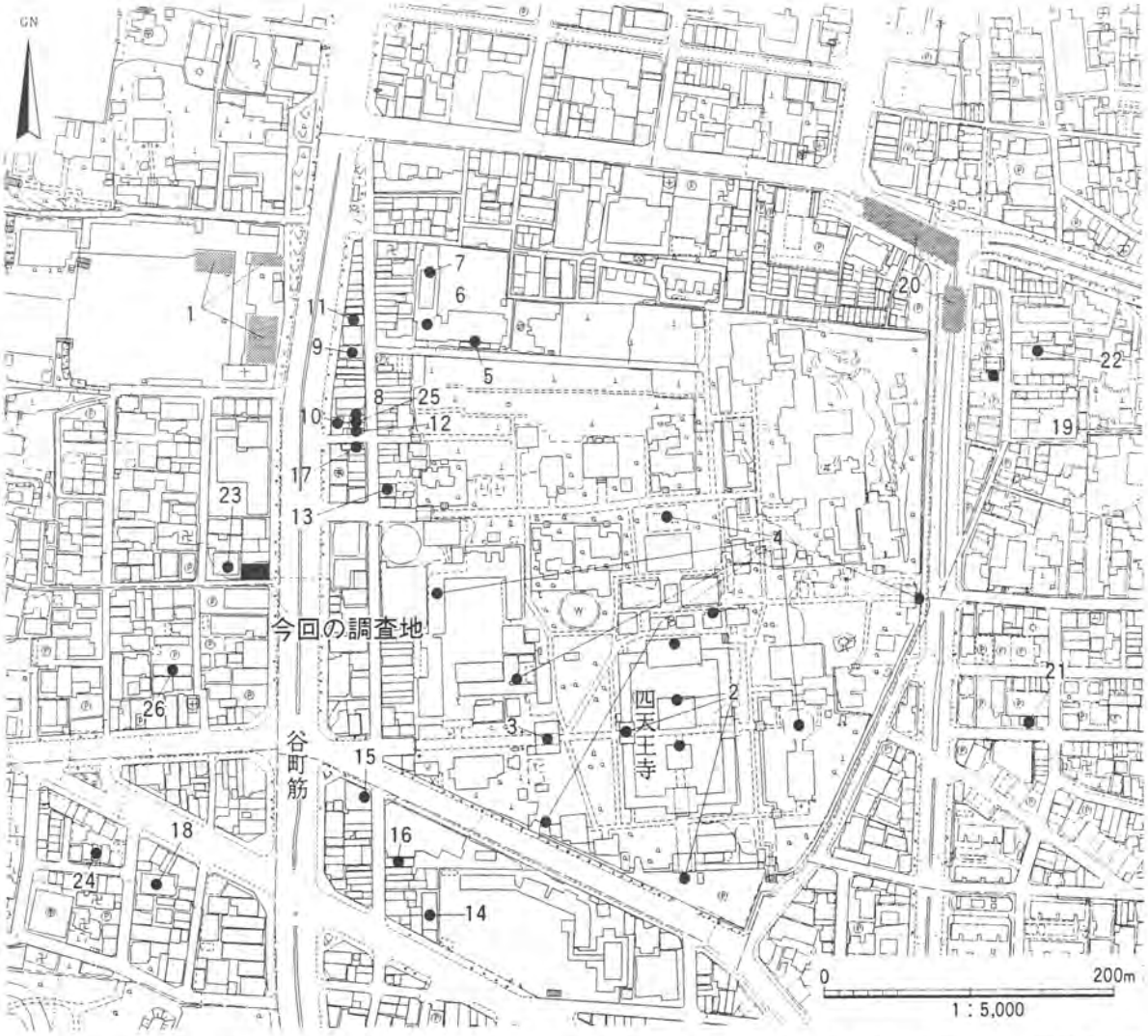
〈調査の結果〉

１．層序(図３)

本調査地の地層について、現代整地層(第０層)以下を第１層から第５層に区分した。

第１層：近～現代の整地層である。層厚は最大で40cmある。

第２層：近世の整地層であり、シルト混り中粒砂からなる。焼土および炭を多く含む調査区西半での地層を第2b層、これをあまり包含しない東半の地層を第2a層として区別した。第2a層・第2b層と




1：西近畿文化財研究所調査地、2：文化財保護委員会調査地、3：大阪市立博物館調査地、4：四天王寺調査地、5：ST85－1、6：ST87－4、7：ST88－3、8：ST88－9、9：ST88－10、10：ST89－2、11：ST89－4、12：ST89－5、13：ST89－6、14：ST90－2、15：ST92－7、16：ST92－10、17：ST93－1、18：CU94－2、19：ST94－6、20：ST94－7、21：ST95－2、22：ST95－9、23：RJ96－2、24：RJ02－4、25：ST02－5、26：RJ04－1

図1　調査地位置図

図2　調査区配置図

も層厚は最大で約20cmである。また、第2a層上面から井戸と思われる遺構が掘込まれている。その他、第2a層下面には土壙状の遺構が観察できた。埋土は中粒砂混りのシルトからなる。このうち井戸からは19世紀代のものを最新とする遺物が出土した。

第3層：暗灰黄色中粒砂混りシルトからなる整地層である。層厚は20cmある。第5層の偽礫のほか、炭・土器細片を含む。重機によって掘削を行ったため詳細は不明である

が、瓦質土器を含むことから中世後期に属するものと思われる。

第４層：黄灰～暗灰黄色を呈し、調査区北東へ向かって層厚を増し最大で60cm残存する。８世紀代の遺物を包含し、後述するように遺構埋土である可能性がある。岩相により第4a～4c層に区分した。

第4a層：シルトを含む中～粗粒砂からなる。遺物はこの層準よりもっとも多く出土した。

第4b層：中粒砂を含む粘土質シルト層である。

第4c層：粘土質シルトからなり、第５層に由来する偽礫を多く含む。また、下面には工具の痕跡とみられる凹凸が観察できた。何らかの掘削作業に伴う加工時形成層と考える。

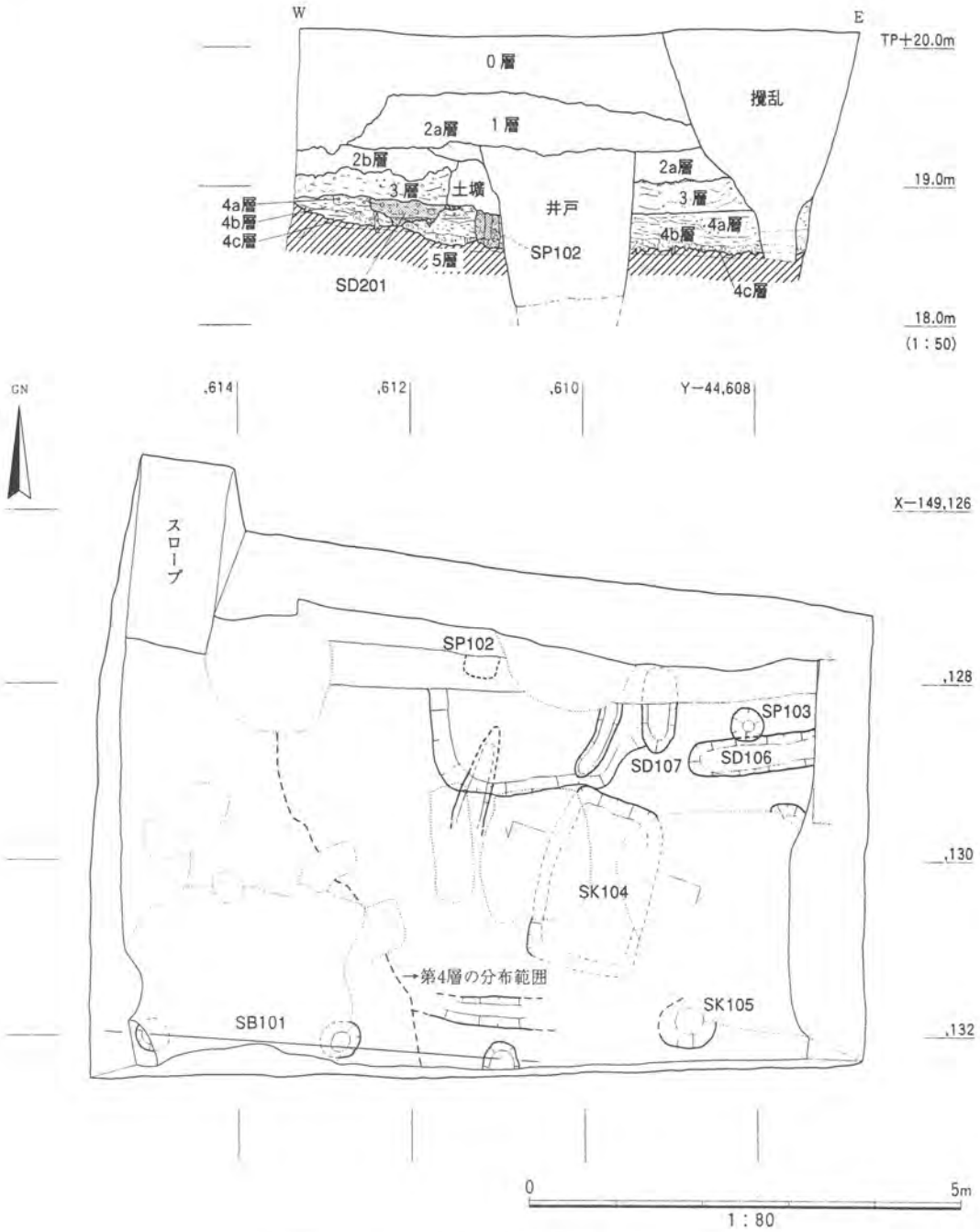



図３　調査区壁面図および第１期の遺構平面図

第５層：黄褐色を呈するシルトからなる地山層である。後述する井戸SE202などでの観察所見から、TP＋17.0m以下は顕著に粗粒化する。

２．遺構と遺物（図５～７）

今回の調査では、８世紀代の遺構群と、10世紀後半～15世紀の遺構群を検出した。両者は同一作業面上で認識したものであるが、記述の煩雑さを避けるため、以下では便宜的に前者を第１期、後者を第２期として報告する（註１）。

**［第１期の遺構］**

第４層上面において、SB101のほか、土壙・溝などを検出した。以下、各遺構の特徴と出土遺物について記述する。

**SB101**　調査区南西において、３基の柱穴を検出した（図３・４）。この部分では第４層の分布が薄く、当遺構との上下関係は不明である。西側２基については攪乱によってその大部分が失われていたが、東側の柱穴は直径0.40m、検出面からの深さは0.25mを測る。柱痕跡の直径は0.13mである。柱穴間の距離は、西側から芯々間で2.1m、1.9mであった。掘立柱建物、あるいは柵などの可能性が考えられる。いずれの柱穴からも遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から第１期に属するものと判断した。

その他に、構造物として復元することはできなかったが、柱穴SP102・103を検出した。遺構の時期を示す遺物は出土しなかったが、埋土の層相から該期の遺構と判断した。

**SK104**　第４層上面で検出した。現代の攪乱や後述するSE202によってその大半が失われているが、平面形は長方形に復元できる（図３）。復元長は長辺2.0m、短辺1.3m

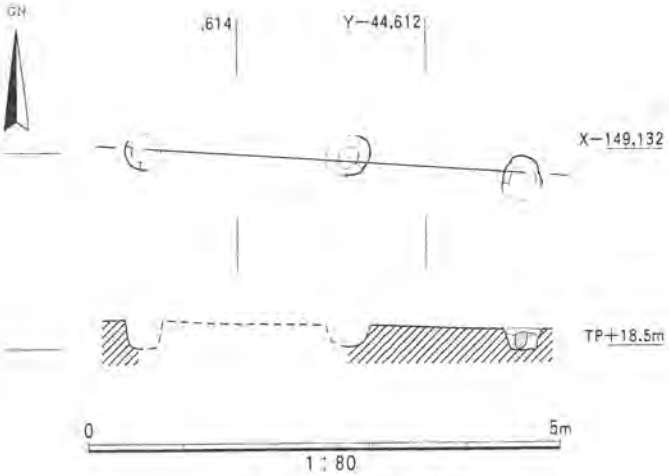



図４　SB101平・断面図

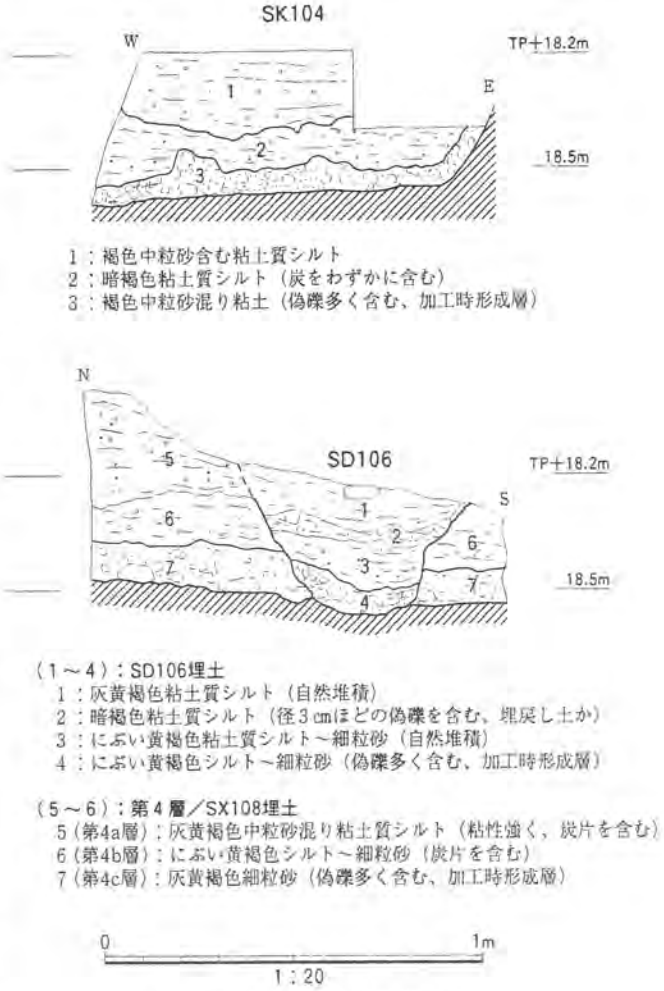



図５　SK104・SD107断面図

であり、検出面からの深さは最大で0.4mあった。埋土最下部には、第5層由来の偽礫を含む加工時形成層(3層)があり、その上に粘土質シルトからなる1・2層が堆積する(図5)。このうち2層には炭がわずかに含まれていた。遺物には土師器・須恵器・瓦があり、主として1・2層より出土した(図6)。また、遺構の時期とは異なるが、スカシ孔を有し土師質に焼成された円筒埴輪片、サヌカイトの剥片も出土している。

土師器供膳具には、杯A1～3、皿A6・7、皿B8がある。調整技法を確認できる個体ではいずれも、外面底部をヘラケズリ調整、その他の部位をナデで仕上げている。2は口縁部が外折し、3は体部が直線的で口縁端部を明瞭に屈曲させるなど、在地的な様相を看取することができる。3は被熱した痕跡を有する。7については、ヘラケズリの前に施されたハケメが残存する。8は底部内面に2重のラセン

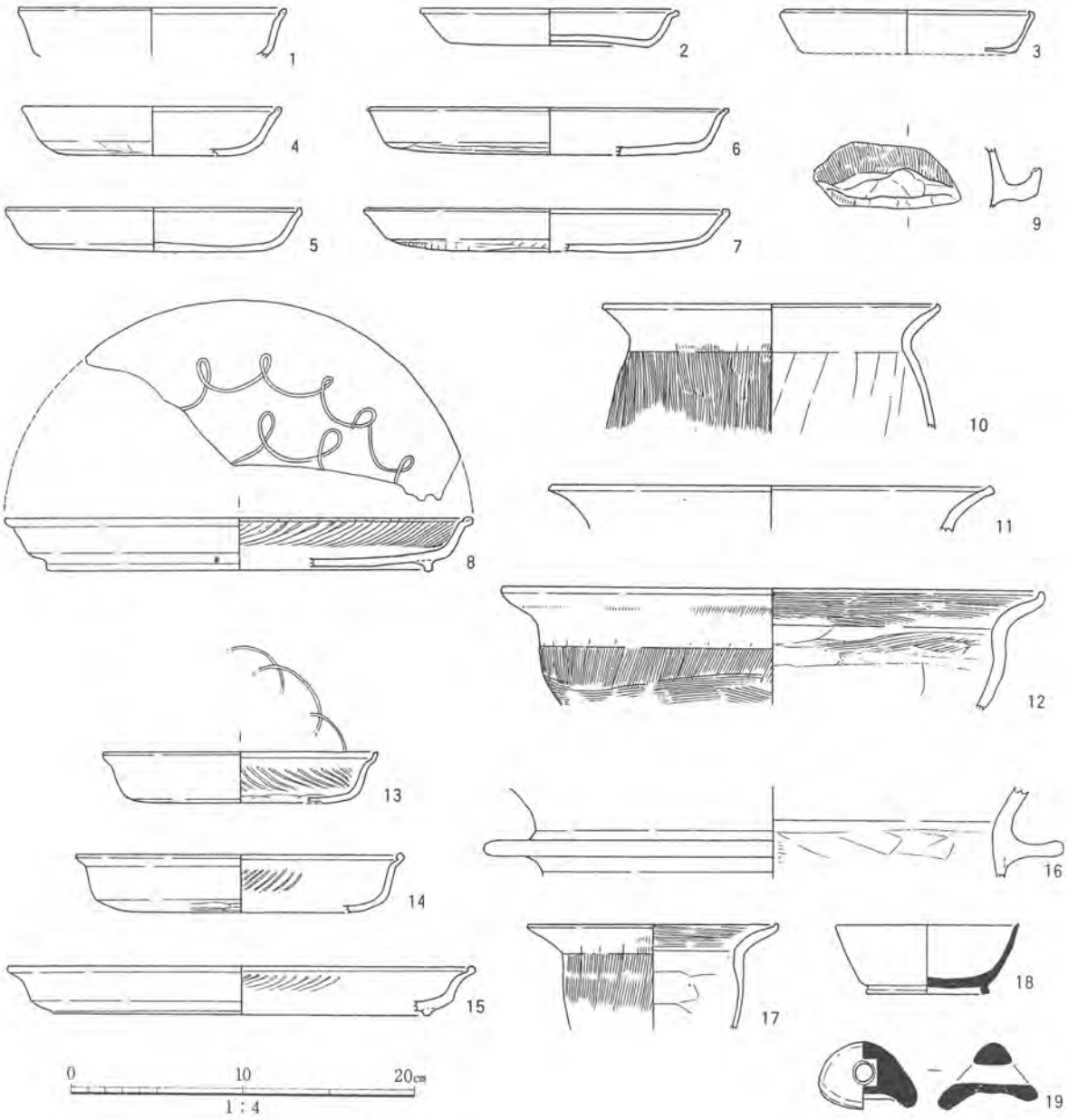



図6　第1期の遺構出土遺物
SK104(1～3、6～12)、SK105(4・5)、SD107(13)、SX108(14～19)

状暗文、体部には密な放射状暗文を施す。また、内外面ともにススが付着する。これらの土師器供膳具について、口縁端部の製作技法に注目すると、口縁端部を折り返して巻き込む1・6～8と、単に沈線によって口縁端部の肥厚を表現する2、折り返すのみで巻き込まない3があることがわかる。2・3については形態的にも在地的な特徴を備えており、生産・供給体制などを考える上で興味深い。土師器煮炊具には、甕9～11・鍋12がある。このうち9・10では外面にスス、内面にオコゲが付着する。

これらの遺物について、皿Bを除き暗文を有する個体がないこと、皿Aの法量が20cmを越えることから、難波V中段階、すなわち8世紀後半に位置づけられるものと考える。

SK105　調査区南東部において、第4層上面で検出した。SK104と同様、現代の攪乱およびSE202によって遺構のほぼ半分が失われているが、平面形状は直径0.6mほどの円形に復元できる(図3)。検出面からの深さは0.35mあった。

遺物は土師器および瓦が出土した。4・5は土師器杯Aである。4は器壁が荒れているが、外面底部にはわずかにヘラケズリの痕跡を観察することができる。また、内面は二次的に被熱し黒色を呈する。SK104と同様、難波V中段階に属する遺物であると考える。

SD106　調査区北東で検出した。第4層上面から掘込まれ、幅0.4m、長さ1.5m以上、検出面からの深さは0.4mある。最下部には第5層由来の偽礫を多く含む加工時形成層(4層)が認められ、その後は第5層由来の偽礫を含む間層(2層)を挟み、粘土質シルト(1・3層)によって徐々に埋没する(図3・5)。遺物は土師器・須恵器が出土した。図化しえなかったが、墨と思われる黒色物質が付着した須恵器片が含まれる。

SX108・SD107　第5層、すなわち地山上面の標高値は、調査地南西がもっとも高く、北東へ向かって徐々に低くなっているが、第4層はこれを埋めるように北東へ向かうにつれ層厚を増し、第4層上面の標高値は、調査地全域にわたってほぼ等しくなっている(図3)。この第4層最下部には、第5層由来の偽礫を含む層準(第4c層／図5－7層)が認められ、また、第4層を除去した段階で、SD107をはじめとして、この7層の形成に伴うものと考えられる数条の溝状遺構を検出した。すなわち、7層は何らかの目的を伴う加工時形成層であると考えられるが、これを覆う5・6層は炭を比較的多く含む以外には明確な特徴を示さず、性格については不明である。第4層について、何らかの遺構である可能性が高いと考え、SX108という呼称を与えた。

当遺構およびSD107等下面検出の溝状遺構からは、土師器・須恵器・瓦が出土した(図6)。土師器杯A13・14は、いずれも外面底部がヘラケズリ調整、他の部分はナデ調整である。また、口縁部はやや強く外折する。13は内面底部にラセン状暗文、体部に放射状暗文を施す。放射状暗文が左上がりである点が特徴的である。また、破砕後に被熱したようであり、断面も含め全面にススが付着する。皿B15は立上がり部分の屈曲が明瞭で、8と比べやや低い高台がつく。煮炊具には羽釜16、小型の甕17がある。いずれも外面にはススが付着する。須恵器には杯B18、蛸壺19がある。18は体部がやや内湾する形態で、外面底部にはヘラ切りの痕跡を残す。19は全面が著しく磨耗・平滑化しており、土錘などとして転用された可能性がある。

これらの遺物については、土師器供膳具のほとんどすべての個体が暗文を有し、一方では口縁部の

形態などに在地性の発露が認められることから、難波Ｖ古段階に属するものと考える。須恵器杯Ｂの形態もこれと整合的である。したがって、実年代としてはおよそ８世紀第２四半期に位置づけられる。

なお、第１期の遺構については、いずれの遺構においても須恵器に比べ土師器が圧倒的に多い。

[第２期の遺構]

第１期の遺構と同一の作業面上で検出したが、これとの切合い関係、出土遺物の年代観、あるいは埋土の特徴などから、第２期の遺構と判断したものである。井戸・土壙・柱穴・溝、そして不確定ながら区画施設と考えられる遺構がある。

SE201　調査区のほぼ中央で検出した、直径約３ｍを測る素掘りの井戸である。検出面からの深さは２ｍ以上ある。作業の安全性を考慮し、底面まで完掘することは断念した。井戸が掘削された後、まずは上部周縁部が埋め戻される(14層)。掘削が及ばず、井戸機能時の様相を埋土から知ることはできないが、廃絶後には自然堆積と壁面の崩落を繰り返し(４～13層)、最終的には人為的に埋戻されている(１～３層)。TP+17.6m以下は壁面が崩落し、オーバーハングしている(図７・８)。

出土遺物には、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・瓦・焼土塊・木片・鉄器と思われる金属片・使用痕のある石材(花崗岩あるいは花崗閃緑岩)があり(図９・16)、残存状態が良好な個体も多い。これらの遺物の大多数は廃絶後堆積層上部(４～７層)から出土した。

廃絶後堆積層上部からまとまって出土した土師器皿Ｃ20～29は、いずれも口縁端部をナデによって外反させ、端部をつまみあげる。口径10.0～10.8cmと法量の画一性が高く、また、器壁も２～３mmの

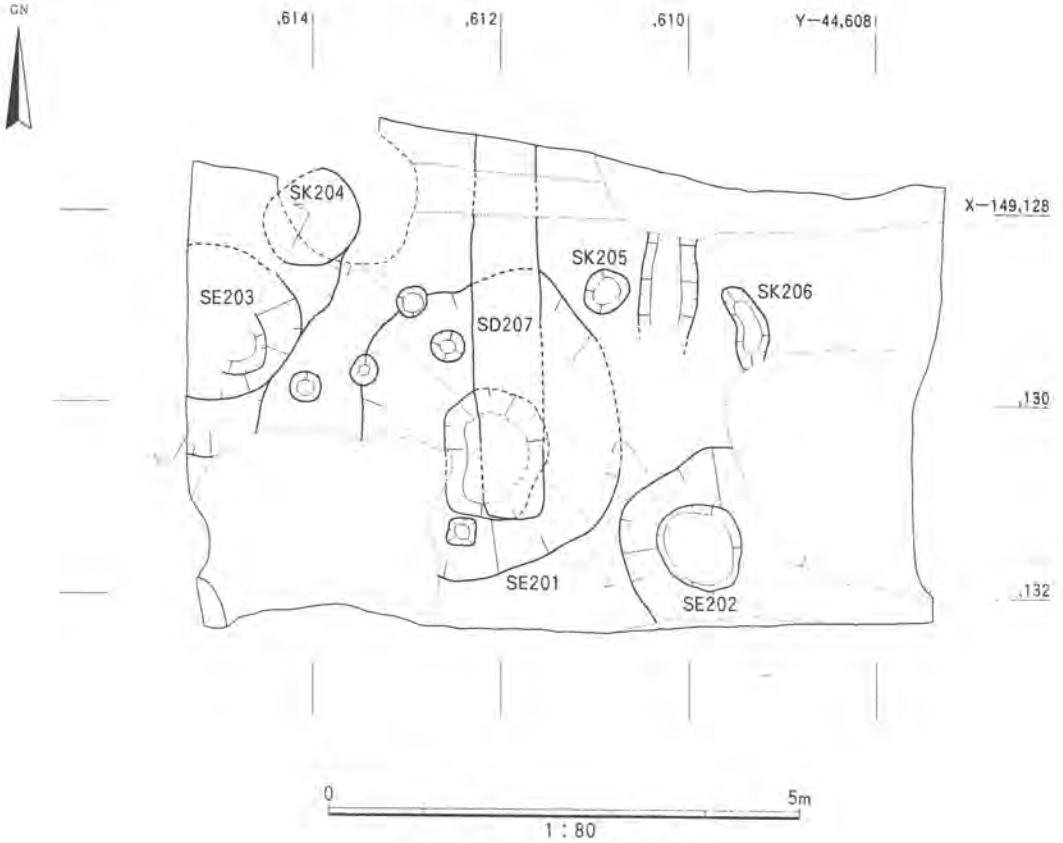
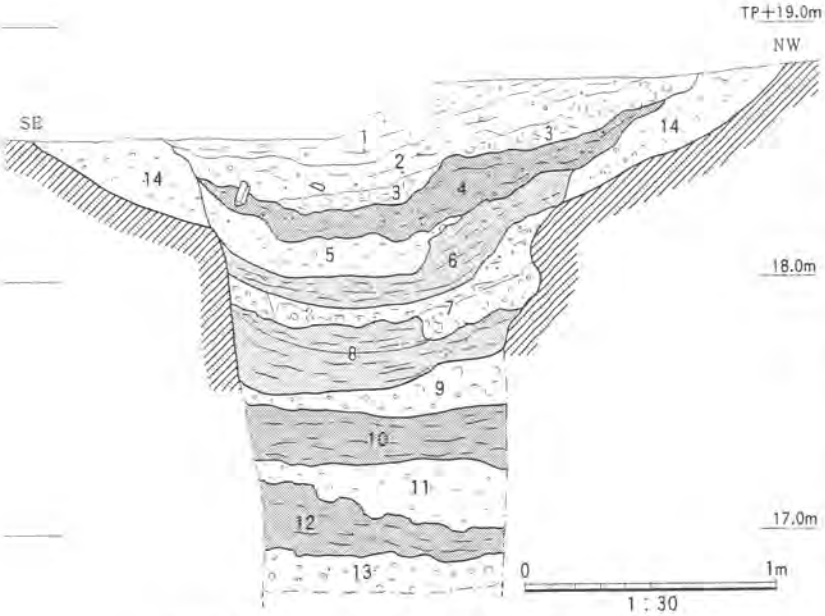



図７　第2期の遺構平面図




1・2：暗オリーブ褐色シルト混り中粒砂（埋戻し土）
3：暗灰黄色シルト混り粗砂（埋戻し土）
4：黒褐色中粒砂含むシルト（廃絶後堆積か）
5：黒褐色シルト混り中粒砂（偽礫多く含む、崩落土か）
6：黒褐色シルト～細粒砂（ラミナ顕著、廃絶後堆積層）
7：黒色シルト混り粗砂（偽礫、焼土を含む、崩落土か）
8：暗灰黄色シルト（ラミナ顕著、廃絶後堆積層）
9：暗灰黄色シルト含む粗砂（崩落土か）
10・12：黒褐色シルト（廃絶後堆積層）
11・13：灰黄色シルト混り中粒砂（崩落土か）
14：灰黄褐色シルト混り中粒砂（偽礫多く含む、井戸掘削時埋戻し層）

図8　SE201断面図

ものが大半を占める。32は口径13.9cmとこれらよりも一回り大きいが、胎土・調整・形態のなどの点でやはりよく類似する。このうち20～23については、明瞭な塗布痕跡は観察できないが、赤彩されている可能性がある。これに対し、廃絶後堆積層の下部から出土した皿30・31は、法量の面ではほぼ同じであるが、胎土・形態などに上記の一群とは差異がある。30は平安京において「コースター形」の祖形とされる形態に近い。また、31の内面中央部にはススが付着する。33は口縁部を外反させる皿Dである。内面にはわずかにハケメの痕跡が認められる。また口縁部の外面にススが付着する。34は口縁端部をつまみあげる。土師器の煮炊具には、甕44、羽釜47がある。

35～43は黒色土器椀である。このうち43のみが両黒で、その他は内黒である。出土層準にはばらつきがあるが、廃絶後堆積層下部から出土した42・43の器壁が3mmと他より薄いことを除き、型式学的にさほど大きな差異は認められない。39～41は表面が還元され内面の炭素が失われている。

須恵器では篠窯産と思われる須恵器鉢45、壺類の底部46・49、大甕50がある。45は口縁部を肥厚させ、焼成は甘く灰白色を呈する。篠窯末期、西長尾5・6号窯に併行する段階のものであろう。

48は軟質で平底の緑釉陶器である。器壁の状態が悪く、外面の施釉範囲は確認できない。洛北産のものと思われる。

瓦には平瓦124・125、小型の重圏文軒丸瓦126がある。126は計測値から6012型式に比定できる[大阪市文化財協会1995]。

これらの遺物は、46・48・49など明らかに先行する遺物を除けば、出土層準に係わらず型式学的にさほど大きな隔たりは認められない。土師器皿Cの形態的特徴や大小の規格が存在すること、そして黒色土器の様相から、平安時代Ⅲ期古段階に位置づけられる。最上層の埋戻し土から出土した45も同じ時期のものである。したがって、当遺構は10世紀末葉～11世紀初頭の段階で掘削され、さほど時を経ずに廃絶し埋没したものと判断できる。

SE202　直径2.0mを測る素掘りの井戸である(図7・10)。検出面からの深さは2.3mある。底部付近

および井戸側部に、偽礫を多く含み崩落土と考えられる９～12層が堆積する。井戸廃絶後に７・８層が堆積したのち、最終的には人為的に埋戻されている（１～６層）。８層以下は重機によって掘削したため、詳細な観察を行うことはできなかったが、TP+17.0m以下は地山が顕著に粗粒化しており、この部分から湧水を得ていたのであろう。この水準で湧水があったことは、この高さ以下の井戸側面が大きくオーバーハングすることからも推測することができる。

当遺構からの出土遺物には、土師器・須恵器・瓦器・瓦・磚・瓦質土器・青磁のほか、結晶片岩、

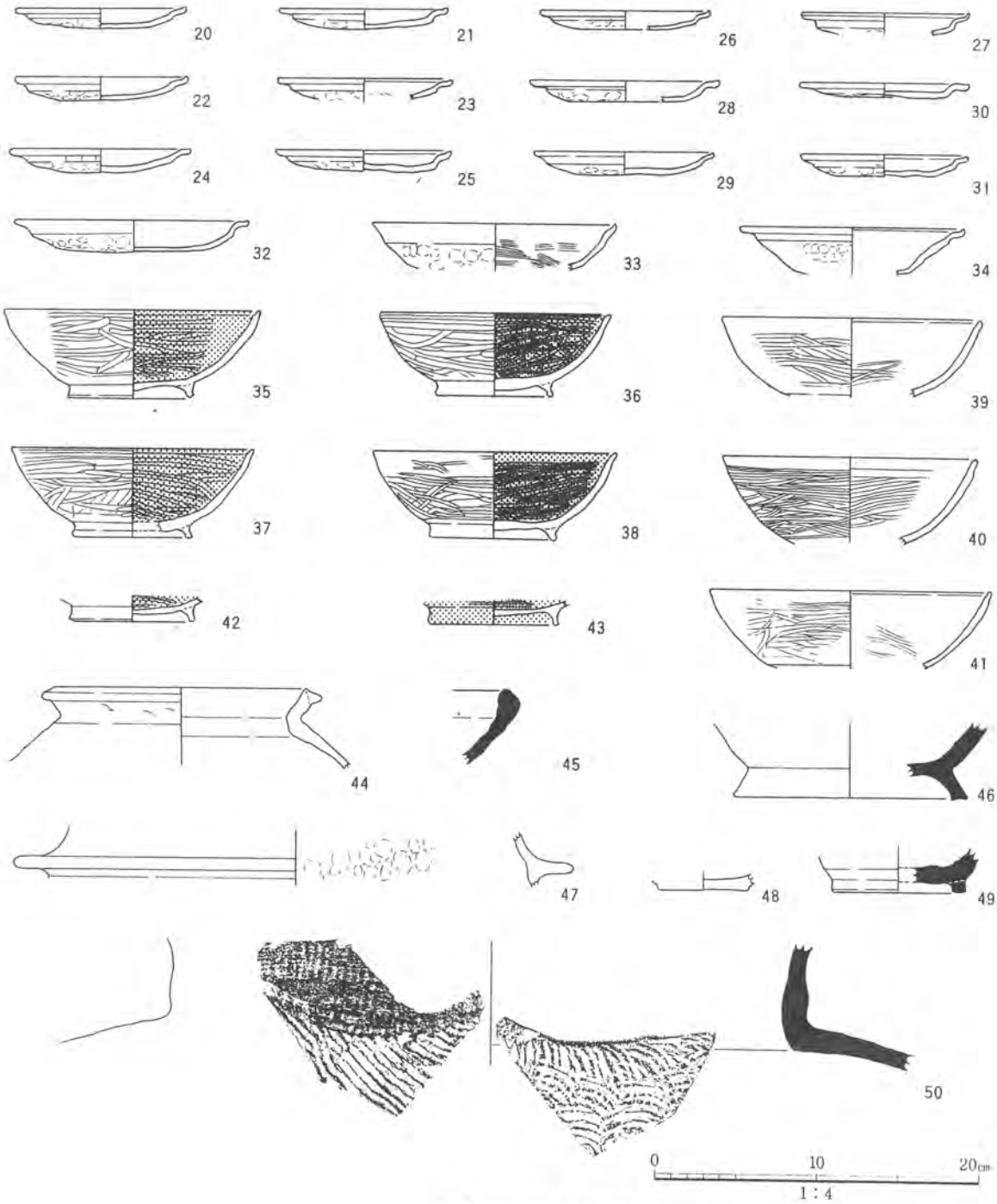
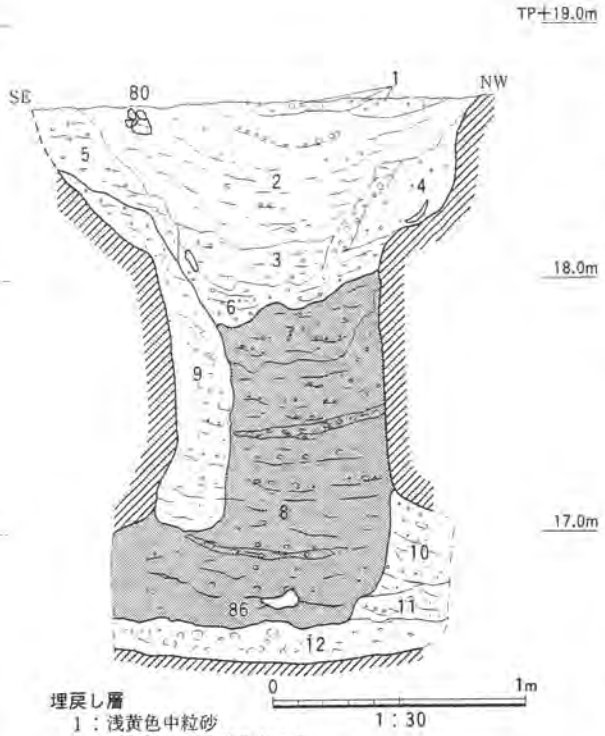



図９　SE201出土遺物
埋戻し層（１～３層）：45、廃絶後堆積層（４～７層）：20～29・32～37・39・40・44・46～48・50、
廃絶後堆積層（８層）：30・31・42・43・49、掘削時埋戻し層（14層）：38・41




埋戻し層
1：浅黄色中粒砂
2：灰黄褐色粗砂混りシルト
3：暗オリーブ褐色粗砂混りシルト
4：暗オリーブ褐色粗砂混りシルト
5：暗オリーブ褐色シルト混り中粒砂
6：黒褐色シルト混り中～粗粒砂

廃絶後堆積層
7：黒褐色中粒砂混りシルト
8：褐灰色中粒砂混りシルト（崩落した土との互層）

崩落土
9～11：暗オリーブ褐色シルト混り中粒砂
12：灰褐色シルト混り中～粗粒砂（偽礫多く含む）

図10　SE202断面図

線刻が施された形象埴輪と考えられる破片などが出土している(図11)。

土師器皿は完形に復元できる個体が多い。法量についてみると、口径8.2～10.0cmの１群51～61、9.5～12.8cmの一群62～69、13.9～16.6cmの一群70～78のおおよそ３群に分けることができる。胎土は明褐色～灰褐色を呈するものがほとんどである。このうち55・74は底部に外面から穿孔を施す。また、57・41は口縁端部にススが付着し、灯明皿としての使用が想定できる。

土師器ではこの他、井戸の底部近くから皿Ａ86が、煮炊具では小型の甕87、羽釜88が出土している。

瓦器椀には79～82がある。このうち79～81はほぼ完形に近く復元できた。いずれも体部の内外面にヘラミガキを施し、底部内面には格子目状の暗文を施す。ただし、外面のヘラミガキは分割の名残をとどめ、内外面とも密に施す個体82がある一方で、79は外面下半のヘラミガキを省略しており、やや様相差がある。小皿についても、内面に密なヘラミガキを施す83、ヘラミガキを施さない84がある。84については口縁部内外面にススが付着している。

瓦質土器には、片口の鉢85がある。小型の擂鉢であろう。このほか、まばらなヘラミガキを有し外面に籾殻圧痕が認められる個体がある。京都系の製品であろう。

瓦には、平瓦129、丸瓦130、鬼瓦131がある。130は鉄釘が刺さった状態で出土したが、本来的な使用状況とは異なり、凹面から差込まれている。131は鬼瓦の脚部と思われる。本例のように脚部が反り返る型式は、14世紀末以降に位置づけられている[山本忠尚1998]。地板が薄い点、珠文をもたない点などいくつかの相違点はあるが、おおよそこの時期以降のものと考えておく。

これらの遺物のうち、まずもっとも年代を把握しやすい瓦器については、和泉型Ⅱ期に位置づけられ、12世紀代の実年代観が与えられる。また、土師器皿51～78もおおよそこの年代観に近いものと思われる。しかし、85など一定量出土する瓦質土器は15世紀を遡るものではないことから、遺構の埋没年代は少なくとも15世紀に下る。また、遺構の最下部近くから唯一出土した土師器皿Ａ86は、８世紀後半に位置づけられる資料であるが、埋没年代とはあまりに離れており、混入品であると考える。

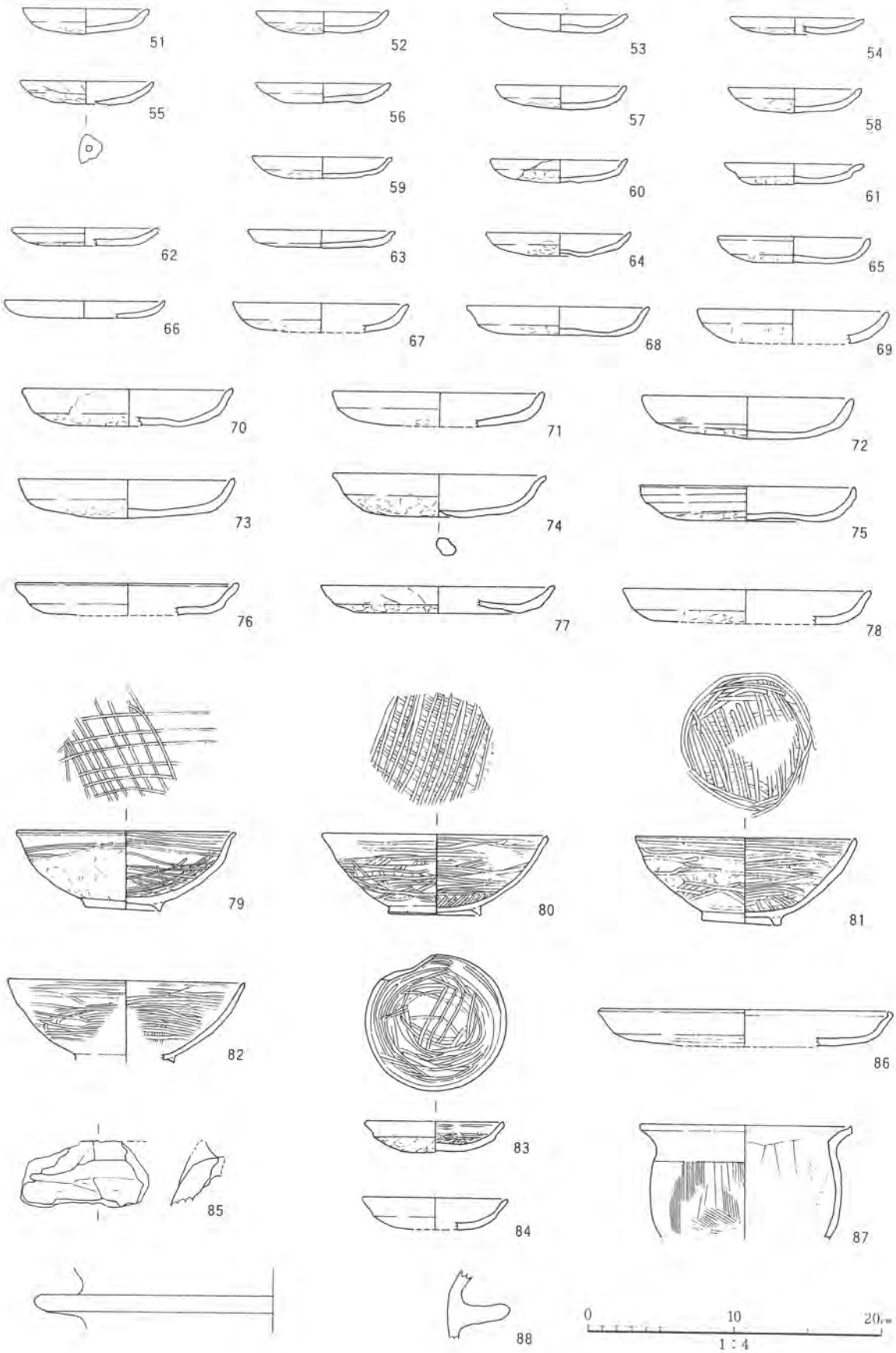
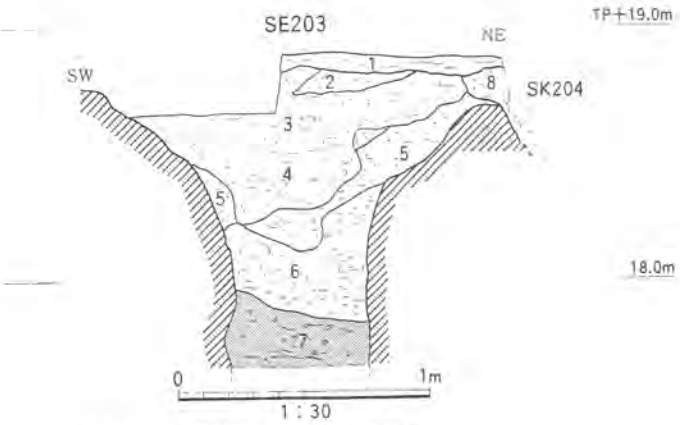



図11　SE202出土遺物

埋戻し層（1～6層）：54・56・58～60・62・65・66・68～74・78・80・84・87、
廃絶後堆積層（7・8層）：51・55・57・82・85・86・88、それ以外は出土層準特定不可




1：オリーブ黄色粘土（偽礫化した整地層）
2：オリーブ褐色粘土混り中粒砂（埋戻し層）
3：オリーブ褐色シルト混り中粒砂（偽礫含む、埋戻し層）
4：灰黄褐色シルト混り中粒砂（大形の偽礫含む、埋戻し層）
5：黒褐色シルト混り中粒砂（小形の偽礫含む、崩落土か）
6：灰黄褐色中粒砂混りシルト（偽礫多く含む、埋戻し層）
7：黒色中粒砂混りシルト（廃絶後堆積層か）
8：暗灰黄色中粒砂（偽礫含む、SK204埋戻し土）

図12　SE203断面図

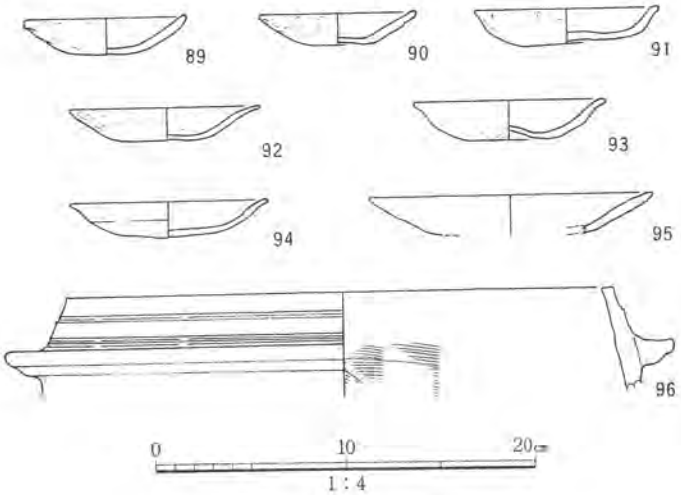



図13　SE203出土遺物

なお、当遺構から出土した2個体の結晶片岩は、明瞭な使用痕・被熱痕跡を留めない。ただ、中世の遺構から出土する結晶片岩については、温石としての利用例が知られており[大立目道代2003]、可能性として提示しておく。

**SE203・SK204**　井戸SE203およびこれに隣接するSK204について、併せて記述する。SE203は、直径1.6mを測る素掘りの井戸であり、検出面からの深さは1.2m以上ある(図7・12)。埋土は、最下部に廃絶後の堆積層と考えられる中粒砂混りのシルト(7層)が堆積し、その後、第5層由来の偽礫を含む中粒砂によって人為的に埋戻されている(2～6層)。SK204はSE203が埋没した後に掘削され、最終的には、第5層上部の岩層と類似した黄白色粘土(1層)によってSE203・SK204とも整地されている。なお、両遺構の下部には現代の攪乱に伴って空隙が生じており、土砂崩落の危険があったため、埋土下部の掘削・記録を断念した。

SE203からは、土師器・瓦127・128などが出土した。また、SK204からは土師器・瓦質土器・瓦が出土している(図13)。土師器皿94には、口縁部内外面にススの付着が認められる。また、瓦質土器には羽釜96がある。京都の土師器編年に照らせば、「へそ皿」形態のものが含まれることから、15世紀後半代の遺物と考える。

**SD207・SA208**　SD207は、調査区ほぼ中央で検出した南北方向に延びる溝である(図7・14)。幅0.7m、長さは4m以上あり、南端は調査区の中で終わる。検出面からの深さは0.3mあった。遺構下部には、第5層由来の偽礫を含み加工時形成層と考えられる2層が認められる。その上部は、やはり偽礫を含むシルト混りの中粒砂(1層)によって埋戻されている。この1層中には、ほぼ同じレベルで完形に近い多くの土器類、銭貨、送風管が含まれていた。1層中には層理面が認められないことから、溝を半分ほど埋めた段階で遺物が置かれ、ほどなく完全に埋戻されたものと考えられる。完形に近い土器が多いこと、また、多くの遺物が正位置で出土したことも、各遺物が単に投棄されたのではなく、意図的に設置されたことが推測できる。なお、北壁の観察から、SD207は第3層に覆われることが確

実である。また、各遺物は後述するSP209・210を避けるようにして設置されていた。

SA208は、SD207を切って掘削された柱穴SP209・210からなる(図14)。SP209は長辺0.6m、短辺0.5mの掘形をもつ方形の柱穴で、検出面からほぼ垂直に0.45m掘り込まれている。柱穴の底面はほぼ平らに成形されており、その上に一辺40cmを測る方形の砂岩製礎板石を設置、さらに半裁した平瓦を敷き、基礎としている。柱痕跡は直径0.15mほどであり、礎板石・瓦の中央に据えられている。また、根固めのためか、柱穴の底部近くには瓦片を多く含む。柱穴の埋土は、偽礫化した黄褐色粘土質シルトであり、第5層上部に由来すると思われる。SP210はSP209とほぼ同様の工程で掘削・設置されるが、大きさは長辺0.5m、短辺0.4mと一回り小さい。また、柱痕跡は平面検出時に方形を呈し、角柱を使用していた可能性がある。なお、両柱穴の底部から出土した平瓦132は接合関係をもつ。両柱穴と組合う柱穴は見つからなかったため、柵列等の施設である可能性が高いものと考える。

ただ、問題となるのはSD207とSA208の関係である。切合い関係から、前者が後者に先行することは確実であるが、両者が連続して掘削されたのか、あるいは時期を異にして掘削されたのかという点について、検出状況からは決定する要素を欠く。ただし、SD207中に設置された遺物がSP209・210周辺を避けていることから、両者に強い関連性があったことが推測できる。よって、区画施設として機能していたSD207が柵列SA208へと改変され、その工程の中で遺物の設置が行われたものと推定する。

SD207からは、土師器・瓦器・瓦・白磁・送風管・石鍋の一部と思われる滑石製品・銭貨が出土した。また、遺構の時期には伴わないが、須恵器・埴輪片も出土している。

土師器皿97～115は、おおよそ大小の2規格に区分すること

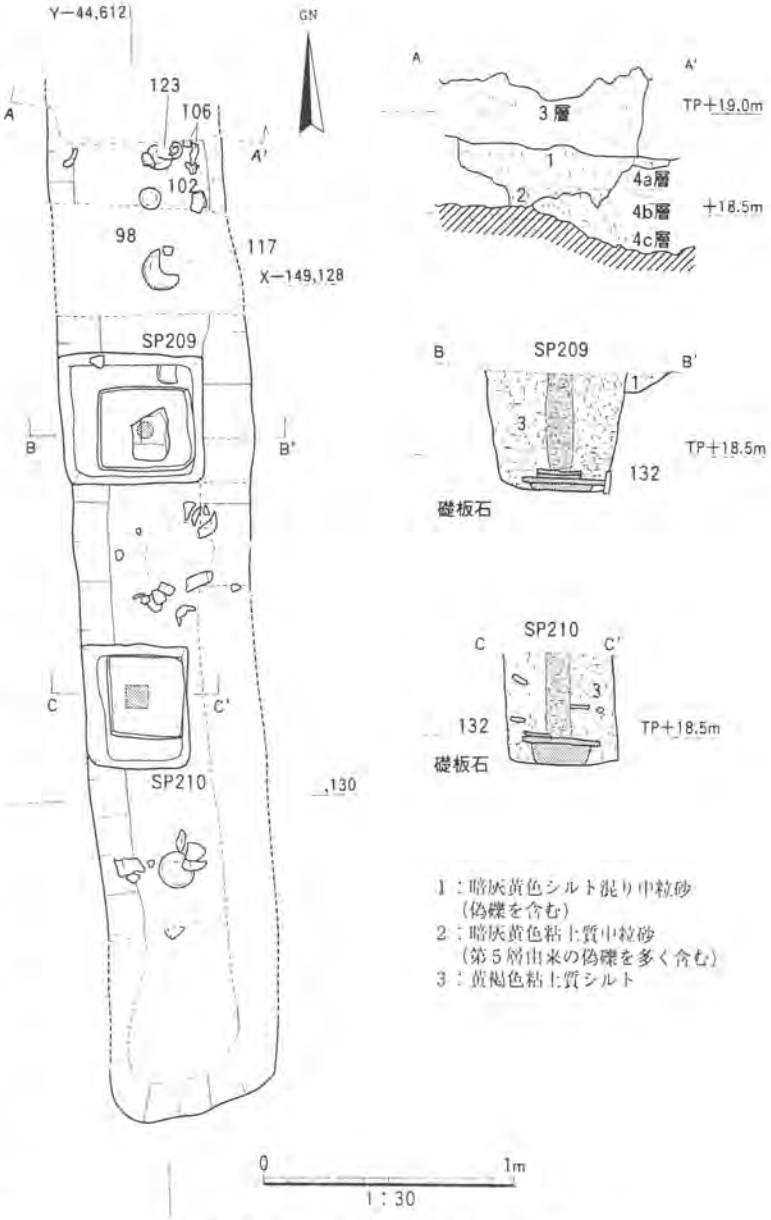



図14　SD207・SA208平面・断面図

ができる。すなわち、口径7.1～8.1cmを測る一群と、11.6～12.8cmの一群である。SE202出土資料と比較すると、法量の縮小化が進行するとともに、口径の大きい一群は口縁端部外面が明瞭に面取りされるようになっている。105は他と形態が異なり、また調整技法についても、内面に小枝を結束したものかと思われる工具痕を留め特徴的である。

瓦器椀116～121はいずれも和泉型のもので、外面のヘラミガキが省略されており、高台もごく低い。口径の縮小化が進み、器高も3cm強である。

123は送風管(羽口)である。残存部分での最大外径7.0cm、孔径は2.5cmを測る。胎土は淡褐色を呈する比較的緻密なものを用い、籾殻と思われる植物質混和材の痕跡が認められる。先端部は顕著に被

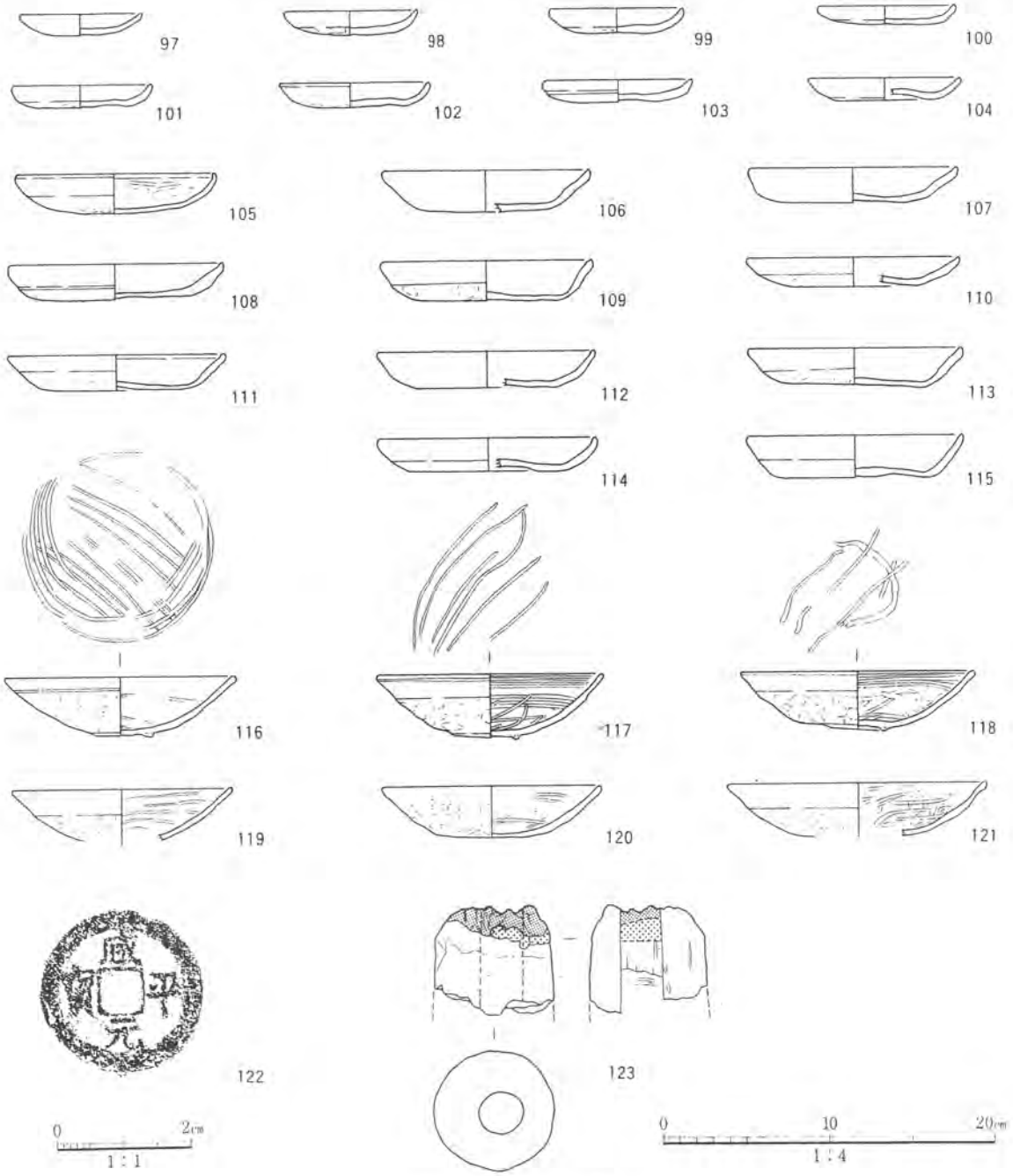



図15　SD207出土遺物

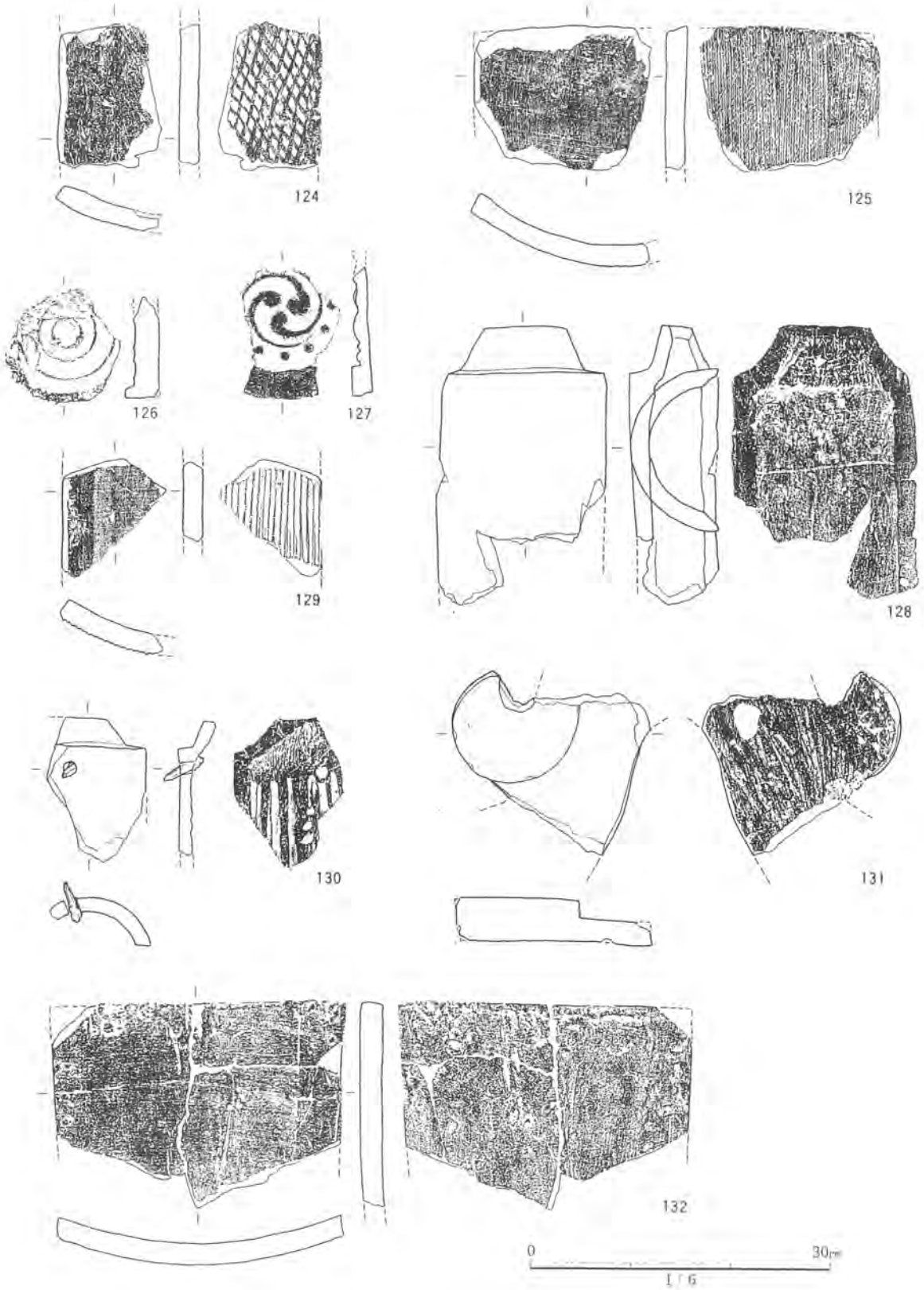



図16　各遺構出土の瓦

SE201／埋戻し層：124・126、廃絶後堆積層：125、SE202／埋戻し層：129・131、灰絶後堆積層：130、SE203：127・128、SA208：132

熱し、スラグが付着している。また、被熱痕跡は送風管の中心軸に対して斜行している。炉への挿入角度を反映するものであろう。

122は咸平元寶(998年初鋳)である。

なお、図化しなかったが、SP209・210から出土した砂岩製の礎板石は、ともに頭部を折り取った四角錐状に加工されている。平坦な面を上とし、柱を据えていた。また、両個体とも被熱の痕跡を顕著に留める。下面が突出することは重量物を受けるためには合理的でないと思われ、また石材の性質から考えても、敢えて四角錐状に加工する積極的な理由は見出せない。したがって、これらの礎板石について転用品である可能性があるものと考える。

これらの遺物は、瓦器がおおよそ和泉Ⅲ－３～Ⅳ－１に相当するものと思われ、土師器などその他の遺物の年代観もこれと矛盾しない。よって、実年代はおよそ13世紀代前半に位置づけられる。

〈まとめ〉

今回の調査においては、狭小な調査面積ながら多数の遺構・遺物を検出した。特に、８世紀代の遺構群は四天王寺周辺における古代の遺構分布について、また、13世紀前半代の区画施設SD207・SA208は四天王寺周辺における地割の変遷などを知る上で、それぞれ重要な情報を提供するものであろう。また、10世紀末～11世紀初頭に埋没する井戸SE201から得られた良好な遺物群は、周辺地域における土器の編年研究上、重要な資料となろう。その他、わずか数片ではあるが円筒埴輪・形象埴輪が出土しており、文献史料に見えるとおり、かつて周辺に古墳が存在したことを推測させる。

さて、伶人町遺跡の調査は今回で数次を経ており、周辺調査での成果も含め、特に古代の様相について若干のまとめを行っておく。まず、周辺調査の成果をみると、谷町筋以東、すなわち四天王寺旧境内遺跡では奈良時代の遺構が多く検出されている。その一方、伶人町遺跡で奈良時代に遡る遺構が検出されたのは、当調査地および西近畿文化財研究所による調査地のみであり[西近畿文化財研究所2005]、狭小な調査範囲であったとはいえ、当調査地のすぐ西側で行われたRJ96－２次調査では古代の遺構は検出されていない[大阪市文化財協会1996]。これら古代の遺構分布とその変遷については、四天王寺、また、難波京の動向と密接な係わりを持つことが容易に予想されるところであるが、伶人町遺跡における古代の遺構分布の範囲についてはなお明らかではない。今後注意を払うべき課題であろう。

伶人町遺跡においては、四天王寺の動向を密接に反映しながら濃厚な密度で遺構群が展開することが明らかになりつつある。すでに指摘のあるところではあるが[大阪市文化財協会1994]、四天王寺を中心とする周辺の様相を解明する上で、また、難波京という都城遺跡の変遷を知る上でも、遺跡指定範囲の拡大をはじめとして、四天王寺周辺における埋蔵文化財調査体制の拡充が望まれる。

註)

(１)年代推定の基準となる遺物の記述にあたっては、それぞれ以下の文献に拠った。

・奈良時代の土器編年・年代観について／佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」；大阪市

文化財協会編『難波宮址の研究』第十一、pp.253－265

・平安時代の土器について／佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』V、pp.102－114

・篠窯産須恵器について／石井清司1995、「篠窯須恵器」：『概説　中世の土器・陶磁器』

・和泉産瓦器の編年について

尾上実1983、「南河内の瓦器椀」：『藤澤一夫先生古稀記念　古文化論叢』、藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会、pp.689－705

ただし、実年代観については以下の文献にて修正されたものを用いた。

森島康雄1992、「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」：『大和の中世土器』Ⅱ、大和古中近研究会、pp.113－127

・中世京都の土師器皿について／伊野近富1987、「かわらけ考」：『京都府埋蔵文化財論集』第１集、京都府埋蔵文化財調査研究センター

引用・参考文献

大阪市文化財協会1995、『難波宮址の研究』第十

1994、『(株)戎屋による建設工事に伴う四天王寺旧境内遺跡・茶臼山古墳発掘調査(CU94－2)略報』

1996、『大阪早稲田速記秘書専門学校による建設工事に伴う伶人町遺跡(RJ96－２)略報』

大立目道代2003、「温石」：『リーフレット京都』No.177、京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館、pp.１－２

西近畿文化財研究所2005、『伶人町遺跡現地説明会資料』

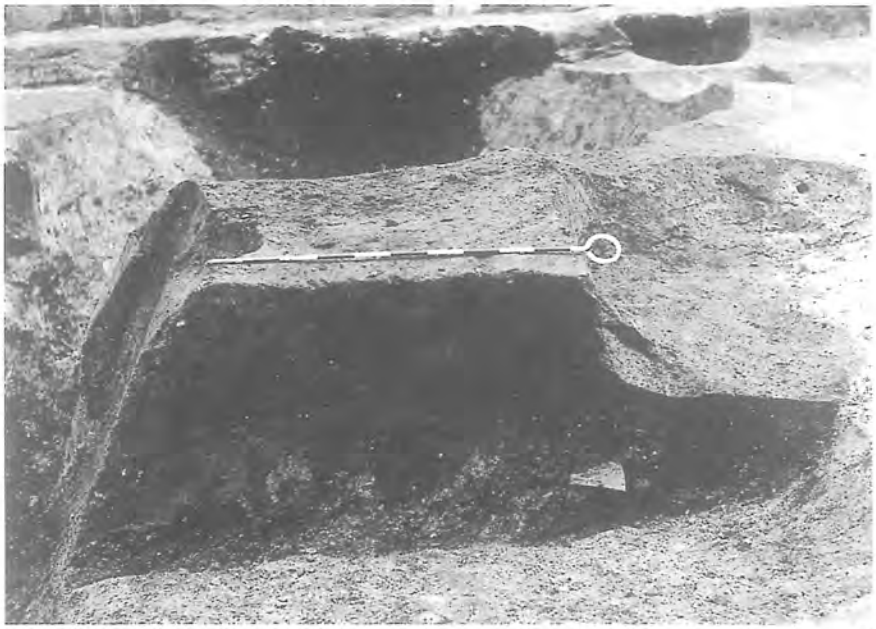
山本忠尚1998、『鬼瓦(日本の美術12　No.391)』至文堂

調査区遠景
（東から）

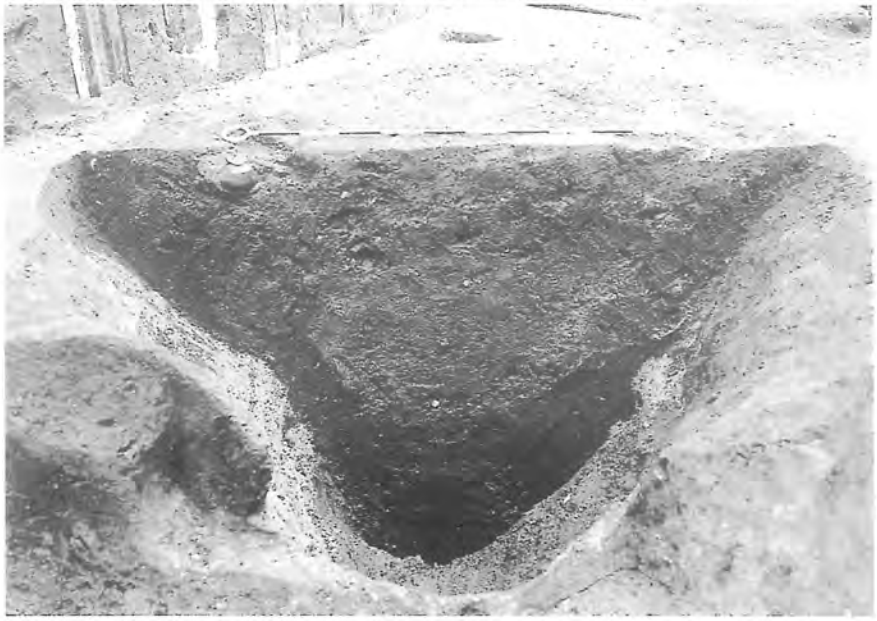
北壁断面
（南西から）

掘削後の状況
（東から）

SK104断面
（北から）



SE202断面
（北東から）



SD207遺物出土状況
（南南東から）

# Ⅳ 東 淀 川 区

# 三宝寺跡伝承地Ｃ地点発掘調査（ＳＰ05－１）報告書

・調査個所　大阪市東淀川区大桐１丁目32－２ほか
・調査面積　60㎡
・調査期間　平成18年2月15日～平成18年2月21日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　田中清美、絹川一徳

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は三宝寺跡伝承地の南方に位置する(図1)。神崎川が淀川から分流するこの一帯は、上流域の淀川低地と下流域の大阪海岸低地に挟まれた吹田砂堆上にあたる。縄文海進以降、早くから陸化の進んだ微高地である。本調査地の周辺で行われたSP02−1次調査では、本来の包含層は確認できなかったが、上部砂層から縄文時代中期末～後期前半にかけての縄文土器が出土しており、そうした地理的特徴を裏付けている。

またこの一帯は、古代より放牧地として利用され、平安時代には典薬寮支配の味原牧(あじふのまき：乳牛牧ともいう)が置かれていた。また、12世紀後半には遺跡名の由来となった禅宗寺院の三宝

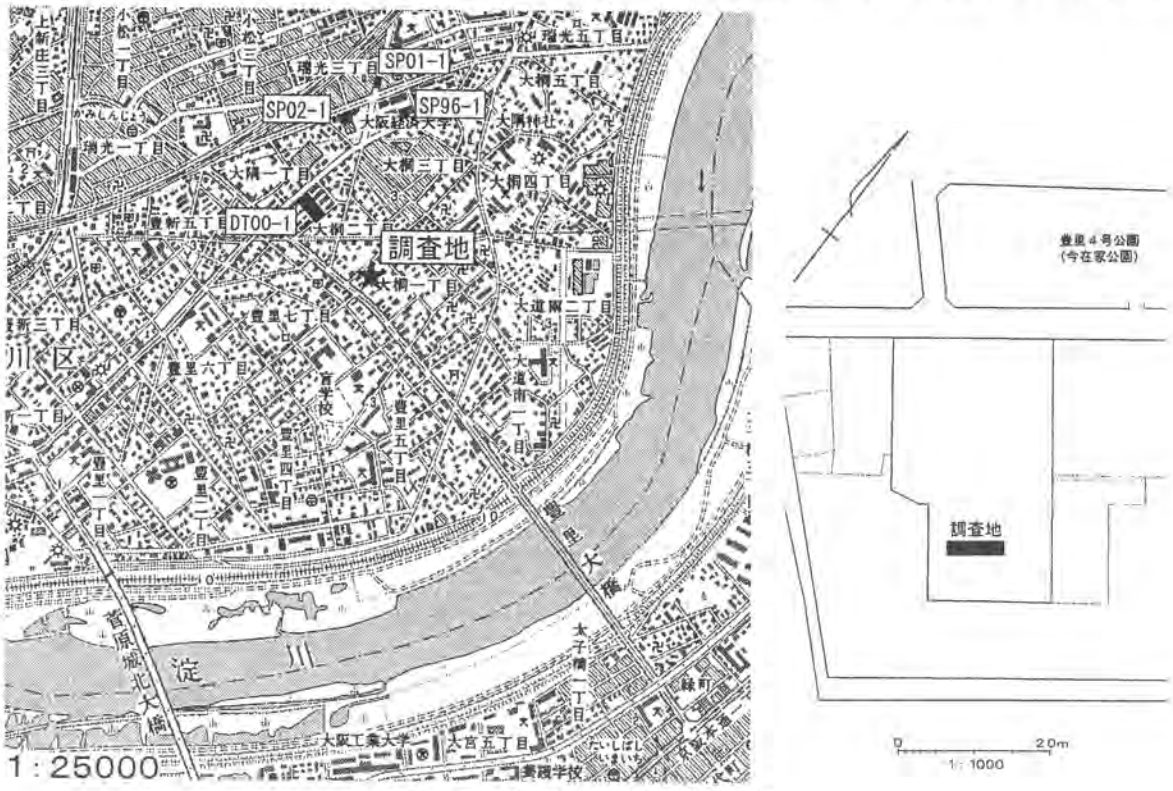



図１　調査地および周辺の既往の調査

寺が大日坊能忍により建立されたといわれ、現在の大阪経済大学のキャンパスがその中心域にあたるとされている。三宝寺は、七堂伽藍が整い多数の僧房を有した大寺院であったが、永禄年間(16世紀中葉)に兵火により焼失したといわれている。調査地一帯は中世には崇禅寺領の荘園地となったが、周辺では中世以降、浄土真宗の影響力も強まり、中小規模の寺堂が置かれ、その多くが今日に至っている。

これまで、大阪経済大学とその周辺を中心に過去4次の発掘調査(SP96−1次・01−1次・02−1次、DT00−1次)が行われ、前述したSP02−1次出土の縄文土器のほかは、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構・遺物が見つかっている。

今回、大規模開発事業地として当調査地において4個所を試掘調査したところ、No.2の試掘抗で、砂堆構成層とみられる砂層の上部が土壌化した暗茶褐色シルト質中粒砂層から掘込まれた土壙状の遺構が確認された。中世あるいはそれ以前のものと見られ、包含層と遺構の有無を正確に確認するため、本調査を実施することとなった。

調査対象として、試掘抗No.1とNo.2を取込むかたちで幅4m、長さ15mのトレンチを設定した。地表下50cmほどの厚さの現代盛土は重機掘削により除去し、以下の地層を後述する砂堆部分に係わる砂層まで人力で分層掘削及び精査を行い、その結果を図面・写真等で記録した。現地での調査は2月21日に完了した。

なお、本調査に用いた方位は磁北であり、水準はTP値である。

〈調査の結果〉

1．層序(図2)

調査地の現標高はTP+3.4mで、調査地の周辺も平坦である。層厚約50cmの現代盛土の下に、吹田砂堆を構成する地層とみられる厚い粗砂層まで、以下の0〜6層の地層を確認した。

第0層：旧地表で現代の整地土である。厚く盛土がなされる以前は、調査地では牧場が営まれており、厩舎等も建てられていたようである。調査地内の攪乱の多くはその建物基礎によるものである。

第1層：黒褐色中粒砂混り粘土質シルトで、層厚は約20cm。作土層である。陶磁器類のほかレンガ細片が認められ、近代以降の地層とみられる。

第2層：暗オリーブ褐色シルト質中粒砂〜中粒砂で、層厚は約10cm。洪水による水成層である。

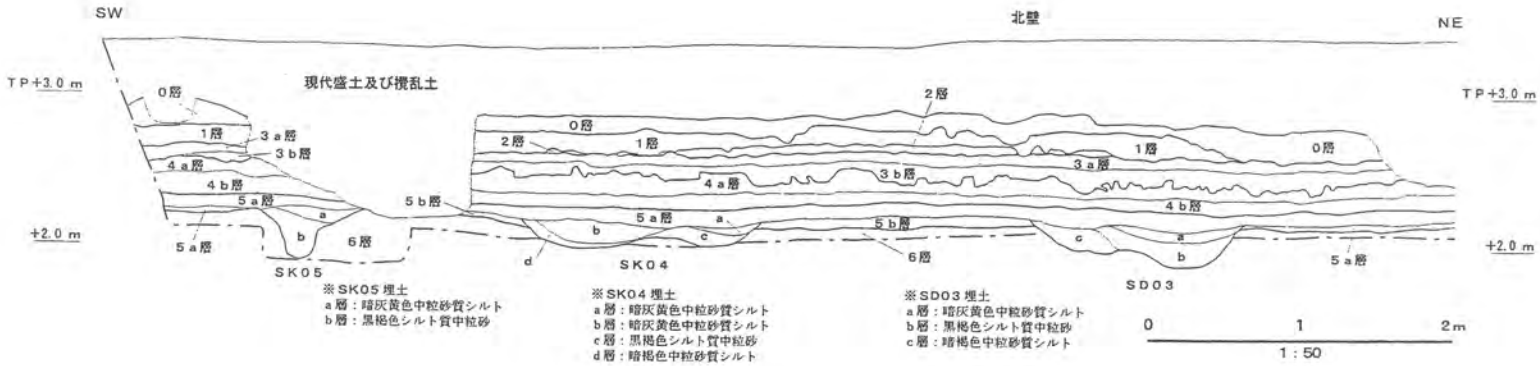
第3層は近世の作土層で、上下2層に細分される。層厚は20〜25cmである。

第3a層：暗黄灰色細〜中粒砂質シルト。近世陶磁器を含む。下位層との層界はやや不明瞭である。

第3b層：暗黄色シルト質細〜中粒砂。本層も作土層であるが、下部には断片化されたラミナが所々で観察され、もとは水成層であったことがわかる。また、本層の下面において鋤溝を検出した。下位層との層界は明瞭である。

第4層は中世の作土層で、上下2層に細分される。層厚は15〜25cm。出土遺物の年代から、14世紀以降に形成されたものとみられる。

第4a層：オリーブ褐色粘土混り細〜中粒砂質シルト。瓦・瓦器・土師質鍋把手・足釜・青磁等の細


SW
北壁
NE
TP+3.0 m
現代盛土及び攪乱土
0層
1層
3a層
3b層
4a層
4b層
5a層
5b層
6層
2層
+2.0 m
SK05
SK04
SD03
※SK05 埋土
a層：暗灰黄色中粒砂質シルト
b層：黒褐色シルト質中粒砂
※SK04 埋土
a層：暗灰黄色中粒砂質シルト
b層：暗灰黄色中粒砂質シルト
c層：黒褐色シルト質中粒砂
d層：暗褐色中粒砂質シルト
※SD03 埋土
a層：暗灰黄色中粒砂質シルト
b層：黒褐色シルト質中粒砂
c層：暗褐色中粒砂質シルト
0
1
2m
1：50

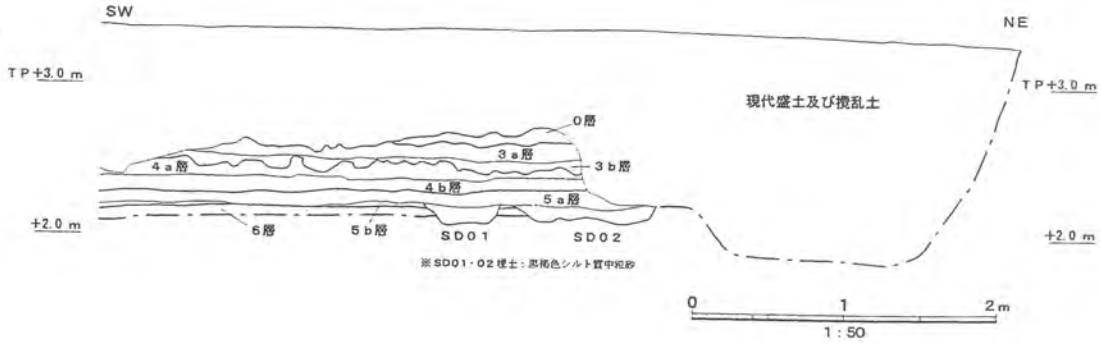

SW
NE
TP+3.0 m
現代盛土及び攪乱土
0層
3a層
3b層
4a層
4b層
5a層
6層
5b層
SD01
SD02
+2.0 m
※SD01・02 埋土：黒褐色シルト質中粒砂
0
1
2m
1：50

図2　北西壁土層断面図

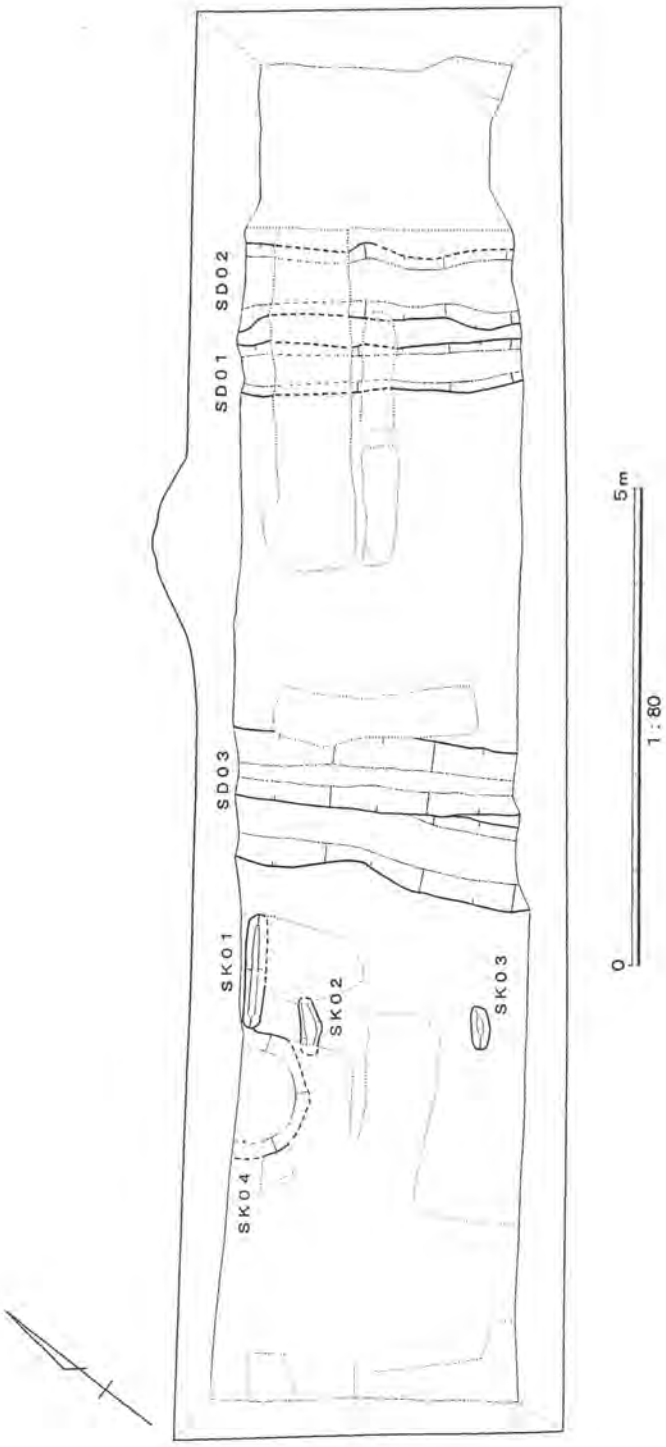



図３　第5b層上面検出遺構配置図

片が出土した。

第4b層：にぶい黄褐色シルト質細～中粒砂。本層も下部に断片化したラミナが観察された。もとは水成層である。出土遺物は第4a層と同様で、ほかに滑石製品の小剥片が出土した。

第5層は下位層である厚い粗砂層の上部が土壌化したものである。層厚は約30cmで、上下２層に細分できたが、土質は漸移的でその層界はやや不明瞭である。出土遺物から、13世紀までに形成されたものとみられる。

第5a層：暗茶褐色シルト質細～中粒砂。瓦・瓦器・土師皿・須恵器等の細片が出土した。瓦器椀は大半が和泉型で、その特徴から12世紀後半から13世紀頃のものとみられる。

第5b層：暗褐色シルト質中粒砂。上位層より砂質が強まる。本層上面で溝等の遺構を確認した。

第6層：暗オリーブ褐色～褐色粗砂。層厚は80cm以上で、調査地では下限を確認することができなかった。砂堆を構成する砂層とみられるが、遺物が認められないため、時期は不明である。

２．遺構と遺物

i)遺構(図３)

検出した遺構はいずれも第5b層上面検出遺構である。SD01～03、SK01～05を確認した。

SD01～03は北西－南東方向の溝で、いずれの埋土も黒褐色シルト質中粒砂の水成層を主とする。SD03では上部に暗褐色粘土混り中粒砂質シルトの水成層が堆積していた。

SK01～05は土壙であるが、溝と同じように、埋土は黒褐色のシルト質中粒砂が主で、SK04と壁面で検出したSK05では、埋土上部に水成の中粒砂質シルト層が堆積していた。いずれも自然に埋積したものと思われる。

上記の遺構からはいずれも出土遺物は認められなかったが、第5a層の出土遺物の時期からみて、12～13世紀のものと推定される。ほかにも不整形な落込みがいくつか認められたが、その形状から自然の窪みとみられる。

ii)遺物

遺物はほとんどが細片であり、図化できるものはなかった。また、すべて包含層からの出土であり、遺構出土のものは認められなかった。

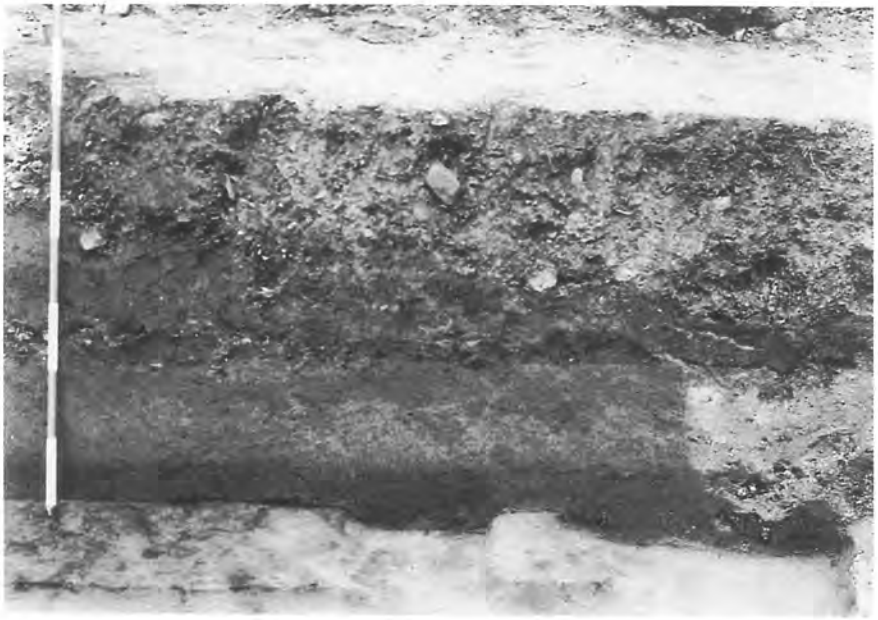
前述した第4b層から出土した滑石製品の小剥片は2×4㎝、厚さ0.8㎝程度のもので、片面が平滑に磨かれており、他面には全面に炭が付着していた。石鍋等の破片である可能性が高い。

〈まとめ〉

今回の調査では、三宝寺跡伝承地の南部に位置する本調査地の一帯にも中世の遺物包含層と遺構面が拡がっていることが明らかとなった。吹田砂堆により早くから陸化が進んだ当地域は、洪水等による断続的な被害があったものの、古代以降、ほぼ連続して土地利用が進められた場所である。しかし、三宝寺跡伝承地の中心域を含め、当地域の遺跡調査は事例が少なく、なお不明な点も多い。良好な状態の遺跡が周辺に残されている可能性も高く、総括的な成果は、今後の調査に期するところが大きい。

第5b層上面検出遺構全景
（南西から）

北西壁土層断面
（北東側）



北西壁土層断面
（中央）

# V 生　野　区

# 勝山北１丁目所在遺跡発掘調査（ＫＵ05－１）報告書

・調査個所　　大阪市生野区勝山北１丁目
・調査面積　　約60㎡
・調査期間　　平成17年４月5日～平成17年４月11日
・調査主体　　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　田中清美、小田木富慈美

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地はJR環状線桃谷駅から南へ約400mの上町台地東斜面に位置し、周知の遺跡範囲外にある(図１)。北には百済寺に比定される堂ケ芝廃寺や百済尼寺にほど近いと推定される細工谷遺跡があり、西南には四天王寺や摂津国分寺跡が存在するなど、付近には古代寺院が多く立地する。また東には前方後円墳の御勝山古墳や縄文時代の遺物が出土した勝山遺跡があり、周辺は歴史的に重要な地点である。工事に先立つ試掘調査で、現地表下約0.7m以下に古代から中世の遺物を含む包含層が見られたため、関係者・大阪市教育委員会と協議の上、本調査を行うことになった。

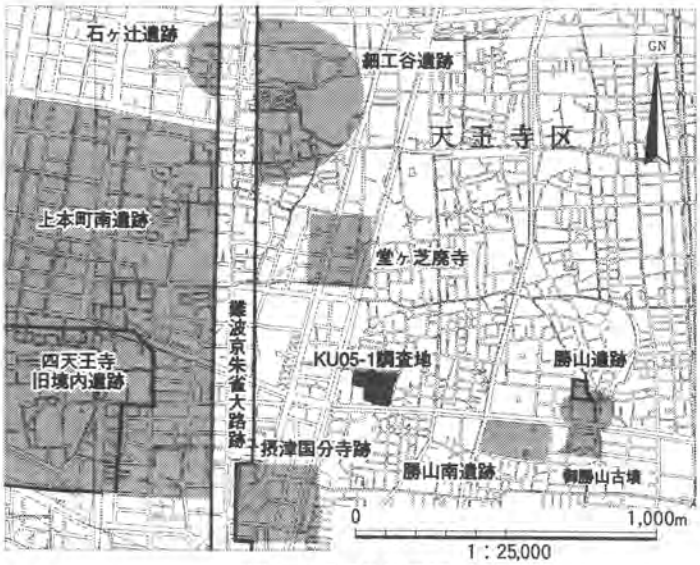


図１　調査地周辺図

調査はまず、工事基礎が入る敷地南半のグラウンドに東西に長い調査区を設定した(図２)。平成17年４月５日に重機で近世以降の土を除去し、続いて以下の地層を人力により精査した。４月８日までの間に掘削・精査・写真撮影・記録等の調査に係わる作業を終えて翌日埋戻し、４月11日に撤収作業を行った。なお、今回の調査で使用した方位は磁北、標高はTP値である。

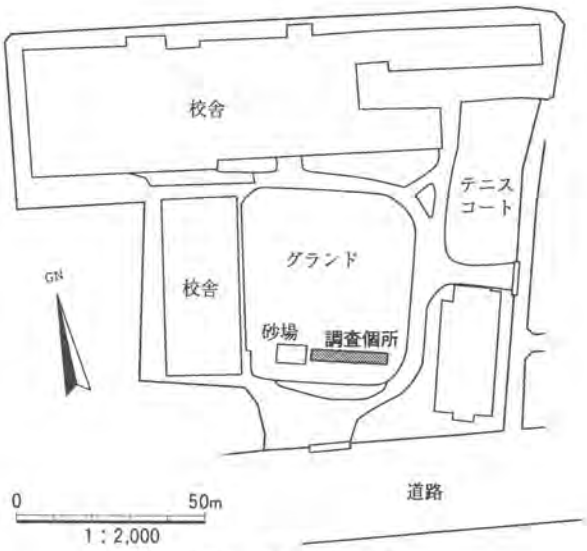


図２　調査区の位置

〈調査の結果〉

1．層序(図3)

本調査では東端で現地表下0.7mで地山となる段丘構成層が確認されたが、この南西では谷地形が深く入り込んでおり、西端で現地表下2.6mまで中世以降の堆積層であった。各層序は以下のとおりである。

第0層：厚さが30cmほどの現代表土である。重機により除去した。

第1層：現代作土層である。

第2層：上下2枚に分層可能であった。第2a層は黄褐色砂質シルト層で、段丘構成層の偽礫を多く含む人為的な整地層である。おもに調査区東半に認められ、東端で検出した浅い窪みの埋土となっている。第2a層からは江戸時代後半の陶磁器、瓦器、瓦片が出土した。第2b層は作土層で、詳細な時期を特定しうる遺物は出土していない。なお、調査区西半の谷地形の中では、下位の第3層との境で噴砂による地割れ状のひびが確認された。断面観察によると、噴砂は第2b層の下位で横に広がっており、ここが地震の起こった面と想定された。また、この砂は下位の第4層に由来すると判断された。出土遺物の時期からみて、この噴砂は中世末～近世までの地震に伴うものであろう。

以下の第3～5層は調査区東端を除く谷地形の中で認められ、南西に向って厚く堆積していた。

第3層：にぶい黄褐～褐色の粗粒砂～中粒砂質シルト層で礫を多く含み、下部には鉄分・マンガンが多く沈着する。層厚は40cm未満で、下面に耕作痕跡が認められたことから作土層と思われる。また、断面観察では谷地形の東肩で北西～南東方向の溝が検出された。当層からは須恵器、土師器、瓦器のほか中国製白磁(図4－5)・青磁片、布目瓦片、内面調整がコビキAの丸瓦が出土している。

第4層：上下2枚に分層可能であった。上部である第4a層は礫を含む黄褐色粘土質中粒砂層である。層厚は20cm未満で、下部の第4b層を耕起した作土層と思われる。第4b層はにぶい黄褐色粘土質粗粒砂層で、段丘構成層である第6層の偽礫を多く含むことから客土と思われる。須恵器、土師器、瓦器のほか凸面に縄目タタキを施す布目瓦片が出土した(図4－1～4)。

第5層：層厚20cm以上の礫を多く含む灰オリーブ色粘土質粗粒砂層である。須恵器、土師器、瓦器片が出土した。

第6層：黄褐色砂礫層で調査区東半でのみ検出された。段丘構成層で生痕化石が顕著に認められる。

2．遺構と遺物(図3・4)

調査区では表土を除去するとまず、大正時代の建物の基礎が東西に並んで認められた。この建物は大正6(1917)年に建てられ、昭和9(1934)年の室戸台風で倒壊したとされる。この後で建物に使用していた瓦やタイルなどを捨てた土壙が調査区中央で認められた。基礎は現地表下0.7～1.0mでとどまっており、これ以下では良好に近世以前の地層が残存していた。

調査区東側の高所では地山層の上で浅い落込みが検出され、これより南西では谷地形が認められた。

東で確認した第2層を埋土とする落込みはいずれも深さ0.1m未満で、土師器の細片が出土したのみである。近世以降の所産であろう。

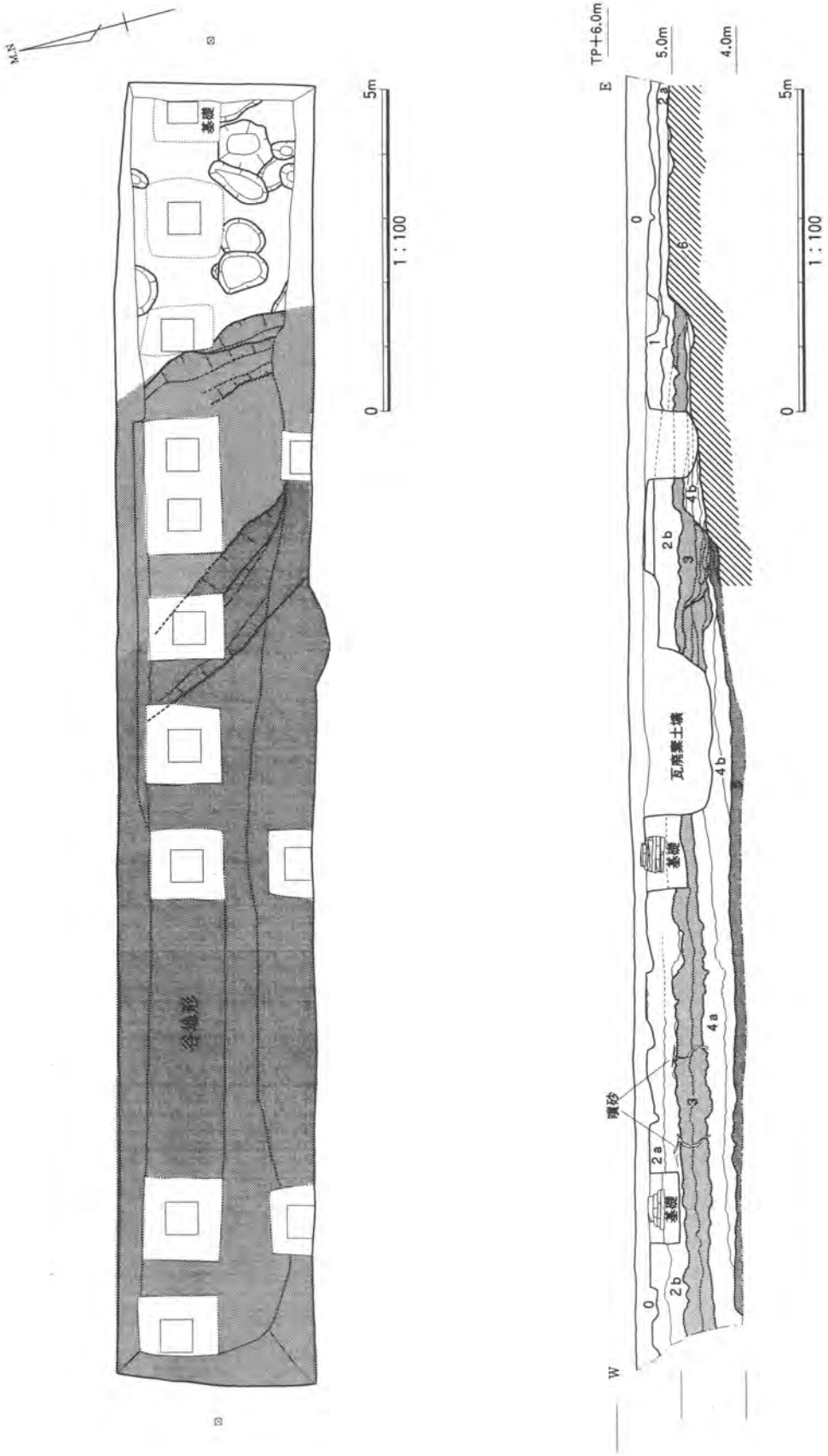



図3　遺構平面図・南壁地層断面図

南西で認められた谷地形はその東側が二段に落込んでおり、谷との境では北西から南東方向の溝が数条確認された。溝は同じ位置で何度か掘削していることが断面で確認された。出土遺物からこの谷は近世にほぼ完全に埋没していることが推測された。谷からの出土遺物は土師器、須恵器、瓦器、中国製磁器、瓦である。これらのうち５点を図示した。1～4は第４層より、5は第３層から出土した。1・2は須恵器杯Ｂである。いずれも奈良時代であろう。3は土師器皿である。焼成は良好で、口縁部の内外面をヨコナデする。12～13世紀頃であろう。4は瓦器椀である。焼成は良好で器高は高いものと思われる。内面のヘラミガキは密である。12世紀前半頃であろう。5は白磁碗である。以上の遺物のほかに第３層から中国製青磁が出土している。遺物の時期には大きく分けて２時期あり、奈良時代と平安末期～鎌倉時代にその中心があるようである。古代についてみると須恵器・土師器に加え少量ではあるが布目瓦が出土している。当地では中世には耕作が行われていたと類推されるにも関わらず遺物の磨滅はあまり進んでいないのが特徴である。

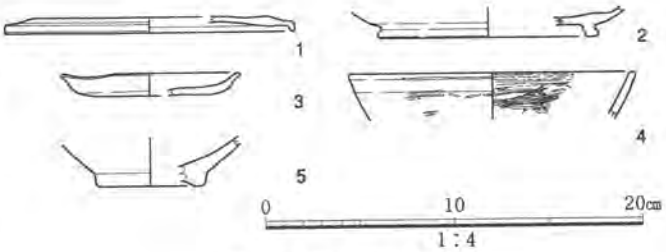


図４　各層出土の遺物
第３層（５）、第４層（１～４）

〈まとめ〉

今回の調査地は周知の遺跡の範囲外に当っていたが、古代から近世にかけての周辺の地形や土地利用の変遷を知るうえで多くの成果を得ることができた。

まず、調査区の南西部では中世にほぼ埋没する谷地形が検出された。明治期の地図でみると、この谷地形の名残が水田となって残っている（図５）。これによると調査区の北にはふたたび谷の存在が推定され、調査地は上町台地の東端が舌状に張出す部分に立地することがわかる。これより北の堂ケ芝廃寺や細工谷遺跡にかけては台地の東辺にいくつもの開析谷が入り込み複雑な地形を呈していた。今回の調査で確認した谷はこの一つに当り、埋没の時期を知りえたことで今後の周辺地形の変遷を検討するための貴重な資料を提示しえた。

また、今回の調査では古代に遡る地層は掘削しえなかったが、古代の瓦が中世以降の地層から出土している。当該期の遺物の出土量も比較的多い。このことから、付近の台地上に古代の遺構が存在した可能性は高いと考えられる。なお上記の地図では調

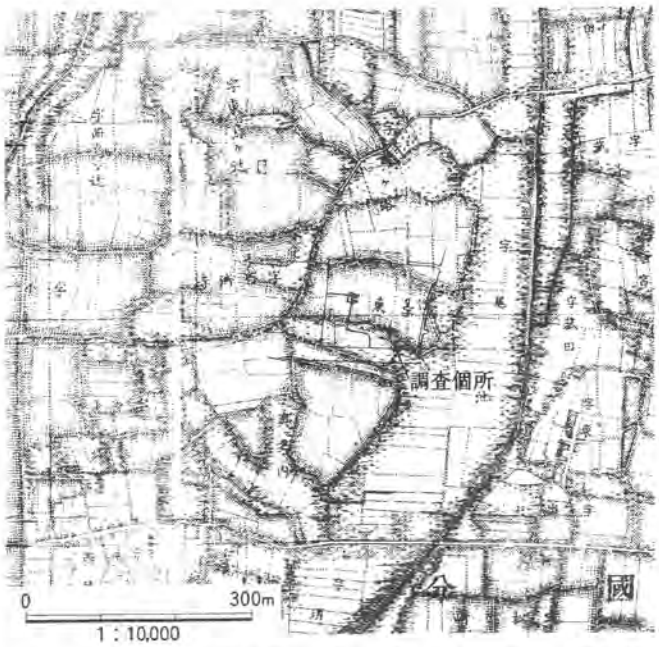


図５　調査地付近の谷地形（明治19年『大阪実測図』に一部加筆）

査地の西側は字名「百済寺」とあり、東400mに位置する府立桃谷高校の敷地内では法隆寺式の軒瓦が出土している。百済寺に関しては堂ケ芝廃寺をこれとする説が有力視されている[藤沢一夫1969]。今回の調査地はこの地よりも南へ約600m離れており、出土した瓦の由来を推定するためには周辺資料の増加を待たねばならない。また、東方600mに位置する勝山遺跡(御勝山古墳)の調査でも古代の遺物は中世とともに比較的多いようである。このことからも調査地周辺が古代において重要な地点であったことが推察されよう。

中世には谷はほぼ埋没して付近は耕作地として利用されていたようである。中世の遺物は12～13世紀を中心とし、これ以降の輸入陶磁器も出土している。調査地は四天王寺東門からはほど近く直線距離で約1km東に位置することから、遺物の増加は平安時代末からその勢力を拡大した四天王寺周辺の状況を反映しているのかもしれない。

さらに、今回の調査では中世末～近世までの間で地震の痕跡を確認しえた。畿内周辺で記録に残る室町時代末から近世初頭の大地震(マグニチュード7以上)としては永正17(1520)年、慶長元(1596)年の地震がある。このほかにも四天王寺の鳥居が崩れるなどの記録が残る地震が永正7(1510)年、天正7(1579)年に起こっている(註1)。この中で最も有名なのは慶長元年の慶長伏見大地震である。この地震による噴砂などの跡は京都府南部から兵庫県南部にわたる複数の遺跡で検出されている。今回確認された地震の痕跡が慶長伏見大地震に該当するか、それともほかの地震に伴うものかについては今後周辺の調査知見の増加を待って検討すべき課題である。

註

1　地震データは尾池和夫監修『京都と周辺地域の地震活動の特性』表3京阪神とその周辺地域の主な地震の表(http://homepage2.nifty.com/cat-fish/ky-eqdb/hyo3.html)による。

参考文献

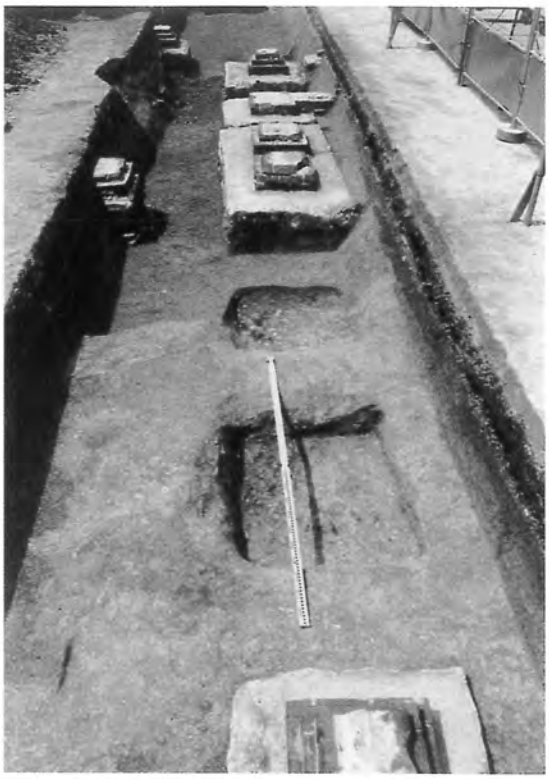
藤沢一夫1969、「摂津国百済寺考」:『日本の中の朝鮮文化』2　日本の中の朝鮮文化社、pp.55－58

調査地遠景
（北西から）

機械掘削状況
（西から）

調査区南壁断面
（西から）

地山上面遺構
検出状況
（西から）



地山上面の谷地形
（西から）

旧校舎模型

# VI 旭　　区

# 森小路遺跡発掘調査（ＭＳ05－１）報告書

・調査個所　大阪市旭区新森３丁目15－18
・調査面積　43.5㎡
・調査期間　平成17年４月25日～４月28日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　田中清美、宮本佐知子

〈調査に至る経緯と経過〉

森小路遺跡は、大阪市の北西部、旭区新森２～７丁目、清水１～４丁目に所在する。新森中央公園の北東約200ｍ付近を中心にして、半径約400ｍが遺跡の範囲とされている。調査地は新森中央公園の北西に位置し(図１)、周辺でのこれまでの調査では、弥生時代の集落の縁辺部に位置する地域と推定されてきた。今回の調査地の南に位置するMS80－６[大阪市文化財協会1981]・93－15次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1995]では、奈良・平安時代の地層と弥生時代中期の地層や、土壙などが検出されている(図２)。

当該地は平成17年４月14日に大阪市教育委員会が試掘を行い、４月25日から本調査を実施することとなった。表土および作土層を重機で掘削し、その後は人力で遺構を検出し、実測・写真撮影などの作業を行い、４月28日に埋戻しを完了した。

図１　調査地位置図

図２　調査区配置図

図で使用した方位は磁北で、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中ではTP＋○mと記した。

〈調査の結果〉

1．層序(図3)

第1層：表土および近世以降の地層である。

第2層：黒灰色シルト～粘土層で、第2a層・2b層に分かれる。蓮田の作土である。

第3層：淡灰色シルト層で、上部の第3a層と下部の第3b層に分かれる。後者はラミナの発達した淡灰色シルト質細粒砂層である。

第4層：褐色砂礫層で、当地域の地山である。

2．遺構と遺物

第3層上面で土壙状の落込みを検出した。他には黒灰色粘土層を埋土とする直径0.02～0.1m、深さ0.02～0.16mの穴が20個所以上認められた(図3)。

1)遺構(図3～5)

**SX01**　調査地の東辺で検出した土壙状の落込みで、大きさは1.3×1.6m、深さは0.04mあり、埋土は炭を多く含む暗黒灰色シルトである。畿内第Ⅱ様式に属する甕(図6)が出土した。

**SX02**　SX01に切られる不整形な土壙状の落込みで、大きさは1.9×1.9m以上、深さは0.2mである(図5)。埋土は炭混り暗黒灰色シルトで、時期不明の弥生土器の細片が出土した。

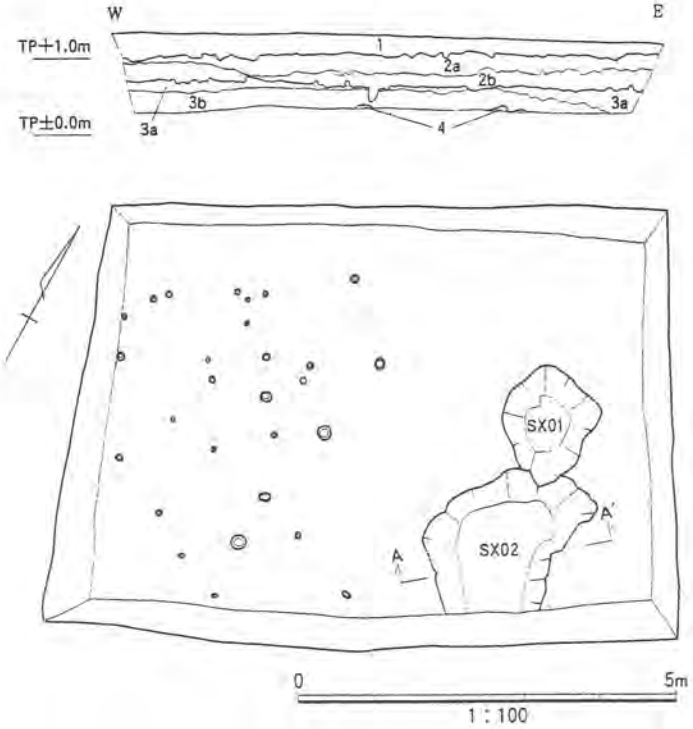



図3　第3層上面検出遺構・北壁地層断面図

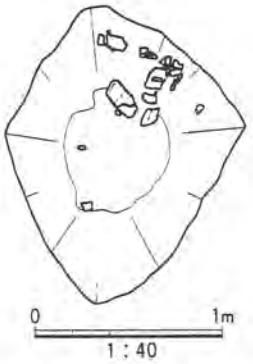



図4　SX01土器出土状況

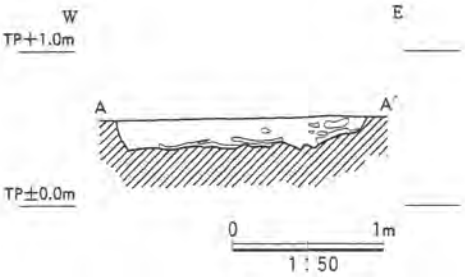



図5　SX02断面図

〈まとめ〉

森小路遺跡の弥生時代中期の集落の中心は、これまでの調査結果から[大阪市文化財協会2001]、調査地北東部の微高地にあり、当該地はその縁辺部に位置する。

今回の調査では、表土層直下0.6m前後まで作土層が堆積し、隣地調査で検出した古代～中世の地層は確認されず、弥生時代中期の地層も上部は作土で攪乱されていた。検出したのは土壙状の落込みが2基のみである。標高が低く、土壙のみを検出したことで、調査地が弥生時代中期の集落域のはずれになっていることを示唆しているのかもしれない。

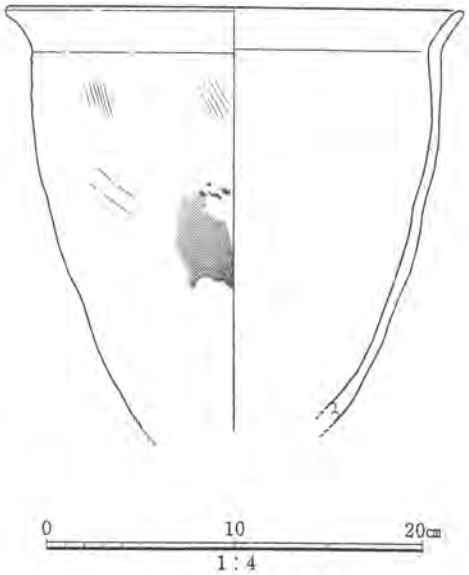


図6　SX01出土遺物

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1993、『平成4年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市文化財協会1981、「中嶋邸新築工事に伴う森小路遺跡発掘調査(MS80－6)略報」

大阪市文化財協会2001、『大阪市旭区森小路遺跡発掘調査報告』Ⅰ

調査地全景（南から）

SX01検出状況（北から）

# Ⅶ 住　　吉　　区

# 山之内遺跡発掘調査（ＹＭ05－１）報告書

・調 査 個 所　大阪市住吉区山之内3丁目94－3、94－4
・調 査 面 積　25㎡
・調 査 期 間　平成17年6月6日～平成17年6月9日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　田中清美、絹川一徳

〈調査に至る経緯と経過〉

山之内遺跡は南北に延びる上町台地の基部に位置する旧石器時代から近世に至る複合遺跡である。本調査地は山之内遺跡の西地区に当たる(図1)。これまでの調査では西地区の南部を中心として、弥生時代と古墳時代中期～奈良時代にかけての遺構や遺物が多数発見されているほか、東地区北部では中世の鋳造関連の遺構や遺物が多数確認されている。

今回、本調査に先立って5月17日に試掘調査を行ったところ、段丘構成層とみられる赤褐色シルト質粘土層(地山層)に掘込まれた遺構が確認されたため、遺構面の拡がりと遺構の時期を正確に確認するため、本調査を実施することとなった。

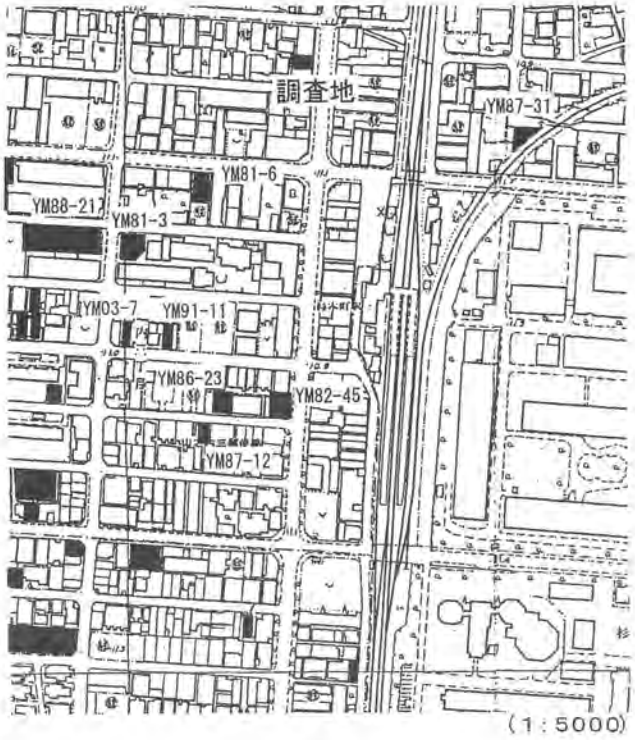



図1　調査地および周辺の既往の調査

調査対象として、試掘壙の西側に5×5mの広さの発掘区を設定した。発掘調査の着手前に、現代盛土層が重機により除去されていたので、以下すべて人力により掘削および精査を行い、図面・写真等で記録した。現地での調査は6月8日に終了し、6月9日にすべての器材類を撤収して完了した。

〈調査の結果〉

1．層序(図2)

調査地の現標高は約11mで、調査時には層厚30cmの現代盛土がすべて除去されていた。現代盛土下は、以下で述べる遺構埋土のほかは赤褐色～褐色シルト質粘土層の地山層が調査区全体に露出してい

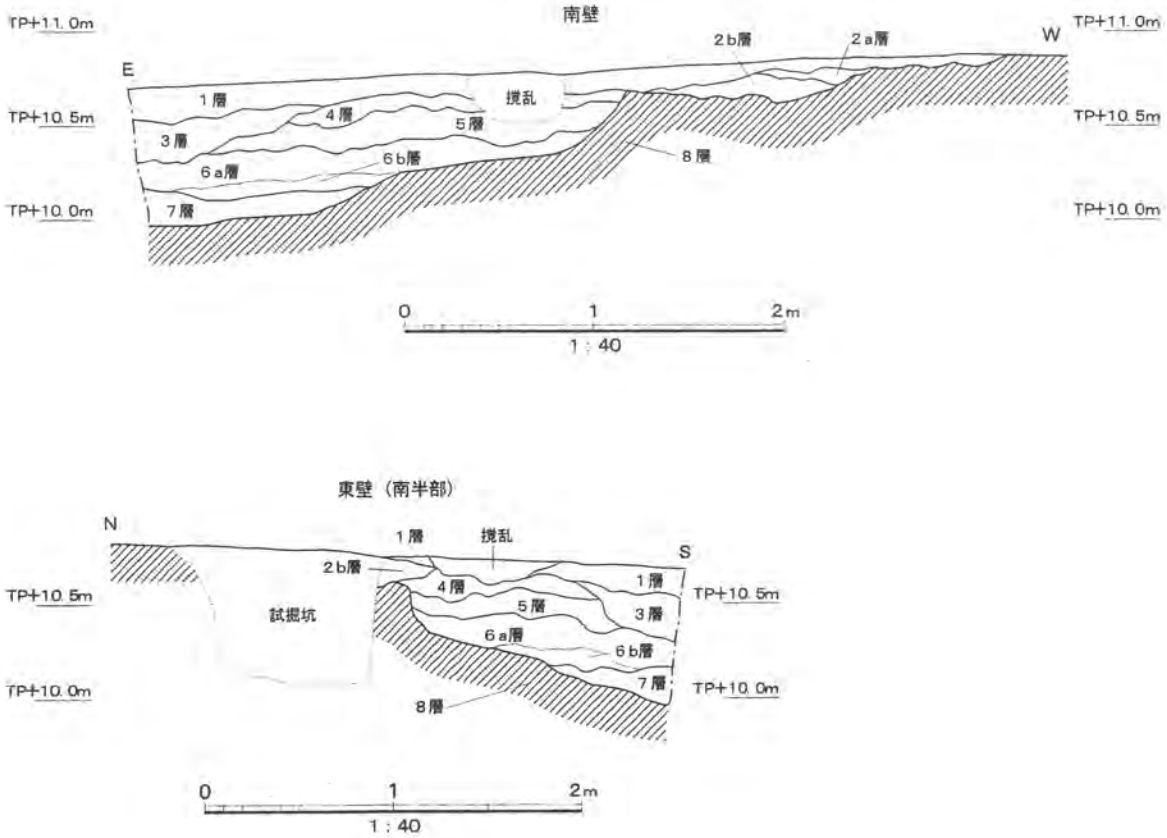



図2　南壁および東壁土層断面図

た。本来の遺構面や遺物包含層は後世の削平により失われていた。

調査区の南東側で、地山面に深く掘込まれた溝SD01・02の埋土が、比較的良好に残されていたので、以下、その地層を記載しておく。

第1層：オリーブ褐色細粒砂質シルトである。SD01・02がともに埋った後に堆積した地層で、作土層である。近世陶磁器などの細片が含まれていた。近世以降の堆積層とみられる。

第２～７層はいずれも溝の埋土である。第２層がSD01の埋土で、第３～７層がSD02の埋土である。

第2層はa・b層に細分される。下位層との関係から、第１層とほぼ同じ時期とみられる。

第2a層：褐色細粒砂質シルト層で、溝の上部の埋土である。

第2b層：黄褐色細粒砂質シルト層で、溝の下部の埋土である。

第3層：にぶい黄褐色細粒砂質シルト層で、SD02の上部の埋土である。近世陶磁器が出土した。

第4層：黄褐色～明褐色細礫混り細粒砂質シルト層で、溝を埋めた整地層である。数cm程度の地山に由来する偽礫を多く含む。本層からも近世の遺物が出土した。

第5層：オリーブ褐色～にぶい黄褐色細粒砂質シルト層である。瓦器・土師器などの細片が出土した。

第6層はa・b層に細分される。中世の堆積層である。

第6a層：黄褐色細粒砂質シルト層で、数cm程度の細礫を含む。

第6b層：褐色～黄褐色細粒砂質シルト層で、マンガン粒、酸化鉄の斑紋が顕著に認められる。

第7層：黄褐色細礫混りシルト質中粒砂層で、SD02を最初に埋めた水成層である。瓦・土師質の湊焼甕の細片のほか、鉱滓や炉壁片がまとまって出土した。甕の細片は、その特徴から室町時代後半期のものとみられる。したがって、SD02もこの時期に開削された可能性が高い。

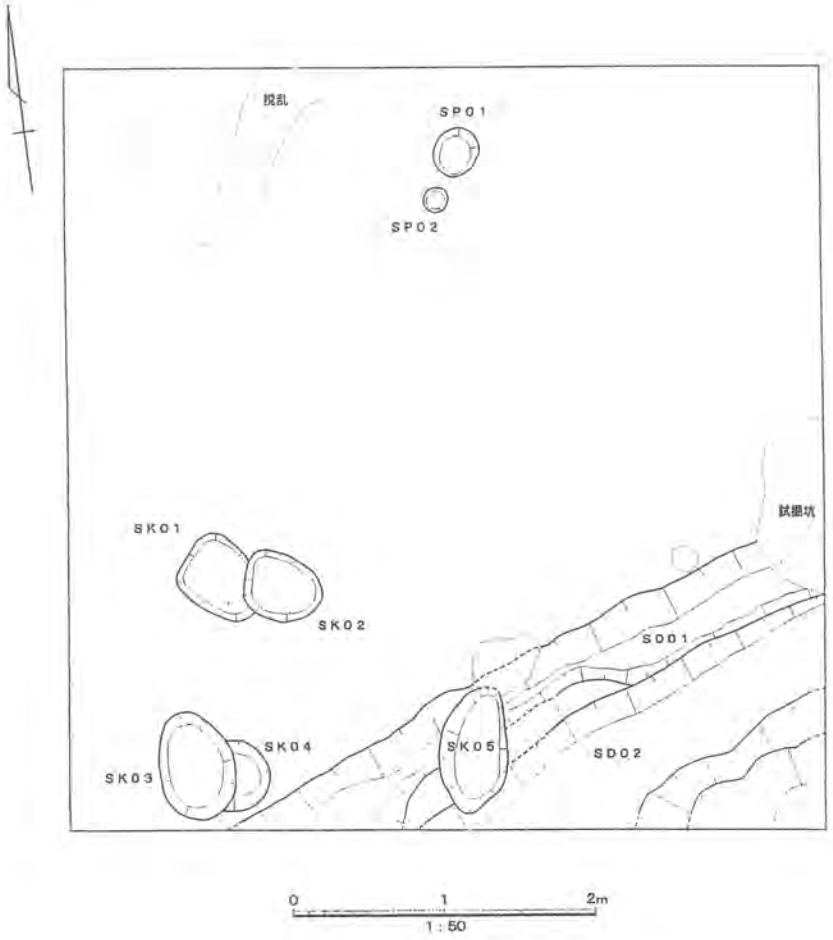



図3　検出遺構配置図

第8層：褐色～赤褐色砂礫混りシルト質粘土層である。本層は段丘構成層で、本地域における地山層である。

2．遺構と遺物

i)遺構(図3)

a．溝

調査区の南東でSD01・02を確認した。いずれも北東－南西方向の溝である。

SD01は幅50cmの溝で、出土遺物から近世以降に掘削されたとみられる。

SD02は出土遺物から、中世後半に掘削されたものと推定され、近世に入って、一旦埋戻されている(第4層)。その後、同方向の溝が南側に掘られている(第3層)。なお、SD01はこの溝(第3層)が機能しなくなった後に掘削されたものとみられる。

b．ピット

地山上面において、SP01・02のピット2基を検出した。深さは約10～15cmで、いずれも埋土は暗褐色粘土質シルトである。出土遺物は認められなかったが、埋土の特徴から後述の土壙と同じ時期とみられる。

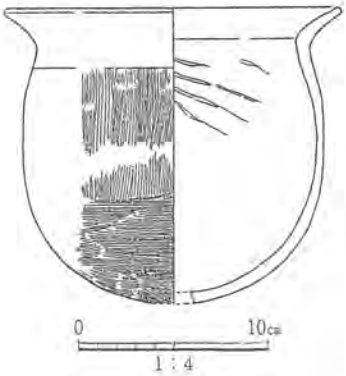


図4　SK04出土遺物

c．土壙

地山上面において、SK01～05の土壙5基を検出した。いずれも本来の遺構面が削平されていたため、深さは10～15cm程度と浅い。埋土は暗褐色粘土質シルトである。

SK04からは後述するように飛鳥Ⅳ～Ⅴ期の土師器甕が出土しており、遺構埋土の特徴がほかのピットや土壙と共通することから、これらの遺構はすべて同時期のものと見られる。土師器甕の年代から、SP01・02、SK01～05の形成時期は7世紀末から8世紀前葉と推定される。

ii)遺物

SD02の基底部から鉱滓・炉壁など、鋳造関連の遺物が出土した。共伴する土器の特徴から、室町時代後半期と推定される。

図4はSK04から出土した土師器甕である。個体の1／2程度が遺存していた。口径17.4cm、器高15.3cmで、体部が下膨れの球形である。調整は体部上半にタテハケ、下半から底部にはヨコハケが施されている。体部内面はヘラケズリによる調整が見られる。飛鳥Ⅳ～Ⅴ期のものである。

〈まとめ〉

今回の調査では、調査区全体が地山層まで削平を受けていたが、周辺地での調査成果と同様に、飛鳥時代および中世の遺構・遺物を認めることができた。特に、中世の溝から出土した鉱滓や炉壁片などの鋳造関連遺物は注意すべき資料である。山之内遺跡では、東地区北部の山之内元町を中心として14～17世紀の鋳造関連遺構・遺物が見つかっているが、本調査地はちょうどこの西側に当たる。西地区では本調査地のほかに、南側のYM91−11[大阪市文化財協会1998]、YM99−32、YM03−7からも鋳造関係遺物が出土しており、近年、その範囲は拡がりつつある。中世の山之内村にあった鋳物工房の実態は、なお不明な部分も少なくない。今回の調査によって、関連遺物のみではあるが、こうした問題に係わる新たな検討材料を提供できたものと思われる。

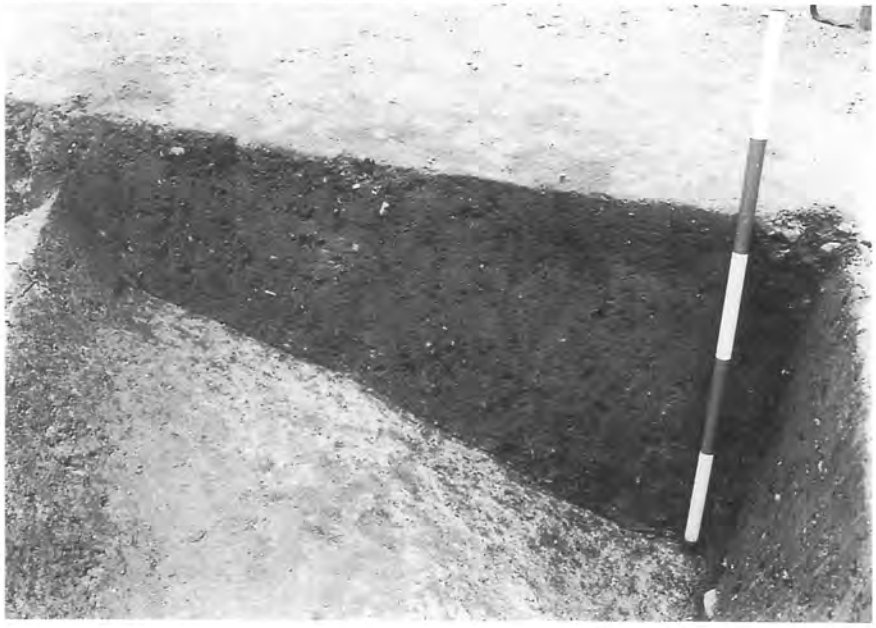
[引用・参考文献]

(財)大阪市文化財協会1998、『山之内遺跡発掘調査報告』
(財)大阪市文化財協会2004、『大阪市住吉区苅田4丁目所在遺跡発掘調査報告』

検出遺構全景
（東から）

SD01・02全景
（南西から）

SD02東壁断面
（南西から）



# 住吉行宮跡発掘調査（ＳＮ05－１）報告書

・調 査 個 所　　大阪市住吉区墨江2丁目6－20
・調 査 面 積　　25m²
・調 査 期 間　　平成18年3月8日～平成18年3月11日
・調 査 主 体　　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　　調査課長　田中清美、岡村勝行

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は大阪府史跡住吉行宮正殿跡の南、道一つ隔てた敷地に位置する(図1)。地形的には 上町台地南部の西縁に当り、南、西側に向って低くなっている。調査地周辺は古代には住吉津と呼ばれた港が存在し、交通の要衝として機能したと考えられている。また、南北朝時代には津守氏の居館が所在し、この地に後村上天皇が行幸したことが知られる。

周辺の既往の本調査・試掘調査では古代の遺物包含層が、SM87－4・88－3・88－4、SN95－1・98－5次調査で確認されており、このうち、SN95－1・SN98－5次調査では古代の柱穴が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000]。また、中世の遺物包含層は、SM87－1・88－4・89－2、SN95－1・98－5次調査で確認されており[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991]、このうち、SM88－4・95－1、SN98－5次調査で柱穴・土壙・溝などの遺構が検出されている。

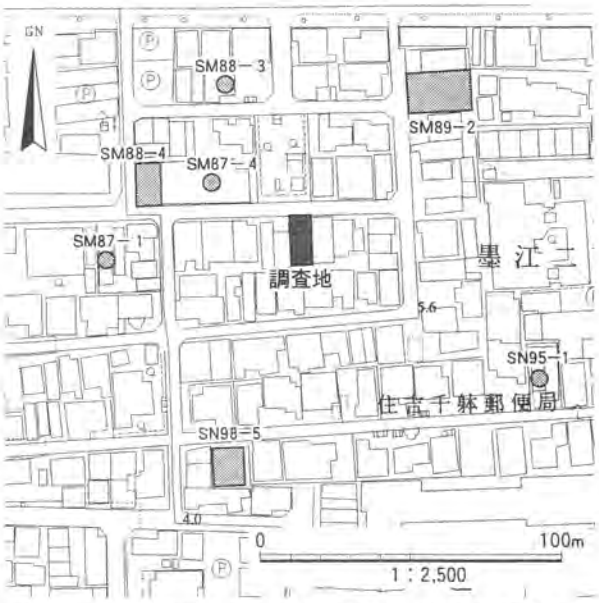


図１　今回の調査地と周辺の既往調査（○は試掘調査）

この度、当該地において建設工事が行われることになり、平成18年3月2日に大阪市教育委員会が試掘調査を実施したところ、地表下約50cmに中世の遺物包含層が確認され、本調査を行うこととなった。調査区は敷地南西寄りに南北8.3m、東西3.0mに設定し、地表下約50cmまでの現代盛土と近世盛土を重機で掘削し、それ以下を人力で掘進め、随時、図面・写真による記録に努めた。なお、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、挿図中ではTP±○mと記した。

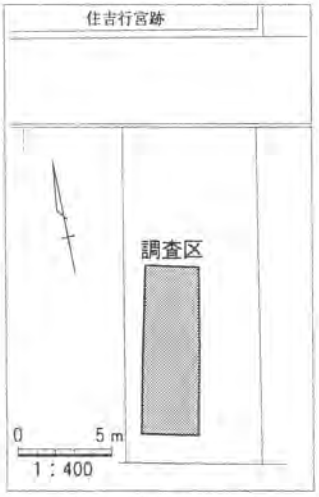


図２　調査区設定図

〈調査の結果〉

1.層序(図3)

本調査地での層序は以下のとおりである。

第1層:現代盛土層で、層厚は約20cmである。

第2層:暗褐色細砂粒質シルトで、層厚が約30cmの盛土層であり、a・b・c3層に細分できる。土器は瓦器や土師器など中世以前のものしか確認できなかったが、最下層から中国銭の乾隆通宝(初鋳1736年)が出土したことから、近世の盛土と考えられる。

第3層:にぶい黄褐色粘土質シルトを主体とし、地山に由来する粘土質シルトの偽礫を含む盛土層である。層厚約20cmで、瓦器、土師器、青磁など幅広い時期の中世遺物を含む。その時期の下限は14～15世紀頃である。

第4層:a・b2層に細分でき、上層は灰色細粒砂質シルト、下層は灰色粗粒砂からなる人為層であり、層厚はそれぞれ約10cmである。調査区で検出した中世遺構の埋土で、瓦器、土師器、瓦など幅広い時期の中世遺物を含む。その下限は14世紀である。

第5層:含砂礫黄褐色粘土質シルトの更新統地山層である。

2.遺構と遺物(図3・4)

1)中世以前の遺構と遺物

東壁沿いにおいて、第4b層基底面でSP501を検出した。調査区外に伸びるため正確な形、規模は不明だが、現状でやや歪な隅丸方形の柱穴であり、一辺0.9m、深さ0.4mある。埋土は黒褐色粘土質シルトである。径0.2mの柱痕跡が確認できた。遺物をまったく含まず、時期は不明であるが、周辺の調査で検出された古代の遺物包含層と類似することから、古代に遡る可能性がある。

古代の遺物1・5は中世の包含層から出土した。1は土師器椀の高台部であり、平安期のものと思われる。5は須恵器の杯Aで、奈良時代中頃～平安初頭に属する。

2)中世の遺構と遺物

中世の遺構はすべて第3層基底面で検出した。埋土は第4層である。遺物は総量はコンテナ半箱ぐらいであるが、小さな破片が多く、図示可能なものを図4に掲載した。

SX301は調査区の南部で検出された南方向への落込みで、長さは2.5m以上、深さは最も深い部分で0.2mである。底は平坦で、明確な耕作痕跡は認められない。瓦器、土師器が出土した。SE302は西壁沿いで検出された井戸である。調査区外に延びており、復元径は2.3mである。0.5mを掘削した時点で、埋土がしまりの悪い青灰色粗粒砂質シルトとなり、ピンポールで同様の埋土がさらに1m続くことを確認したが、隣家への影響を考え、掘削を止めた。第4層上層で完全に埋まっており、瓦器の細片が出土した。SK303は長さ1.0m、深さ0.1mの浅い土壙で、調査区外に延びる。SX304は調査区中央から北西方向への落込みである。2段に落ちており、長さ4.0m以上、深さは最も深い部分で0.3mである。底は平坦で、明確な耕作痕跡は認められない。埋土からは、瓦器6・7、土錘8、軒丸瓦9、軒平瓦10が出土した。6・7は和泉型の瓦器椀である。形態・調整の状況から、前者はおおむね14世紀代、後者は12世紀代のものと考えられる。8は環状土錘で、復元長8.0cm、

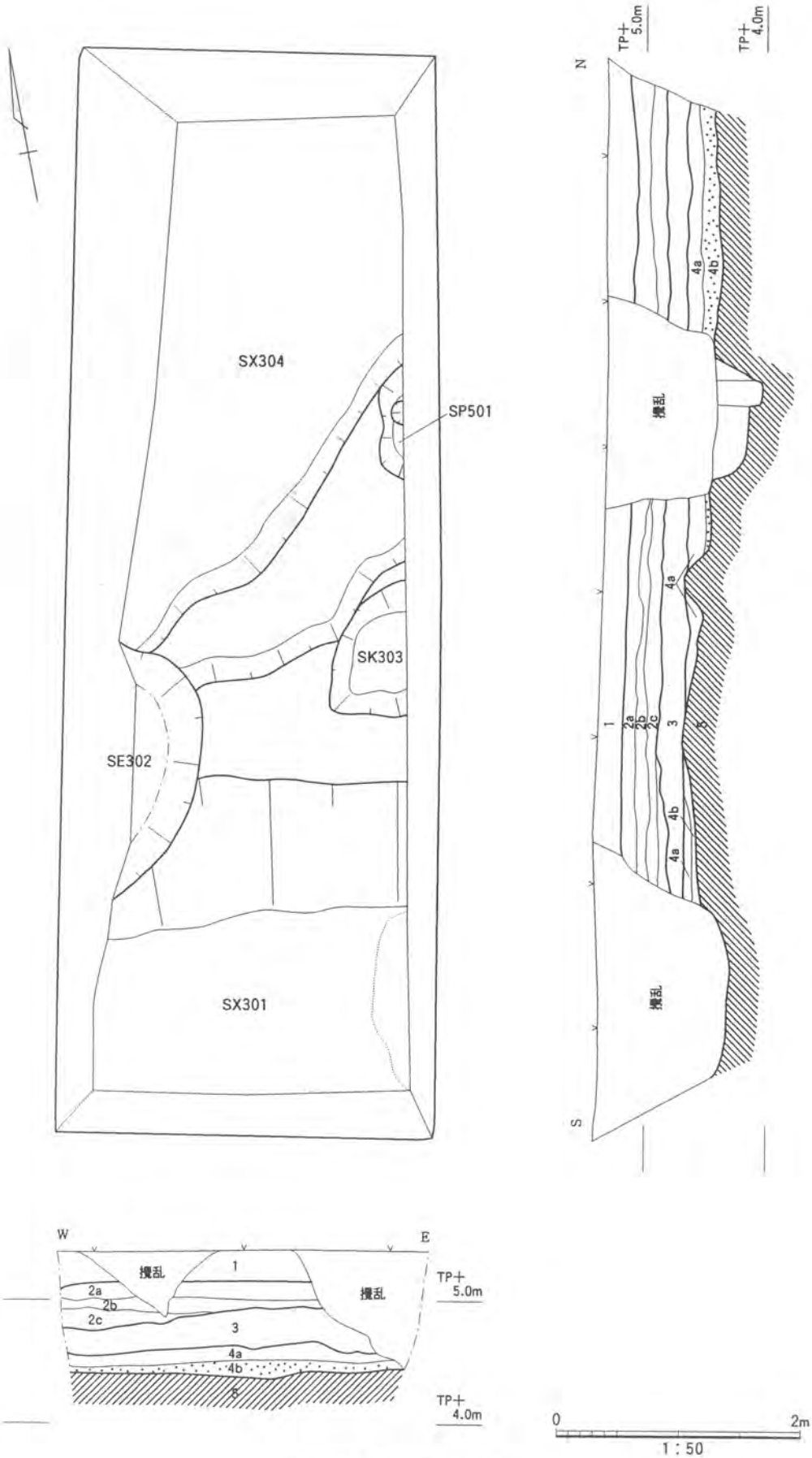

SX304
SP501
SK303
SE302
SX301
N
S
TP+ 5.0m
TP+ 4.0m
撹乱
4a
4b
1
2a
2b
2c
3
R
W
E
TP+ 5.0m
TP+ 4.0m
0
2m
1 : 50

図3　調査区の平・断面図

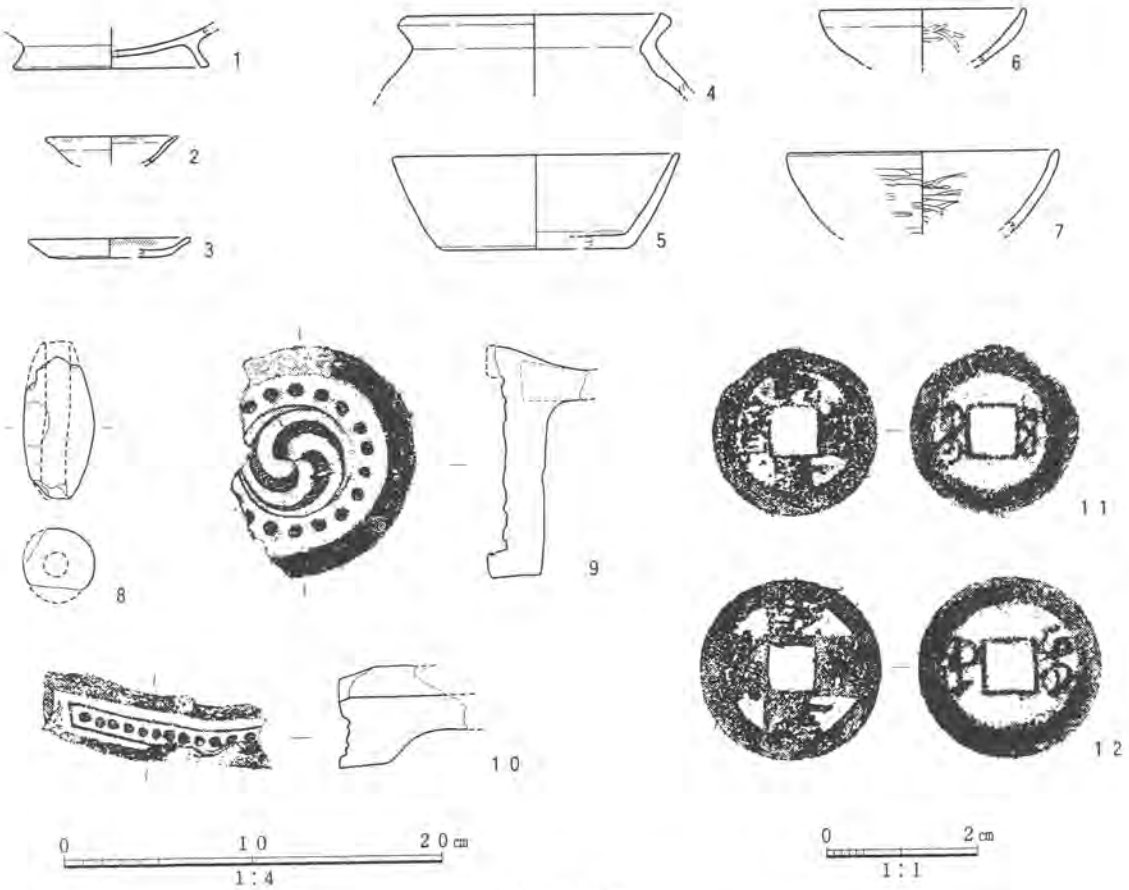



図4 出土遺物

第4a層(1)、第3層(2～5)、SX403(6～10)、第2層(11·12)

径4.0cmである。9は巴文軒丸瓦で、瓦当面の径12.0cmと小振りである。巴文頭部が削り取られ、文様の凹凸が少ない。10は連珠文軒平瓦で、界線が施され、大きめの珠文を密に配される。顎裏面は緩やかな曲線をなす。瓦当面下端に焼成前の抉りがあり、やや粗野な作りである。復元幅約24.cmである。

そのほか、第3層からは土師器の皿2·3、甕4、須恵器杯5が出土した。2は下半部を欠くが、器壁が薄く、へそ皿と考えられ、おおむね14～15世紀のものである。口縁部の内面に油煙が付着しており、灯明皿として利用されている。3も内面に油煙が付着する灯明皿である。4は土師器甕で、口縁部が斜上方に開き、端部はシャープである。

3)近世の遺物

第2層から、中国清代の乾隆通宝11·12が出土した。前者は径2.2cm、後者は2.4cmである。

〈まとめ〉

今回の調査では中世を中心とした遺構と古代～近世までの遺物を検出し、遺跡中央部の状況を知る重要な材料を得ることができた。柱穴は周辺の調査から古代に遡る可能性が高く、居住域を想定できる。また、中世では、限られた面積のため、落込みの性格が良くわからないが、井戸の存在から、調査区が居住域あるいは生産活動の場として利用されていることは確実である。

今回の調査は小規模ながら、住吉行宮跡の実態を知る貴重な知見とともに、今後の周辺地域の調査のための手がかりが得られたといえる。

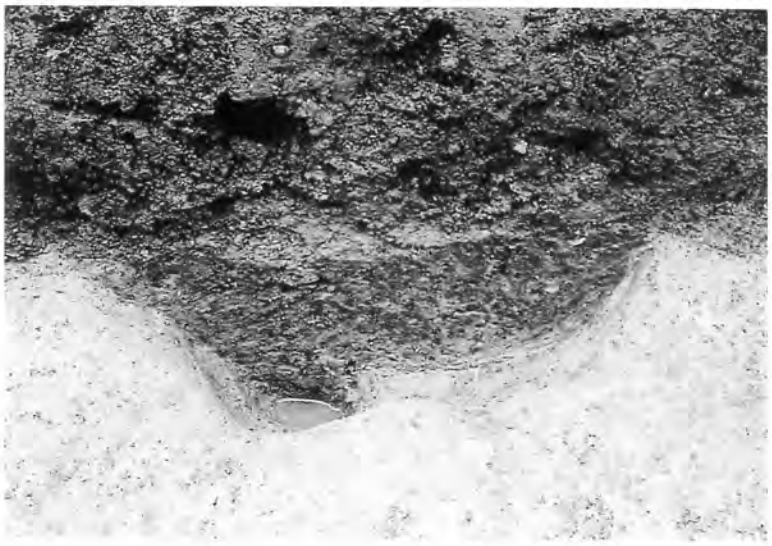
## 引用文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991、「木下邸建設に伴う住吉行宮跡発掘調査(SM89－2)略報」:『平成元年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.233－238

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000、「一二氏による建設工事に伴う発掘調査(SN98－5)」:『平成10年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.103－107

遺構検出状況
（北から）

SP501
（西から）



SE302
（東から）

# Ⅷ 東 住 吉 区

# 桑津遺跡発掘調査（ＫＷ05－１）報告書

・調 査 個 所　大阪市東住吉区桑津５丁目
・調 査 面 積　15㎡
・調 査 期 間　平成17年10月13日～平成17年10月15日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　田中清美、小倉徹也

〈調査に至る経緯と経過〉

桑津遺跡は大阪市東住吉区桑津・駒川・西今川・北田辺に広がる弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡で、大阪府下を代表する弥生時代の遺跡として知られている。調査地はその中央西側に位置する(図１)。調査地周辺では、本調査地北側で行われたKW87－23次調査において弥生時代の溝と土器棺墓、飛鳥・奈良時代と室町時代の溝などの遺構が検出され、弥生時代中期の土器群、弥生時代後期の土器、菱形刺突文のある有蓋高杯などの初期須恵器が出土している。その東側で行われたKW88－36次調査では弥生時代の土壙、奈良時代と室町時代の溝などが検出され、畿内第Ⅲ様式新段階から第Ⅳ様式に比定される弥生土器や、凸基有茎式石鏃などの遺物が出土している。また、調査地の南西側で行われたKW88－21次調査では古代の土壙が検出され、複弁蓮華文軒丸瓦や打製石剣の尖端部が出土している[大阪市文化財協会1998]。

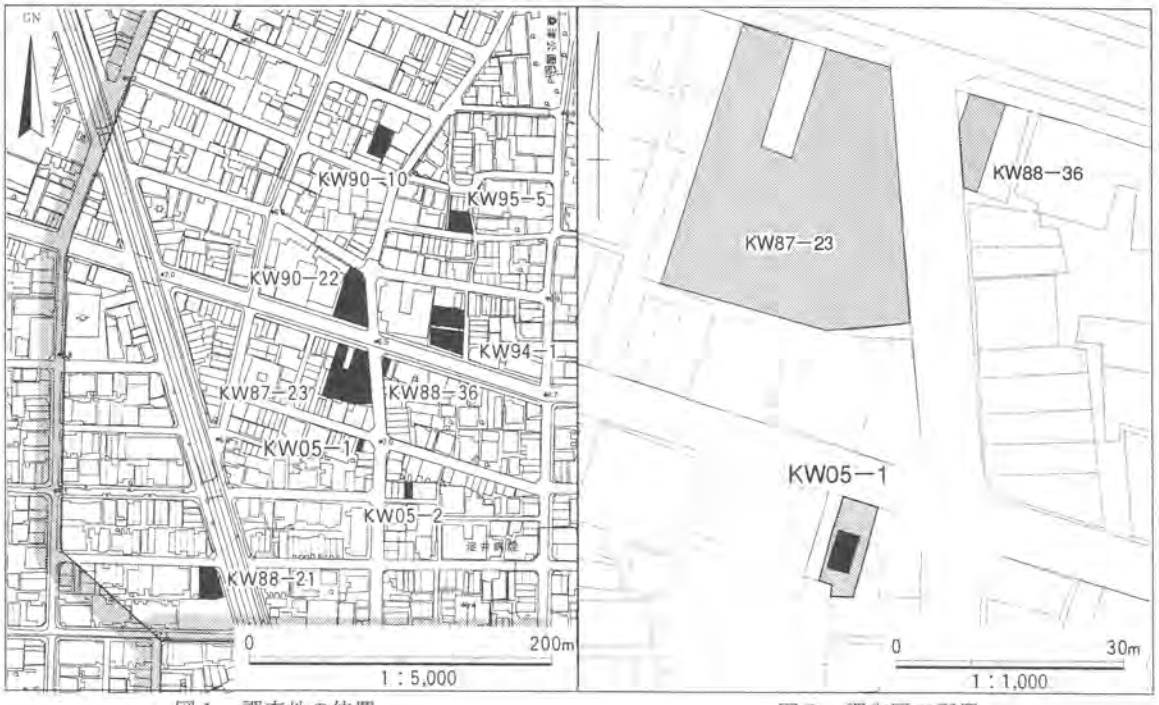



図１　調査地の位置　　図２　調査区の配置

住宅の建替えに伴い、平成17年10月11日に行われた試掘調査で、現代盛土の直下から古代および中世と思われる遺構と遺物が確認された。この結果を受け、工事に先立って発掘調査を実施することになった。敷地内の南寄りに調査区を設定して(図２)、平成17年10月13日から本調査を行なった。

調査はまず、重機によって現代盛土を除去した後、以下を人力によって掘下げた。その結果、中世以前と考えられるピットが確認された。10月14日に遺構の実測・写真撮影などの記録作業を終え、翌10月15日に埋戻し作業および器材類の撤収を含めた現地におけるすべての作業を完了した。

以下の報告で使用した図面に示す標高はTP値、方位は図１が座標北、それ以外は磁北である。

〈調査の結果〉

１．層序　(表１、図３・４)

現地表面下約0.9m(TP+6.2m)までの地層を観察した。以下に層序の概略を記し、各層の岩相や特徴を表１に、東壁および南壁地層断面を図３、西壁地層断面を図４に示す。

第０層：近・現代の盛土層で、層厚は５～45cmである。

第１層：上部は黄橙色のシルト混り粗～中粒砂からなり、下部は黄灰色の粗～中粒砂からなる段丘構成層で、層厚は70cm以上である。木の根が顕著であった。

表１　調査地の層序

| KW05-1 層序 | 岩相 | 層厚 (cm) | 特徴 | 遺構 | おもな遺物 | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 第0層 | 近・現代盛土 | 5～45 | | ←SP01 | — | 現代 近代 |
| 第1層 | 上部　黄橙色シルト混り粗～中粒砂 | 70< | 木の根が顕著 (埋土は灰色細粒砂混りシルト) | | | 旧石器 |
| | 下部　黄灰色 粗～中粒砂 | | | | | |

凡例　←上面検出遺構

図３　東壁および南壁地層断面

図４　西壁地層断面

２．遺構と遺物　(図５～７)

平面的な調査は第１層上面において行い、ピットSP01を確認した。遺構検出状況を図５、SP01断面を図６、出土遺物を図７に示す。

SP01　中央部で確認したピットで、直径22cm深さ23cmのほぼ円形の遺構である。埋土は極粗粒砂

図5　遺構検出状況

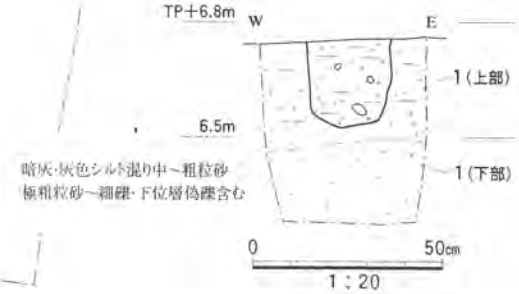



図6　SP01断面

～細礫や下位層の偽礫を含む、暗灰色ないし灰色のシルト混り中～粗粒砂からなり、堅くよく締まっていた。柱痕跡は観察されず、周囲にもこれと組み合うピットは認められなかった。遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、埋土の岩相と周辺の調査成果から中世かそれ以前と考えた。

なお、土壙が3基確認されたが、その埋土から石鏃や弥生土器・土師器・須恵器とともに「安民」と書かれた青色透明のガラス瓶が出土した。このガラス瓶は、現在の大阪市生野区にあるロート製薬株式会社の前身「信天堂山田安民薬房」で製造された目薬の容器であることが判明した。信天堂山田安民薬房で目薬の製造が開始された1909(明治42)年以降のことで、これら3基の土壙は明治時代以降のものであると考えられた。よって、3基の土壙は遺構から除いている。

前述の土壙から古代以前の遺物が多く出土したため、今後の資料として掲載することにする。

1は主剥離面側の基部および尖端を欠損しているが最大長2.3cm、最大幅1.1cm、最大厚0.3cmの円基式石鏃である。身部の外縁を細部調整している。2～14は近代土壙から出土したものである。2は弥

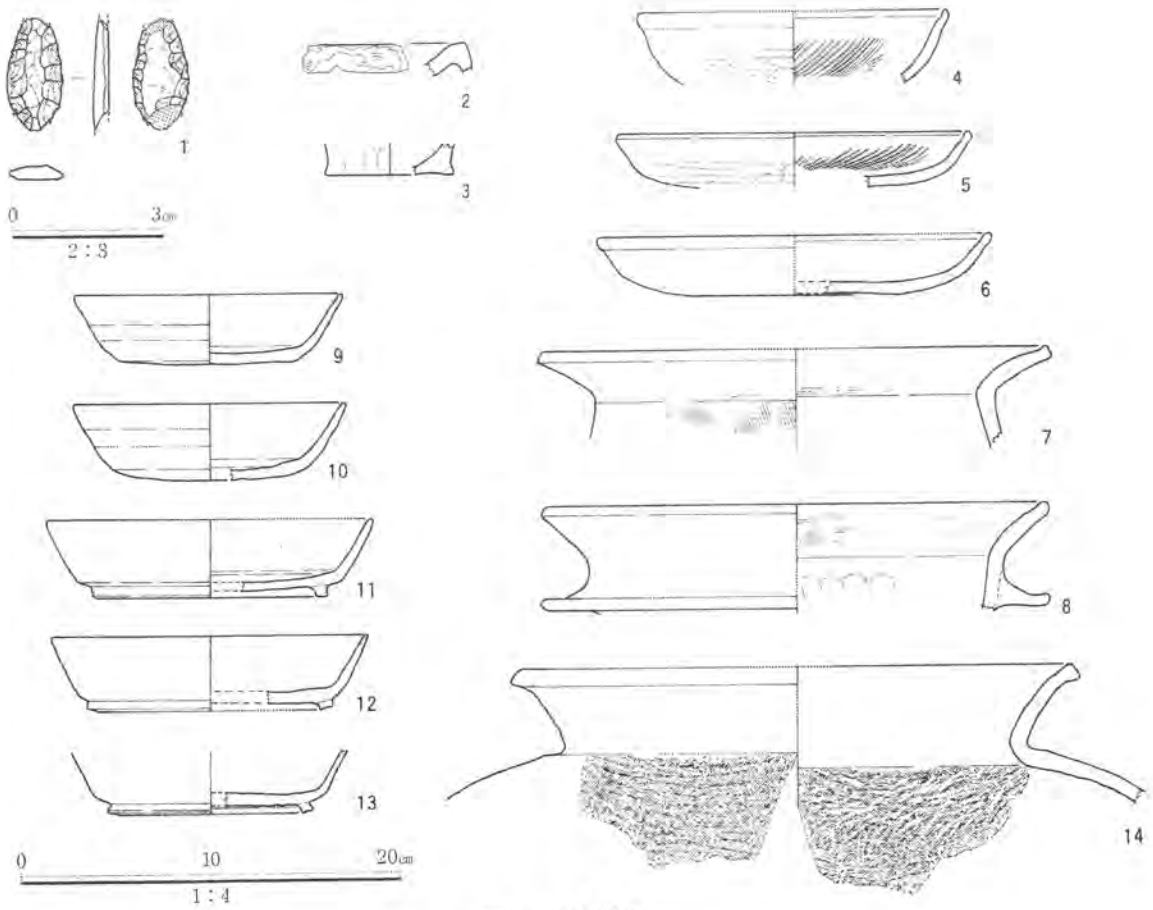



図7　出土遺物

1：第1層、2～14：土壙

生土器広口壺の口縁部の破片で、下端が垂下する。口縁部端面には櫛描波状文が施されている。3は底径6.8cmの弥生土器甕の底部である。外面にはユビオサエが残る。1～3は弥生時代中期後葉に属するものである。

4は口径16.1cm、器高3.8cmの土師器杯Aで、口縁端部を丸くおさめるが、内面ににぶい段がある。体部の内面に正放射暗文、外面に横方向のヘラケズリを施している。5・6は口径18.4cmと20.5cmの土師器皿で、ともに口縁端部を丸くおさめている。体部の内面に正放射暗文、外面に横方向のヘラケズリを施している。6の体部の調整は内外面ともヨコナデである。以上の色調は橙色で、焼成は良い。7は口径26.4cmの土師器甕である。体部の外面はハケ調整、内面はナデ整えている。口縁部の調整は内面にヨコハケが残るが、内外面ともヨコナデである。色調や胎土は上述した土師器と変わらない。8は口径26.1cmの土師器羽釜の口頸部である。口縁部の内面にヨコハケが残るが、内外面とも調整はヨコナデである。頸部の内面はユビナデ調整している。色調は茶褐色で、焼成は良い。胎土は河内産で、微細な長石・黒雲母・角閃石粒を多く含む。

9・10は口径14.0cmと14.2cm、器高3.7cmと4.0cmの須恵器杯Aである。ともに体部の内外面をヨコナデ調整している。9は底部の裏面を中心部を残してヘラケズリ調整するが、10は未調整である。11～13は底部の外縁に高台を貼り付けた須恵器杯Bである。11・12は口径17.1cmと16.6cm、器高4.1cmと4.0cmで、後者の高台の位地は前者に比べて器体の外側にある。14は口径28.9cm、器高7.4cmの須恵

器甕で、体部の上半以下を欠損している。口縁部の下端を外側に肥厚しており、頸部の外面にはヘラ記号がある。体部の外面を粗い格子タタキで整形しており、内面には当て具痕がある。

以上の土師器・須恵器は平城京土器Ⅱ～Ⅲに属するもので、8世紀中葉から後葉のものと考えられる。このほかに凸面に斜格子タタキを施した平瓦の破片が出土している。色調は黄橙色を呈しており、二次的な火を受けているものと思われる。南方に位地する田辺廃寺に関わる瓦であろう。

〈まとめ〉

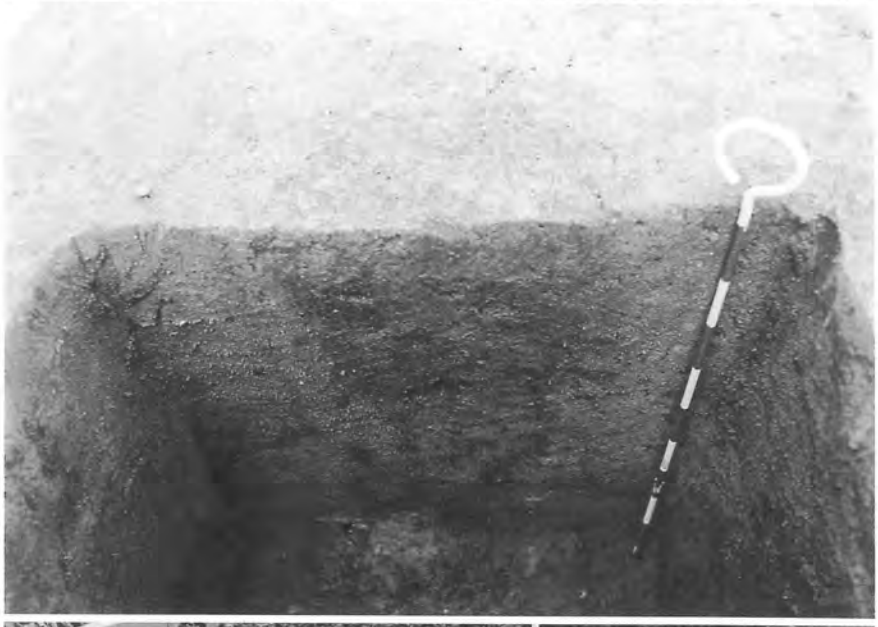
今回の調査地は弥生時代から平安時代にかけての遺構・遺物が特に密集する地域であったが、近・現代以降に削剥されていたため、検出された遺構はピットが1基のみであった。しかし、近代の土壙から、円基式石鏃や弥生時代中期後葉に属する弥生土器・土師器・須恵器と、田辺廃寺に関わると推測される瓦などの多くの遺物を得ることができた。これらの遺物は、上述の周辺の調査成果を裏付けるものである。今後、調査地周辺で行われる調査の結果を合わせて、人間活動や土地利用の変遷についてさらに検討していくことが必要である。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1998、『桑津遺跡発掘調査報告』

調査地全景
第１層上面検出状況
（北から）

SP01断面
（南から）



土壙断面状況
（北西から）

# 桑津遺跡発掘調査（KW05－2）報告書

・調査個所　　東住吉区桑津５丁目35－15
・調査面積　　68㎡
・調査期間　　平成17年11月11日～平成17年11月19日
・調査主体　　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　　調査課長　田中清美

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は桑津遺跡の西部に位置している(図１)。周辺ではこれまで多くの調査がなされており、弥生時代中期前葉から後葉をはじめ、古墳時代中期から江戸時代にかけての遺構や遺物が検出されている[大阪市文化財協会1998]。特に調査地と道路一筋隔てて位置するKW98－３次調査地(図１・２)では弥生時代中期の柱穴群をはじめ、古墳時代中期に機能を終えたと推定された大溝SD03、奈良時代の掘立柱建物SB01・02などが検出されており、周辺地域にも同様な遺構が分布しているものと思われた[大阪市文化財協会2001]。本調査地についても、事前に大阪市教育委員会が試掘を行ったところ、弥生土器や須恵器・土師器を含む地層が確認されたため、発掘調査を実施することになった。

調査は後述する第１層の表土層および第２層の重機掘削から着手した。この後、人力で当地域の地

図１　調査地の位置

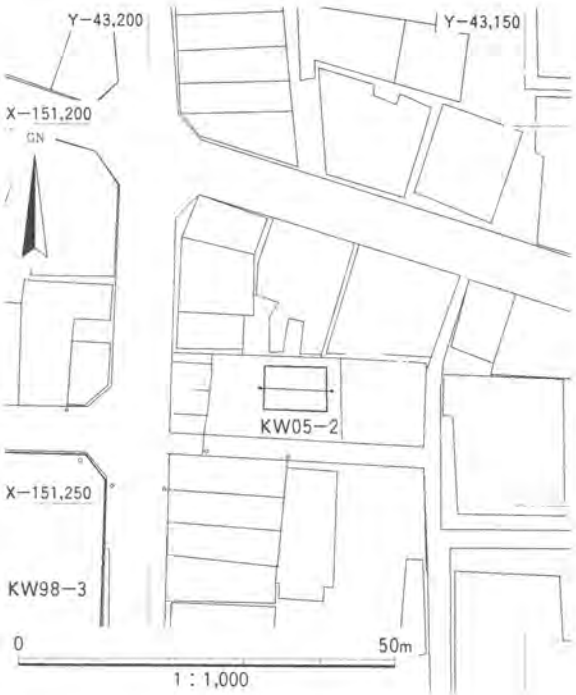



図２　調査区の配置

山層である第５層の上面まで掘削して遺構・遺物の検出作業を行った。この間、遺構の実測図の作成、写真撮影を適時行い、11月19日には埋戻しを含めて現地におけるすべての作業を完了した。

調査で用いた水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP±○m」と記した。図に用いた座標値は大阪市道路現況図(１：500)を基に導いた世界測地系によるものである。

〈調査の結果〉

ｉ．層序と遺物(図３・６)

本調査地の基本的な層序は以下のとおりである。

第１層：褐色砂礫混りシルト層で、層厚は10～20cmあり、現代の整地層である。本層上面の標高はTP+7.5m前後あり、周辺より幾分高くなっている。これは1931(昭和６)年に施工された区画整理時に調査地の周辺が地下げされたことによるものと思われる。

第２層：褐色シルト混り砂礫～砂礫を含むにぶい黄褐色シルト層で、層厚は10～25cmある。本層は下層の第３層以下の偽礫を多量に含んでおり、基底面で耕作痕跡や乾痕が観察されたほか、近代の陶磁器の細片を含むことから、上述した区画整理以前の作土の可能性がある。

第３層：黒褐色砂礫混りシルト層で、層厚は10～50cmある。弥生時代中期から奈良時代にかけての多量の土器類が出土した。本層内の検出遺構には、奈良時代の土器類を含む溝SD02～05や多数の柱穴がある(図４)。

1～19は第３層出土の遺物である(図６)。これ以外にも図化していないが多量の弥生時代中期の土器片をはじめ、サヌカイト製の石器遺物や結晶片岩製の磨製石庖丁、砂岩製の磨石などが出土している。土師器は蓋1、杯Ａ2～4、皿Ａ7・9、皿Ｂ8、甕10、高杯脚部5、羽釜6などがある。このうち、色調が茶褐色を呈し、胎土中に角閃石粒を多量に含む羽釜6は生駒西麓産の土師器である。以上の土師器の時期は既述した須恵器と同様に８世紀中葉に属するものと思われる。須恵器は杯Ａ13・14、杯Ｂ15～17、把手付椀18、短頸壺11、鉄鉢12などがある。このうちTK208～TK23型式に属する把手付椀18以外は８世紀中葉に属するものであろう。平瓦19は凹面に布目、凸面に縄タタキが見られるもので、須恵質に焼成されている。８世紀代に属するもので、調査地の南方に位置する田辺廃寺に係わるものである。

第４層：暗褐色細粒砂混りシルト・にぶい黄褐色砂礫混りシルト、黒褐色砂礫混りシルトなどで、弥生時代中期および同後期末の遺構の埋土として確認した。本層準の主な遺構には竪穴建物SB01、土壙SK01～03、土器を埋納した柱穴SP19、柱穴群、溝SD01などがある(図４)。

第５層：細粒砂を含む明褐色粘土質シルト、砂礫を含む褐色粘土質シルト、褐色細粒砂混り粘土質シルト、明褐色シルト混り細粒砂などからなる段丘構成層で、層厚は1.2m以上ある。本層の標高はTP+7.2m前後あり、上面で弥生時代中期および同後期末の多数の遺構が検出された。

ii．遺構と遺物

ａ)弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の主な遺構には既述したように竪穴建物SB01、土壙SK01～03、土器を埋納した柱穴

SP19、柱穴群、溝SD01などがある。以下、出土遺物を含めて報告する。

SB01(図４)　調査地の北東部に位置する平面形が直径約５ｍの円形プランの竪穴建物である。上部を後世の遺構によって攪拌されており、検出面から床面までの深さは10cm前後であった。主柱穴は２個所あり、それぞれ建物の中央部の土壙SK03の両端に位置している。柱穴の直径は25～30cm、深さ20cm前後あった。土壙SK03は南北50cm、東西約130cm、深さ約50cmあり、上層の細粒砂を含むにぶい黄褐色シルト、第５層の偽礫を含む下層の黄褐色砂礫混りシルトに二分され、弥生時代中期前葉の土器片をはじめ、サヌカイト製の剥片や破砕片が出土した。周溝は検出面で幅15～20cm、深さ10cm前後あり、埋土は砂礫を含む褐色シルトであった。床面上には灰褐色シルトが見られたが、貼り床は確認できなかった。SB01の時期は床面から遺物が出土しなかったことから断定しがたいが、SK03から出土した甕31からみて、弥生時代中期前葉の可能性がある。また、周辺より幾分高い床面中央部を切込む弥生時代中期後葉の多数の柱穴をはじめ、建物の北西部を掘り込む土壙SK01を確認した。

SK01(図４・５)　調査地の北部に位置する東西約150cm、南北75cm前後、深さ約26cmの土壙である。埋土は暗褐色細粒砂混りシルト質粘土、炭粒を含む黒褐色細粒砂混り粘土質シルトで、後述するような弥生時代中期後葉の土器をはじめ、サヌカイト製の剥片などが出土した(図７)。

甕33は器高約28cmに復元された。口縁端部を上方に拡張しており、体部の調整は外面がタテハケの後、左上がりのハケ、内面は右上がりのヘラケズリの後、頸部近くに左上がりのハケを施している。甕34は体部の中程以上を欠損しているが、調整は外面がタテハケ、内面は縦方向のヘラケズリである。高杯の脚部35は柱状部の上半以上を欠損しており、調整は器体の外面を縦方向のヘラケズリ、内面はナデである。鉢61は口径が約42cmに復元された大型の土器で、段状の口縁部は無文である。体部の調整は外面が粗いヨコハケで、内面はナデである。以上の土器は弥生時代中期後葉に属するものである。

SP19(図４・６)　SK01の西端を切るSP19は直径約30cm、深さ約20cmの柱穴で、直径約15cmの柱痕跡が確認された。内部から弥生時代中期前葉から後葉にかけての甕や壺の底部20～23の４点が重なった状態で出土した(図６)。

SD01(図４・５・７)　SB01の南側に位置する幅2.3m、深さ約1.2mで、横断面形がＶ字状の大溝である。溝内には下から灰褐色シルト混り細粒砂～にぶい赤褐色シルト混り細粒砂(最下層)、黒褐色シルト混り細粒砂(下層)、黒褐色細粒砂混り粘土質シルト(中層)、黒褐色砂礫混りシルト(上層)が堆積しており、このうち、最下層および下層は水成層である。上・中層は第５層の偽礫を多く含む客土であり、第３層に相当する。以上の埋土から後述する弥生時代中・後期および奈良時代中期を主体とする土器類が出土したが、このうち、最下層および下層がSD01の機能していた時期に堆積した地層と考えられた。なお、本溝の底は中央部が幅30～40cm、深さ15cm前後で深くなっていたが、この段差は溝の改修に伴うものと考えられる。以下、本溝の出土遺物について記述する。

土師器杯Ａ36、須恵器杯Ａ39、土師器皿Ａ37、土師器杯38は最上層から出土した土器である。古墳時代中期後半の土師器杯38以外は８世紀中葉に属するものとみられる。40～42は上層出土の土器類で、古墳時代中期後半の甕40、弥生時代後期末の壺42、弥生時代中期後葉の広口壺41などがある。

43～45・49・53は中層出土の土器類で、弥生時代中期後葉の細頸壺43以外の頸部下端に突帯が巡る広口壺44、体部を細筋のタタキで整形した甕45・49・53は弥生時代後期末に属するものである。46～48・50～52・54は下層出土の土器類である。体部を細筋の平行タタキで整形した甕46・47・54、底径約３㎝で、中央に径0.5～0.7㎝の穿孔のある底部52などは弥生時代後期末に属するものである。55～60は最下層出土の土器および土製品で、高杯59の杯部の調整は、内外面ともに縦方向のヘラミガキである。口縁部が二段に開く広口壺60の口縁部の下端には３個一単位の円形浮文がある。管状土錘58は直径約３㎝、長さ約6.5㎝あり、中央部に径0.6㎝の孔を穿つ。これらは弥生時代後期末に属するものである。

以上の遺物の出土状況および地層の堆積状況を考慮すると、SD01は弥生時代後期末頃に機能していたものと考えられる。ところで、上述した弥生時代後期末の土器であるが、庄内式土器が供伴しない土器群として注目すべきものである。

b)奈良時代の遺構と遺物

SD02(図４・６)　調査地の西壁際で検出した幅60㎝、深さ30㎝前後、横断面が逆台形の南北方向の溝である。溝内には水つきの第５層の偽礫を含む黒褐色砂礫混りシルトが堆積しており、奈良時代の土器類が出土した(図６)。

土師器は小型の平底鉢24、皿Ａ25・26・28、皿Ｂ27がある。このうち、26・28の内面には正放射暗文と螺旋状の暗文が施されている。これらは８世紀中葉頃に属するものであろう。

SD03(図４)　後述するSD05の東側に位置する南北方向の幅65㎝前後、深さ約15㎝の溝で、埋土は水つきの暗褐色細粒砂混りシルトである。奈良時代と考えられる土師器・須恵器の破片が出土した。本溝の西約6.5m離れて位置するSD02とは規模や方向が似ている。また、東に位置しているSD04は遺構の過半が調査範囲外であり、南部も後世に削平されて残りは悪いが、埋土はSD03と同様の第３層準に属するものであった。

SD05(図４・６)　調査地のほぼ中央に位置する幅70～130㎝、深さ約15㎝の溝状の遺構で、北端は南端に比べて細くなっている。埋土は第５層準の偽礫を含む暗褐色シルトで、奈良時代の土器類が出土した(図６)。

土師器甕29・30は口径16～18㎝、器高14～16.5㎝あり、ともに体部の調整は外面がタテハケの後、横方向のハケで、内面は縦方向のナデおよびユビオサエである。８世紀中葉頃に属するものと思われる。

〈まとめ〉

本調査では調査地のほぼ全域に渡って弥生時代中期および同後期末をはじめ、奈良時代の遺構が確認されたほか、古墳時代中期を含む土器類が出土した。特に弥生時代中期前葉の可能性のある竪穴建物SB01は、中央に位置する土壙の両端近くに２本の柱穴を設ける構造で、これまでにも桑津遺跡で確認されているほか、大阪市域では本遺跡の南方に位置する山之内遺跡において複数例が知られている。これらの竪穴建物の構造は朝鮮半島の青銅器時代の集落遺跡で確認されている「松菊里型住居」と

呼ばれる竪穴建物に系譜が求められるもので、両地域の交流史を究明する上で重要な資料である。

一方、SD01は幅2.3m、深さ約1.2mで断面形がV字形の大溝であり、埋土の特徴や出土遺物から判断して、本調査地と道を隔てて南西に位置するKW98−3次調査地で検出した大溝SD03と一連の遺構と思われる。本溝は規模や横断面の形態からみて、弥生時代前期以来、列島各地に展開した環濠集落に付随した大溝と同様な遺構と考えられる。桑津遺跡ではこれまでにも遺跡の南部で、弥生時代中期後葉の環濠の一部と推定される大溝が確認されているが、SD01の時期は弥生時代後期末であり、両者の時期が異なる点は重要である。桑津遺跡の弥生時代中期後葉の環濠集落は、同後期以後は廃絶したと考えたが、SD01は弥生時代後期末になって新たな集落が当地域に営まれたことを示唆している。今後、周辺部の調査が進展すればSD01の実態のみならず、桑津遺跡の弥生時代後期末頃の集落の具体的な様相についても明らかになるものと思われる。

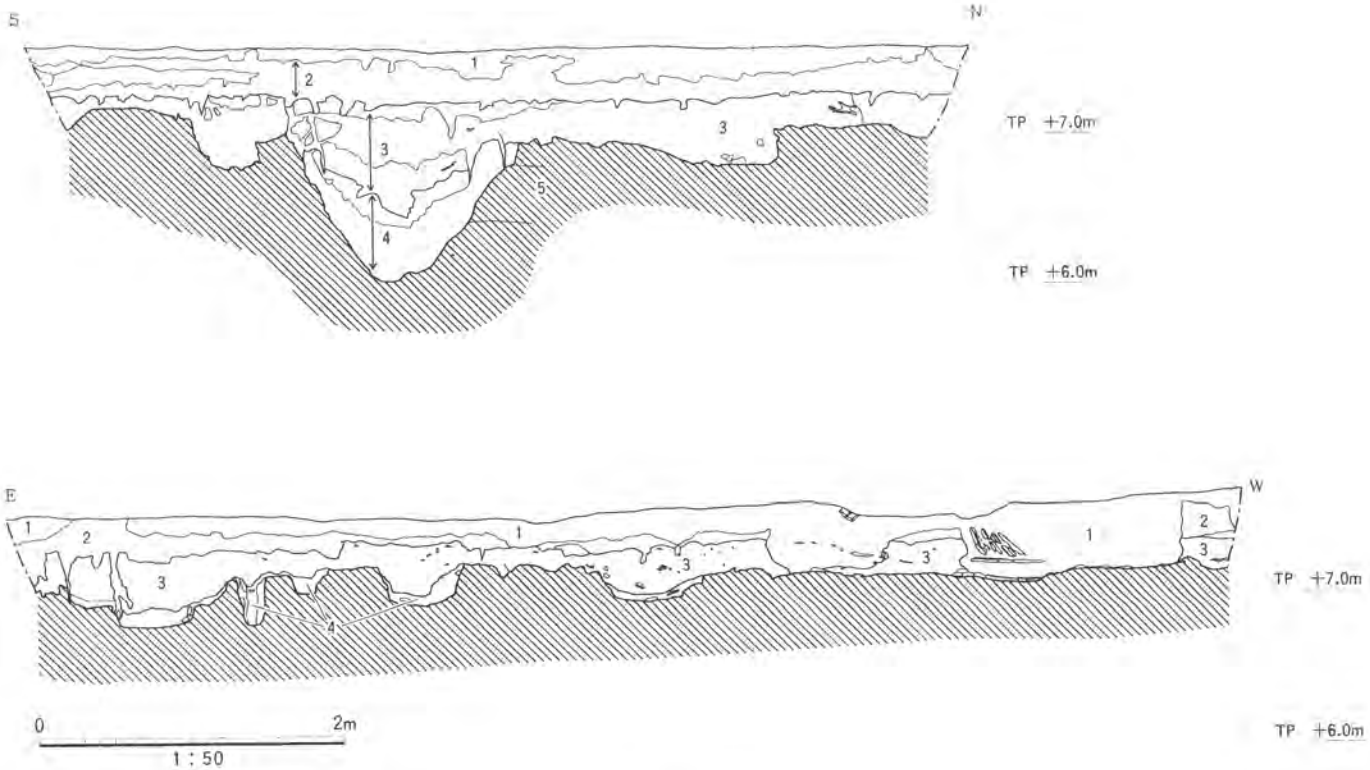
次に本調査では奈良時代の遺構・遺物を比較的多く検出することができた。これらの資料は調査地の南方に位置する田辺廃寺が建立された時期に属するものであり、田辺廃寺の寺域外の具体的な状況を考察する上での基礎的な資料となった。

以上、本調査では断片的ながら、弥生時代から奈良時代にかけての多岐に渡る資料を得ることができた。今後、周辺部の調査で蓄積されている成果も含めて検討を加え、当地域の遺跡の実態について明らかにしたい。

（参考文献）

大阪市文化財協会1998、『桑津遺跡発掘調査報告』

2001、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』1998年度




1：第1層（褐色砂礫混りシルト～オリーブ褐色砂礫混りシルト）
2：第2層（褐色シルト混り砂礫～含砂礫黄褐色シルト）
3：第3層（黒褐色砂礫混りシルト）
4：第4層（暗褐色細粒砂混りシルト・にぶい黄褐色砂礫混りシルト・黒褐色砂礫混りシルト）
5：第5層（含細粒砂明褐色粘土質シルト・含砂礫褐色粘土質シルト・褐色細粒砂混り粘土質シルト・明褐色シルト混り細粒砂）

図3　西壁・南壁断面

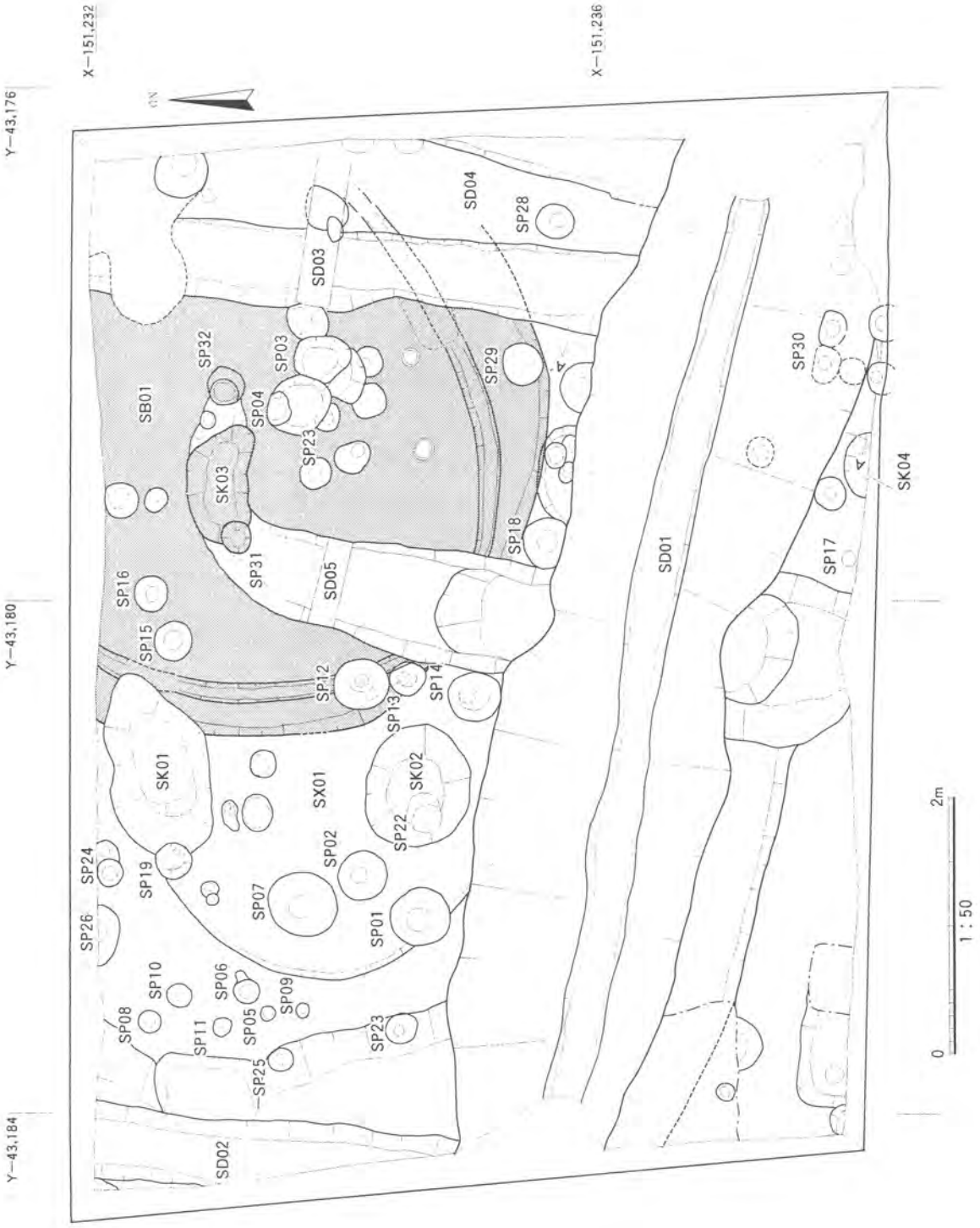
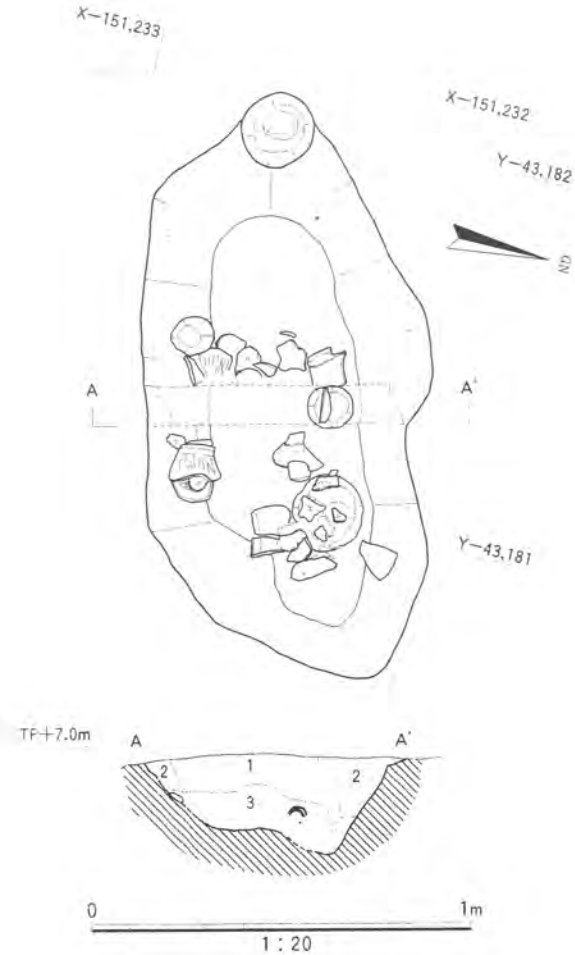
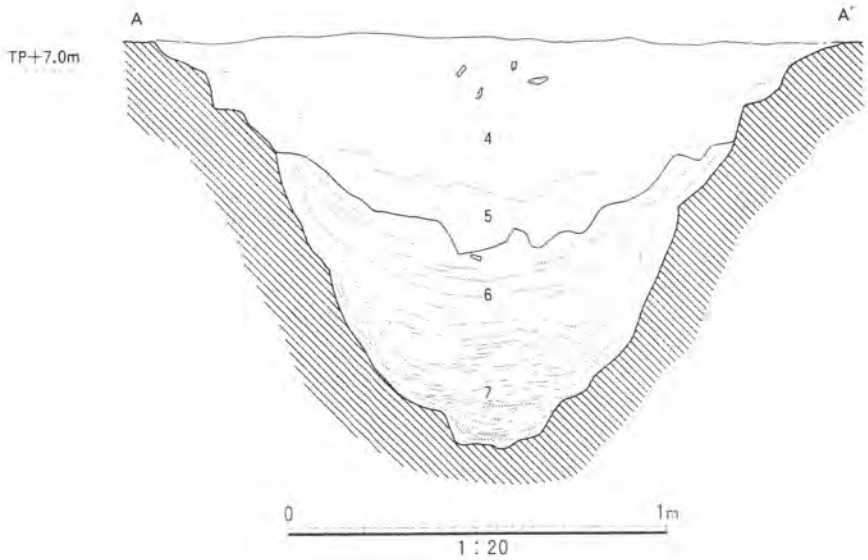



図4　弥生時代中・後期および奈良時代の遺構平面




1：暗褐色細粒砂混りシルト質粘土（炭粒含む）
2：黒褐色細粒砂混り粘土質シルト（炭粒含む）
3：黒褐色細粒砂混り粘土質シルト（炭粒含む）




4：黒褐色砂礫混りシルト（上層）
5：黒褐色細粒砂混り粘土質シルト（中層）
6：黒褐色シルト混り細粒砂（下層）
7：灰褐色シルト混り細粒砂～にぶい赤褐色シルト混り細粒砂（最下層）

図5　SK01（上図）平・断面およびSD01南北セクション西壁断面（下図）

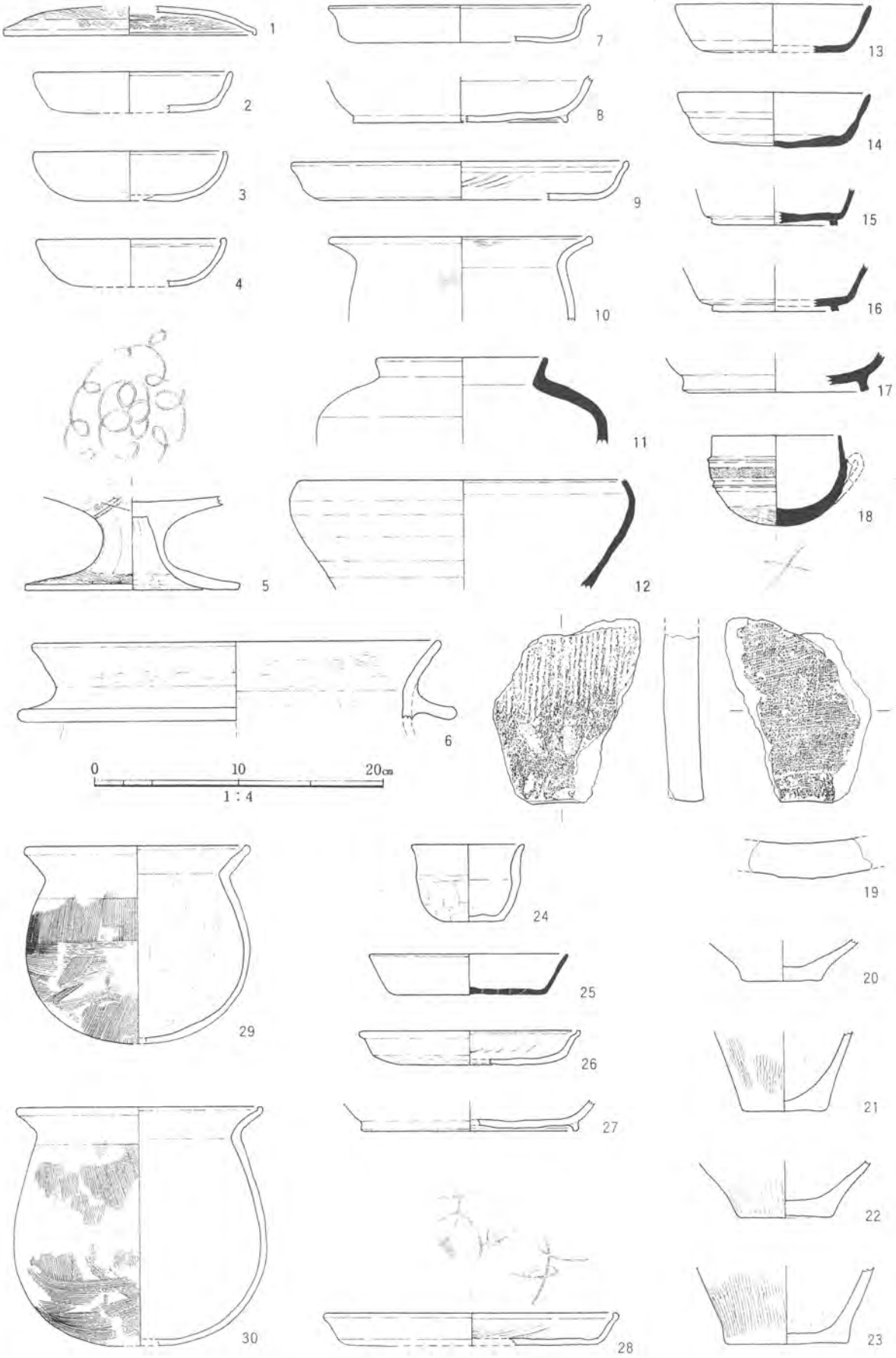



図６　第３層および遺構出土遺物

１～19：第３層、20～23：SP19、24～28：SD02、29・30：SD05

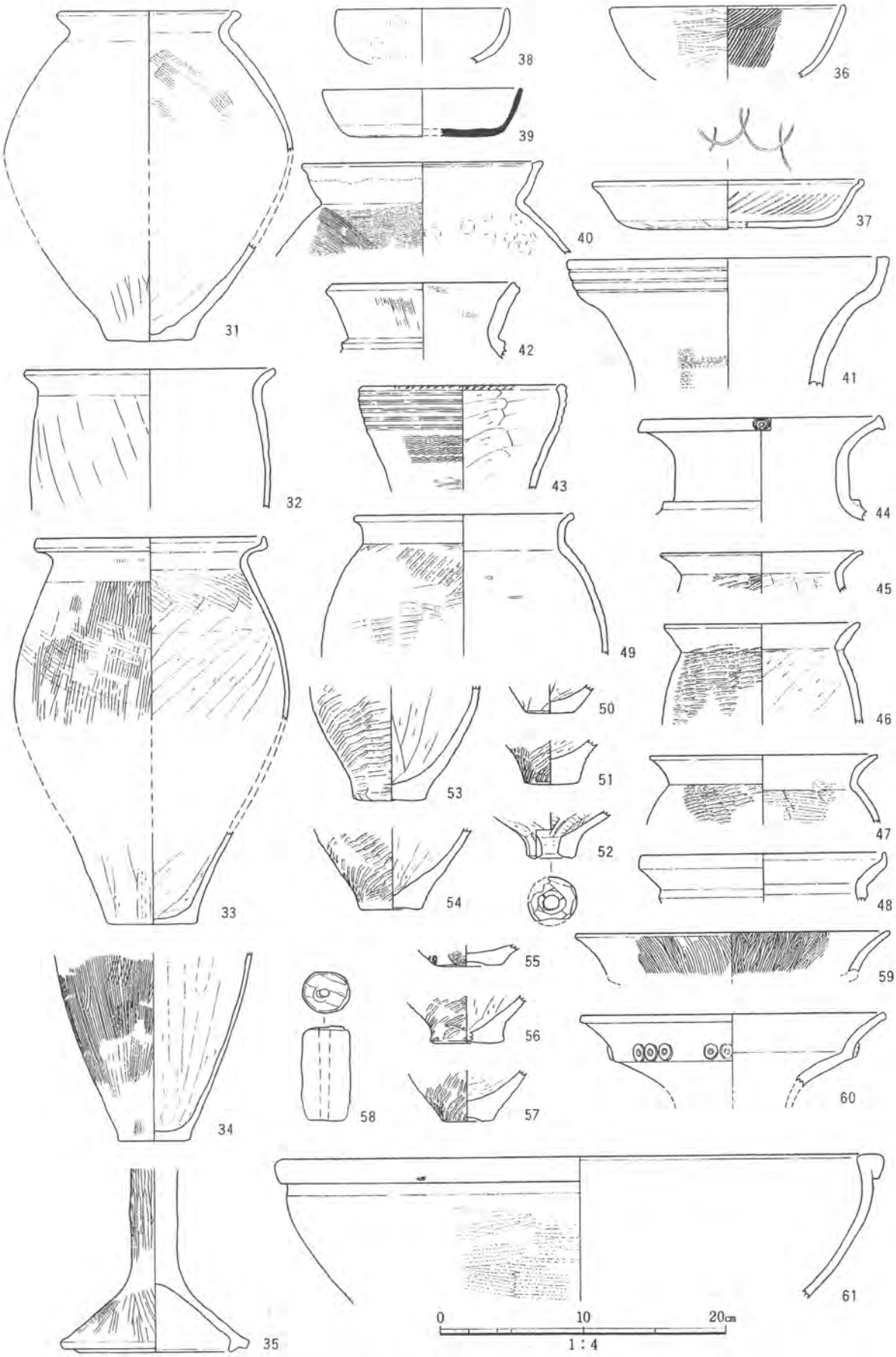


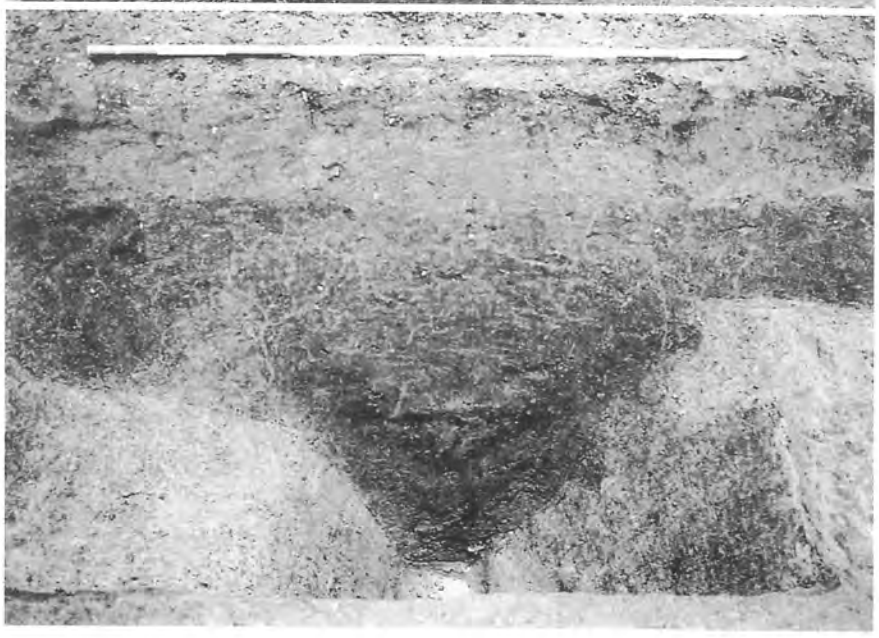

図７　遺構出土遺物

31：SP03、32：SK03、33～35・61：SK01、36～39：SD01最上層(第３層)、40～42：SD01上層、
43～45・49・53：SD01中層、46～48・50～52・54：SD01下層、55～60：SD01最下層

弥生時代中期後葉・後期末および奈良時代の遺構全景（西から）

弥生時代中期後葉の竪穴建物SB01全景（東南から）

弥生時代後期末の溝SD01西壁断面（東から）



平成17年度　大阪市内埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

発行日　平成18年9月30日

発行　大阪市教育委員会
㈶大阪市文化財協会

編集　大阪市教育委員会文化財保護課
（大阪市北区中之島1－3－20）

印刷　和泉出版印刷株式会社